

仙台市文化財調査報告書第247集

五本松窯跡ほか

—発掘調査報告書—

2000年 3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第247集

五本松窯跡ほか

—発掘調査報告書—

2000年 3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市内には約700ヵ所の遺跡が存在し、年間にそれらの遺跡に
関係する開発や建築は260件以上あります。それらの行為にたいして、
文化財保護法の定めにより、それぞれの工事内容を審査したうえで、立会調査や発撫調査の対応をすることになっております。

この報告書では、平成11年度に実施しました調査のなかで、比較的小規模な調査である5件をまとめて報告することになりました。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私達の大きな責務であると考えております。文化財の保護につきましては、地域の皆様の深い御理解と御協力が必要となります。その意味でも今回の発見が、それぞれの地域の歴史を説き明かしていくための貴重な資料となり、この報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習の場で活用されれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際しまして御協力いただきました地元の皆様はじめ、関係された方々に心より御礼申し上げます。

2000年3月

仙台市教育委員会

教育長 小 松 弥 生

例　　言

1. 本書は、民間開発事業に關わる陸奥國分尼寺跡（第9次調査）・山口遺跡（第16次調査）・山田条里遺跡（第4次調査）、仙台市関連事業に關わる五本松窯跡、東北郵政局事業に關わる山田条里遺跡（第5次調査）の發掘調査報告書である。
2. 本書の編集は、仙台市教育委員会文化財課・工藤信一郎が担当し、本文の執筆等については、下記のとおり分担した。なお、山田条里遺跡の石器の石材鑑定は主浜朗光が行った。

五本松窯跡……………篠原信彦
陸奥國分尼寺跡……………工藤信一郎・農村幸宏
山田条里遺跡……………半間亮輔
山口遺跡……………佐藤　洋

3. 本調査における出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

凡　　例

1. 本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1：50,000「仙台」の一部を使用している。
2. 本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原1973）を使用した。
3. 実測図中の水系高は標高で統一している。
4. 実測図中の方位は「山田条里遺跡」については真北を示し、その他の遺跡については磁北で統一している。仙台市において磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
5. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
S B：建物跡 S I：堅穴住居跡・堅穴遺構 S D：溝跡 S K：土坑 P：ピット・柱穴
S O：席　跡 S X：性格不明遺構 S R：河川跡
6. 本書で使用した遺物略号は次のとおりで、それぞれ種類別に番号を付した。
B：弥生土器 C：土師器（ロクロ不使用） D：土師器（ロクロ使用） E：須恵器 F：軒丸瓦・丸瓦
G：軒平瓦・平瓦 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品 N：金銅製品 P：土製品
7. 「山田条里遺跡」の遺構断面図中におけるスクリーントーンは灰白色火山灰（庄子・山田1980）を示す。

目 次

第1編 五本松窓跡（第3次調査）	1
1. 調査要項	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査に至る経過と調査方法	1
4. 発見遺構と出土遺物	5
5. まとめ	21
第2編 陸奥国分尼寺跡（第9次調査）	31
1. 調査要項	31
2. 遺跡の位置と環境	32
3. 調査の方法と基本層序	32
4. 発見された遺構と出土遺物	34
5. まとめ	50
第3編 山田条里遺跡（第4次調査・第5次調査）	57
第Ⅰ章 はじめに	57
第1節 調査要項	57
第2節 遺跡の概要	58
第3節 基本層序	62
第Ⅱ章 第4次調査	68
第1節 調査方法	68
第2節 1区の調査	69
第3節 2区の調査	75
第4節 プラントオパール分析	88
第5節 まとめ	92
第Ⅲ章 第5次調査	103
第1節 調査方法	103
第2節 1区の調査	103
第3節 2区の調査	106
第4節 まとめ	111
第4編 山口遺跡（第16次調査）	115
1. 調査要項	115
2. 遺跡の位置と環境	115
3. 調査に至る経過と調査方法	116
4. 基本層序	116
5. 発見遺構と出土遺物	117
6. まとめ	120

第1編 五本松窯跡（第3次調査）

1. 調査要項

遺 跡 名 五本松窯跡D地点（宮城県遺跡番号 01047）

調 査 地 点 仙台市青葉区台原森林公園703番6 地内

調 査 原 因 台原けん銃射撃場跡地等造成

調査対象面積 約400m²

調 査 面 積 約160m²

調 査 期 間 確認調査 平成11年5月20日

本 勘 壱 平成11年8月23日～9月2日

調 査 主 体 仙台市教育委員会

調 査 担 当 仙台市教育委員会文化財課

担 当 職 員 篠原信彦 工藤信一郎 吉岡恭平 伊東真文

調査参加者 赤間淳子 植沼幸子 菊地和江 庄子善昭 鈴木貴美子 曽根ちよ子 稲田ふくよ

針生せつ子

申 請 者 大蔵省東北財務局

調 査 協 力 渡邊泰伸

2. 遺跡の位置と環境

五本松窯跡は、JR仙台駅の北側約3.3km離れた仙台市地下鉄「台原駅」周辺に位置している。仙台市の北部は青葉区と泉区を南北するように七北田丘陵が東西に走り、北側は七北田川、南側は広瀬川が東流している。国道4号線より東側の丘陵は、通称「台原・小田原丘陵」と呼ばれ、西側から東端部に向かって傾斜している。

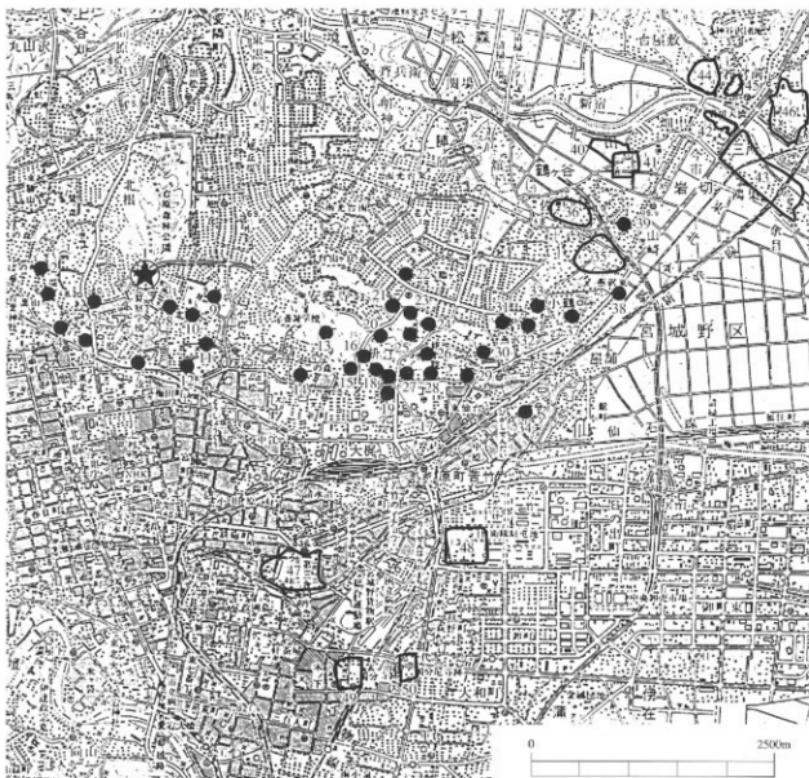
堤町から東仙台にかけての標高50m～100mの南側斜面上には多くの窯跡群が点在し、これまで約30ヶ所以上の窯跡が発見され、古くから「台原・小田原窯跡群」と呼ばれている。この台原・小田原窯跡群は古代の窯業地帯として知られており、これまで堤町窯跡・安養寺中圓瓦窯跡・安養寺下瓦窯跡・大蓮寺窯跡・神明社窯跡・橋江遺跡（窯跡）・庚申前窯跡・五本松窯跡などが発掘調査され、古代の多賀城や陸奥国分寺・尼寺の焼根を葺いた瓦や須恵器などが供給されている。

五本松窯跡は台原・小田原窯跡群の西部に位置し、その主要分布範囲は台原森林公園の東側に当たり、北東方向に入り込んだ沢に面した丘陵斜面上に点在し、地下鉄建設に伴う分布調査によりA～H地点で窯跡の存在等が指摘されている。E地点については地下鉄台原駅付近に当たるが、地下鉄建設に伴う調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。

3. 調査に至る経過と調査方法

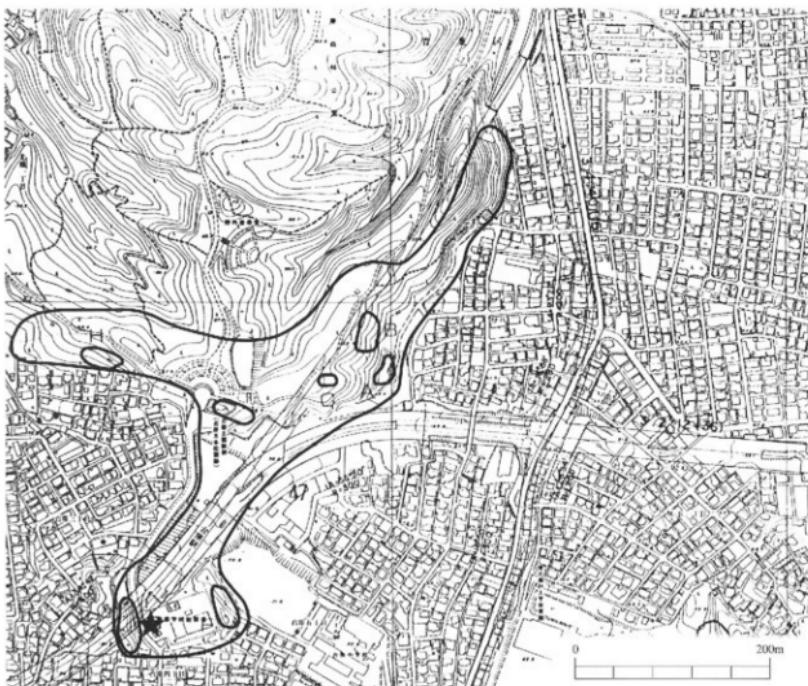
五本松窯跡はこれまで2次にわたり本格的な発掘調査が実施されている。第1次調査は、昭和47年度にG地点で実施された調査であり、平安時代の丸窯跡1基が検出されている。第2次調査は、昭和60・61年度にD地点で実施された調査で、今回の開発予定地北西部に隣接する都市計画道路「川内・南小泉線」建設に伴って調査が行われ、平安時代の丸窯跡15基が検出され、宝相花文・陰刻花文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦、丸瓦、平瓦や須恵器などが出土している。

今回の調査は、平成11年2月19日に大蔵省東北財務局長から提出された「台原けん銃射撃場跡地造成に伴う理藏文化財のかかわりについての協議書」に基づいて実施した。この開発地区は第2次調査地点の東に隣接し、大部分



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	五本松 寶満	丘陵斜面	平安	26	安達下瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安
2	六曲瓦窯跡	丘陵斜面	平安	27	小田原前玉瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安
3	通町廻塚丘陵跡	丘陵斜面	平安	28	土手廻瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安
4	通町廻塚	丘陵斜面	平安	29	天廻古窯跡	丘陵斜面	古墳-奈良
5	鬼谷一本松瓦窯跡	丘陵斜面	平安	30	飛只会陰窯跡	丘陵斜面	古墳-奈良
6	鬼谷一本松瓦窯跡	丘陵斜面	平安-古墳	31	笛吹寺横穴墓	丘陵斜面	古墳
7	移造瓦窯跡	丘陵斜面	近世	32	吉光寺三枝穴墓	丘陵斜面	古墳
8	北之丁山斜面	丘陵斜面	平安	33	北之谷吉清窯跡	丘陵	古墳
9	西光沢窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	34	新田北町清窯跡	丘陵斜面	平安
10	小田原長命坂瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	35	船戸瓦窯跡	丘陵	穂文-奈良-古墳
11	長合瓦窯跡	丘陵斜面	平安	36	藤沢沢窯跡	丘陵	穂文-奈良-平安
12	五城十字校石瓦窯跡	丘陵斜面	平安	37	五郎山青瓦窯跡	丘陵	古墳
13	今森瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安-近世	38	櫻谷瓦窯跡	丘陵	古墳
14	横山中質瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	39	牛久人瓦窯跡	丘陵	古墳
15	二の森瓦窯跡	丘陵斜面	平安	40	岩切廻塚	丘陵	古墳-近世
16	伊川瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	41	猪俣瓦窯跡	丘陵斜面	中世
17	神明社瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	42	今当瓦窯跡	丘陵斜面	平安-中世
18	神明社瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	43	通ノ里瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-古墳-奈良-平安-中世
19	神明社瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	44	東光寺窯跡	丘陵斜面	中世
20	安樂寺配水池瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	45	若宮寺窯跡	丘陵斜面	穂文-古墳-平安-中世-近世
21	三吉西側瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	46	岡ノ口瓦窯跡	丘陵斜面	吉野-奈良-平安-中世-近世
22	鶴ヶ谷二丁目窯跡	丘陵斜面	平安	47	四分梗瓦窯跡	丘陵	中世
23	安樂寺下岡瓦窯跡	丘陵斜面	奈良-平安	48	南日岐瓦窯跡	丘陵斜面	中世
24	安樂寺下岡瓦窯跡	丘陵斜面	平安	49	御園分寺跡	丘陵	奈良-平安
25	安樂寺川上空手	丘陵斜面	平安	50	御園分寺跡	丘陵	奈良-平安

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡



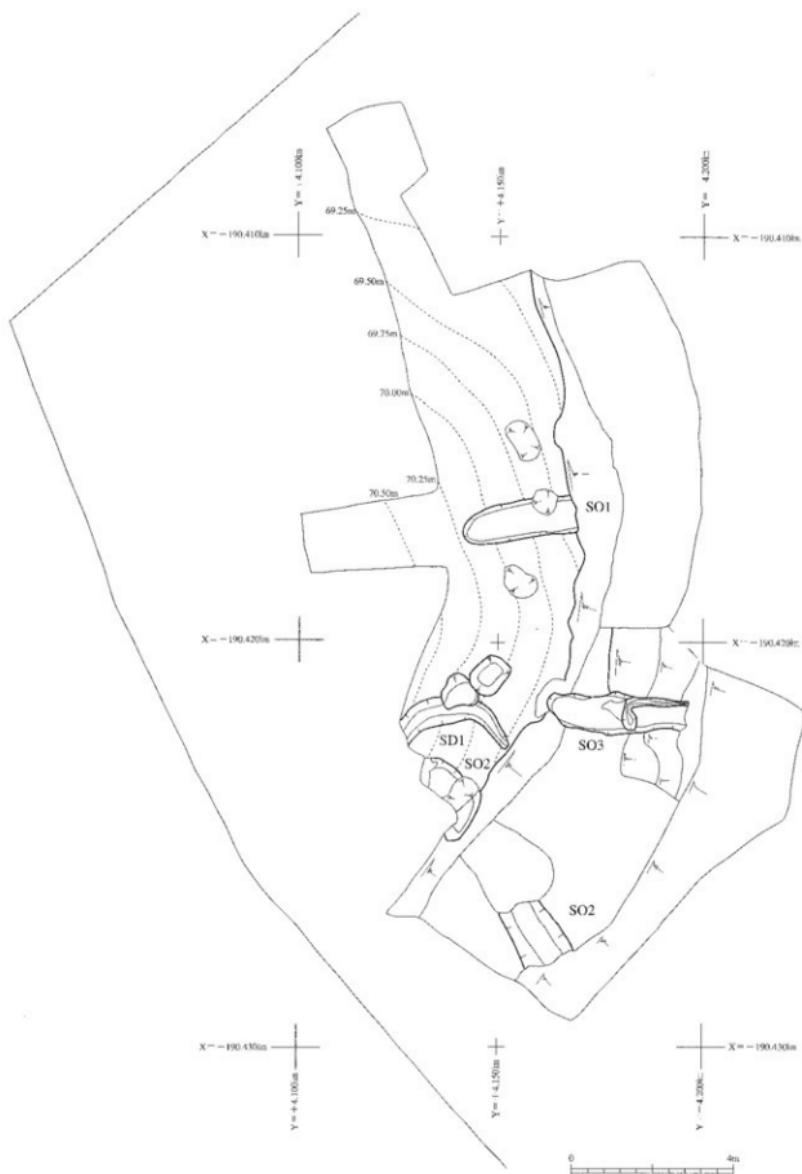
第2図 調査地点と周辺地形（★が調査地点）

はけん銃射撃場造成段階で削平されているが、敷地の西端部・東側は旧地形が残っていることから瓦を焼成した窯跡が発見される可能性も考えられ、同年5月20日に確認調査を実施して窯跡1基が検出された。そのため仙台市教育委員会では、再度申請者と協議し、平成11年6月28日付けで埋蔵文化財の発掘通知が提出されたのを受けて、8月23日から発掘調査を開始した。

調査区は確認調査で検出された窯跡の東側斜面を中心に重機にて表土排除を行い、傾斜面上半部で1・2号窯跡を検出した。また、傾斜面裾部で窯跡の煙道部と考えられる焼土が発見されたことから、調査区を傾斜面下半部まで広げて実施した。下半部はすでに以前の造成等による搅乱のため傾斜面が段状を呈しており、調査区の拡張により2号窯跡の下半部と3号窯跡が検出された。

当初の予測では、半地下式の窯跡1基と考えられていたが、遺存状態はあまり良好とは言えないけれど地下式の窯跡1基（3号窯跡）と半地下式の窯跡2基（1・2号窯跡）が検出された。

基本層は調査区上半部で3層に分けられ、I層が黒褐色シルトの表土層、II層が褐色砂質シルトからなる層で、いずれも須恵器灰・甕の破片が若干含まれている。III層は明黄褐色・褐色の粗砂・砂礫層からなる地山である。下半部の基本層は2層に分けられ、I層が黒褐色シルトの表土層、II層がにぶい黄橙色粘土・明黄褐色粗砂・砂岩等からなる地山である。



第3図　造構配置図

4. 発見遺構と出土遺物

(1) 窯跡

1号窯跡（S O1）（第4・5図）

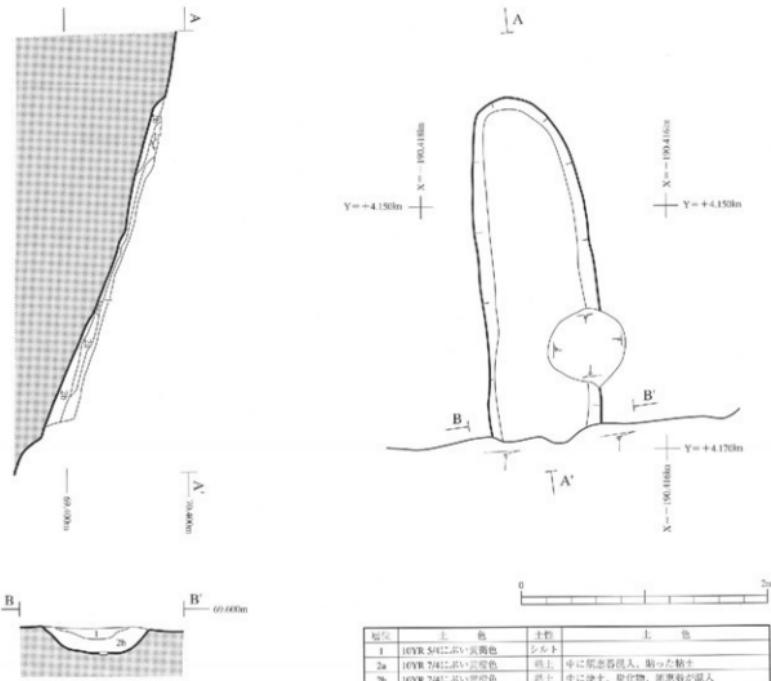
【遺構の確認】調査区上半部中央に位置し、標高69~70mの東側斜面で検出された窯跡で、南東約5mの所に3号窯跡、南南西約8~10mの所に2号窯跡が位置している。

【構造・規模】全長（残存長）2.9m、幅0.95mの半地下式無段窯窯で、深さ10~20cmを測る。窯跡の長軸中心線上を通る主軸方向はW-10°~Sである。一部攪乱穴により壊されている。

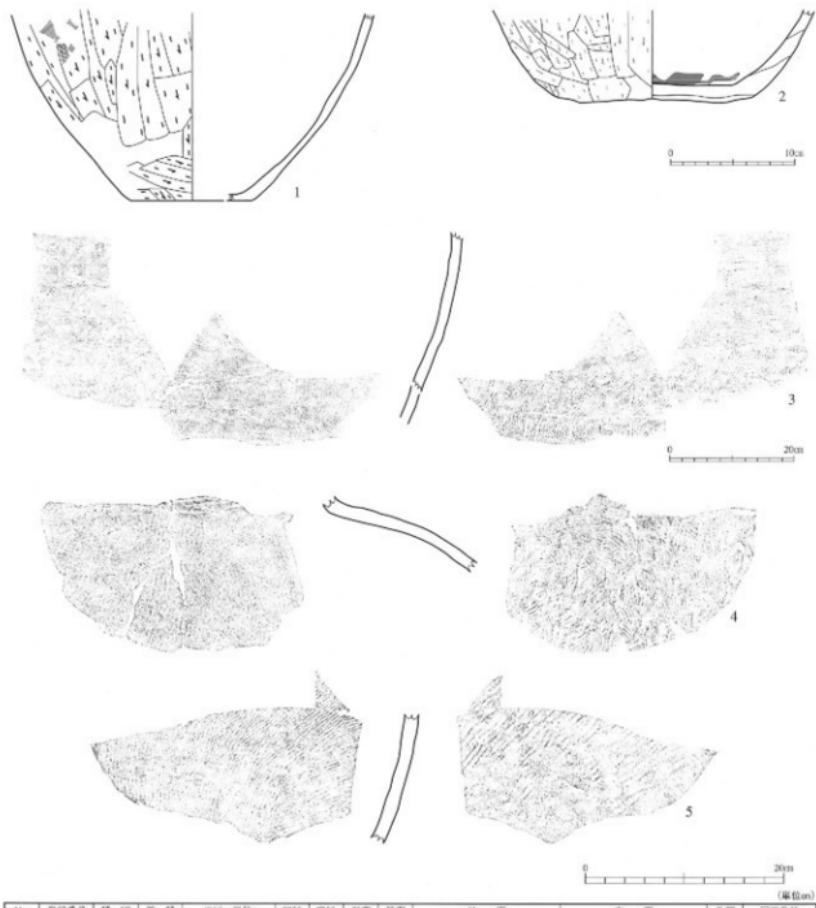
【堆積土】第III層で検出され、堆積土は2層に分けられる。1層はにびい黄褐色砂質シルト、2層はにびい黄橙色粘土であり、さらに2a・2b層に細分される。2a層はスサ入り粘土の窯壁の一部や須恵器窯の破片を粘土の中に混入しており、2b層はさらに焼土・炭化物も混入している。

【焼成部】燃焼部・煙道部はすでに削平され、奥壁から焼成部にかけて検出されている。床面はほぼ平坦であり、その傾斜角度は15~20°である。床面及び壁面は焼けた痕跡は認められず、還元したスサ入りの窯体の一部や須恵器窯片を粘土に混入して平坦に貼った状態で検出された。これは地面を掘り窓めて窯体の一部や須恵器片を芯として粘土を敷き床面を作ったものと考えられ、窯跡の製作途中で廃棄されたものと考えられる。

【出土遺物】堆積土中より出土した遺物は、須恵器窯の破片17点がある。そのうち底部2点と体部3点が登録されて



第4図 1号窯跡（S O1）

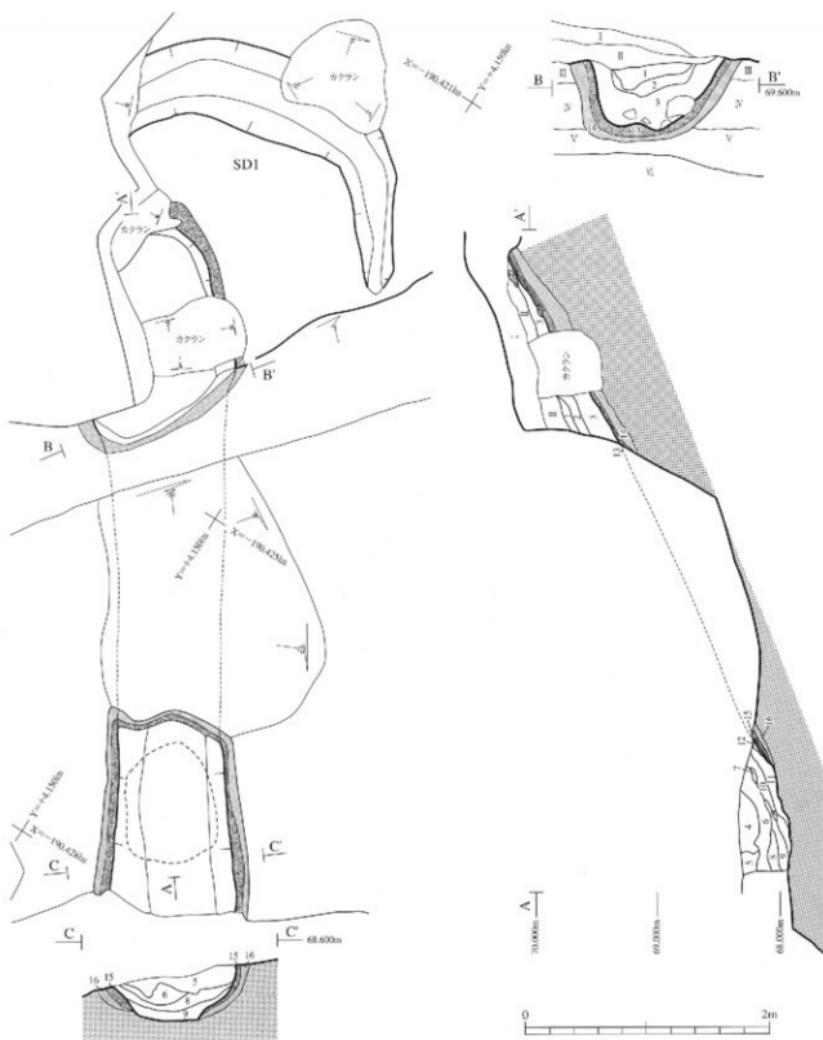


第5図 1号窯跡（S O1）出土遺物

いる。壺は大壺の破片が多く、体部外面に平行タタキ・平行タタキ後ナデによるすり消し、内面に平行タタキや青海波文のあて具痕が観察される。

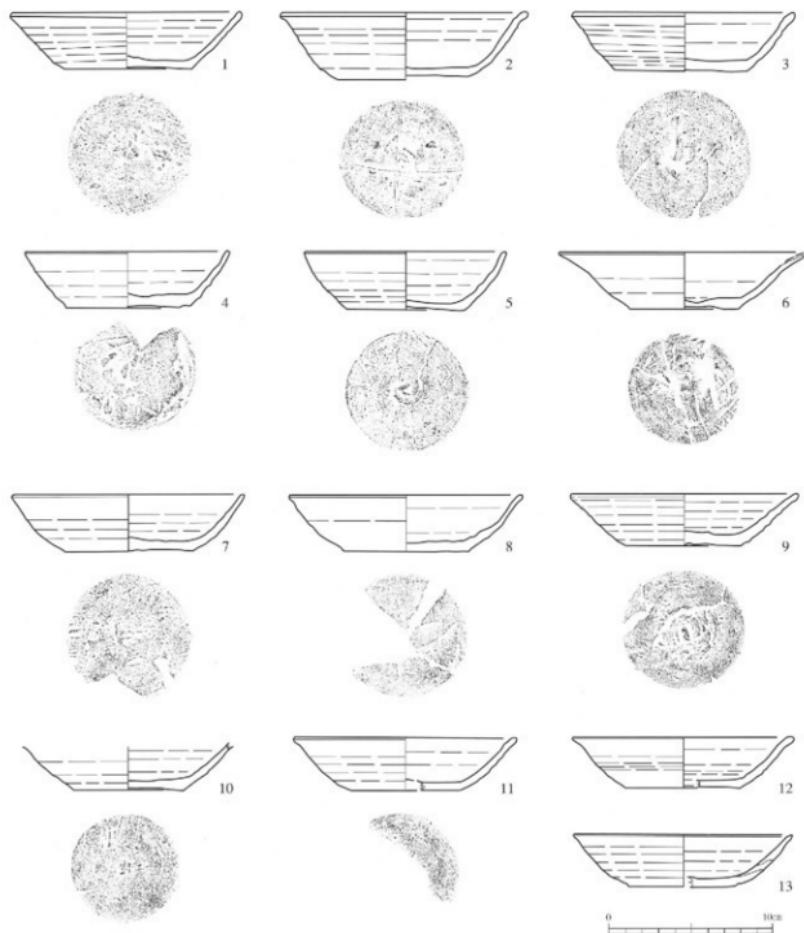
2号窯跡（S O2）（第6~10図）

〔遺構の確認〕 調査区南端に位置し、標高68~70mの南東斜面で検出され、後世の擾乱により上下に分断されてい



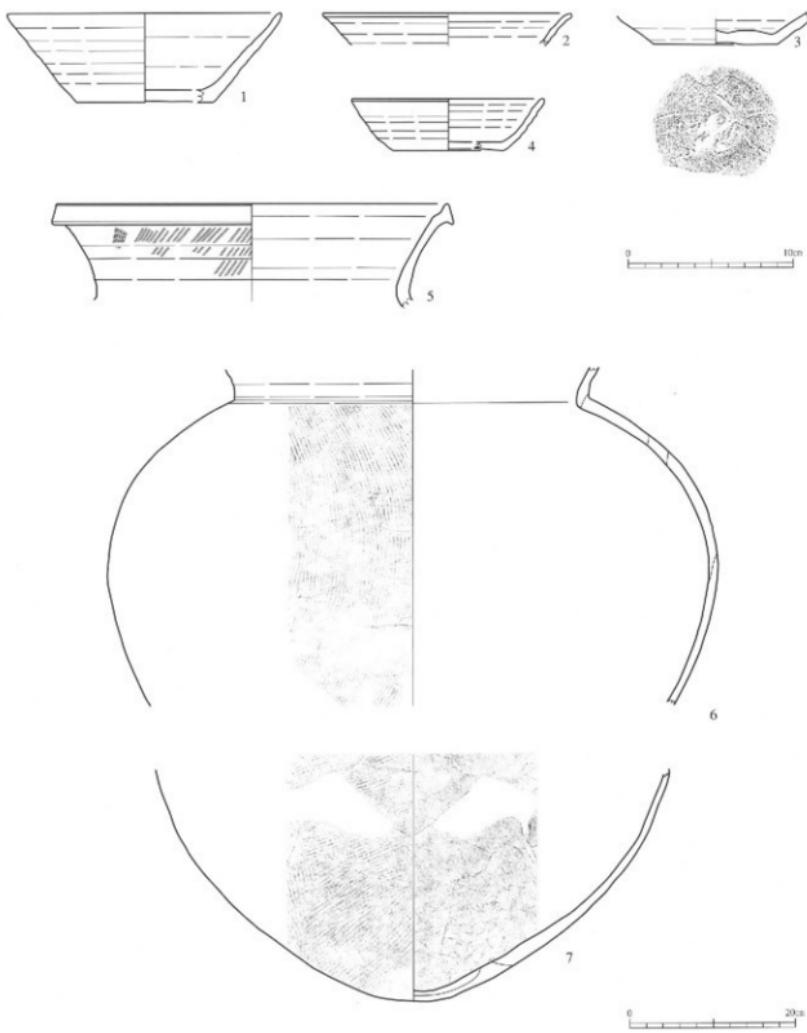
部位	上色	土色	質	層号	部位	上色	土色	質	層号
1	7.SYR5dに近い褐色	シルト	泥土、軽土含む		12	10DG3/1 塩漬灰土	砂質シルト	グレイ	
2	SYR5dに近い赤褐色	シルト	泥土、プロックを少量含む		13	2.SYR44 赤褐色	砂質シルト	焼けている	
3	SYR6赤褐色	シルト	泥土、プロックと粗粒砂を多く含む泥土		14	10YR36 塗赤色	砂質シルト	焼けている	
4	10YR40に近い褐色	砂質粘土	砂質粘土で、初期地盤は砂質粘土で、後半は土質が砂質粘土に変化		15	SYR26 黄褐色	砂質シルト	焼けている	
5	10YR5d明黄色	粘土や砂質粘土	部分的にカブリ岩に近い黄色SYR6/3		16	2-SYR36 明赤褐色	砂質シルト	焼けている	
6	10YR40d-10YR45褐色	粘土や砂質粘土	土質SYR6/6明赤褐色を少量含む		1	10YR25 黑褐色	シルト	表土	
7	10YR42灰黃色	(粘土)			II	7.SYR44 黑褐色	砂質シルト		
8	10YR36明黄褐色	砂質粘土			III	7.SYR46 黄褐色	砂質シルト		
9	7.5YK3/3暗褐色	砂土質砂	(粗砂)、後半SYR5d明赤褐色を多量に含む		IV	7.SYR55 沼泥色	砂質シルト	暗め	
10	5CY2/1オリーブ色	粗砂	グレイ(しりあり)		V	SYR48 明褐色	砂質シルト	暗め、灰の層	
11	2.5Y3/2黒褐色	粗砂中等土量	グレイ		VI	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	砂岩の小粒子	

第6図 2号窓跡 (S 02) SD1溝跡



No.	發掘場所	経	緯	器種	測区・部位	口径	高径	腹径	残存	外観	内観	分類	写真番号
1	E-8	扇形器	环	SQ2・底面直上	[4.3]	7.8	3.5	3.5	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A II	10-1
2	E-9	扇形器	环	SQ5・底面直上	[5.1]	7.9	4.2	3.7	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-2
3	E-10	扇形器	环	SQ5・底面直上	[3.7]	8.0	3.7	3.7	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-3
4	E-11	扇形器	环	SQ2・底上	[2.6]	7.6	3.5	3.5	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A I	10-4
5	E-12	扇形器	环	SQ2・底上	[2.4]	7.3	3.6	3.6	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A I	10-7
6	E-13	扇形器	环	SQ2・底面直上	[5.4]	8.6	3.2	3.6	完形	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-8
7	E-18	扇形器	环	SQ3・底上	[4.3]	7.9	3.5	2.8	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A I	10-5	
8	E-21	扇形器	环	SQ3・底上	[4.3]	7.6	3.5	3.2	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-12	
9	E-23	扇形器	环	SQ2・底上	[3.9]	7.0	3.2	2.3	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A II	10-6	
10	E-26	扇形器	环	SQ3・底上	-	8.8	-	2.0	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-14	
11	E-15	扇形器	环	SQ5・底上	[3.7]	[6.6]	3.3	1.6	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-9	
12	E-16	扇形器	环	SQ5・底上	[3.6]	[7.0]	3.1	1.6	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-10	
13	E-19	扇形器	环	SQ3・底上	[3.4]	[6.6]	3.3	1.5	ロクロナデ、底面凹面へつらぎ無調査	ロクロナデ	A III	10-11	

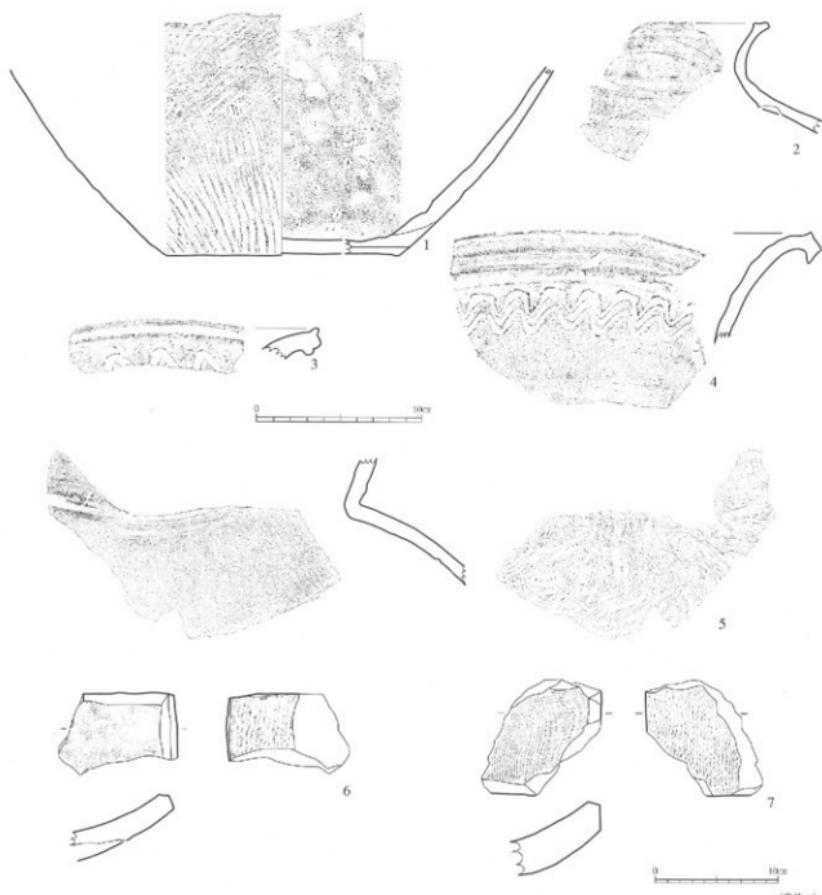
第7図 2号塗跡（S 02）出土遺物（1）



第8図 2号窯跡 (S O2) 出土遺物 (2)

No.	器物番号	種類	形	施釉	底径	口径	高さ	残存	外観	内観	分類	参考番号
1	E-34	須磨器	瓶	S02・底上	(16.8)	(8.4)	5.5	1/4	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	コクロナメ	A I	10-15
2	E-29	須磨器	杯	S02・底上	(15.2)	-	-	1/4	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	コクロナメ		
3	E-27	須磨器	杯	S02・底上	-	7.4	-	1/3	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	ワクロナメ		
4	E-22	須磨器	杯	S02・底上	(11.8)	(6.9)	3.2	1/5	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	ロクロナメ	A II	10-13
5	E-31	須磨器	瓶	S02・底上	(24.0)	-	-	1/2	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	ロクロナメ		10-16
6	E-168	須磨器	瓶	S02・底上	-	-	-	1/2	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	ナメ		11-4
7	E-28	須磨器	瓶	S02・底上	-	-	-	1/2	口クロナメ、直腹口輪ヘラ切込無痕	ロクロナメ、あて馬狹(平行タケ)		11-7

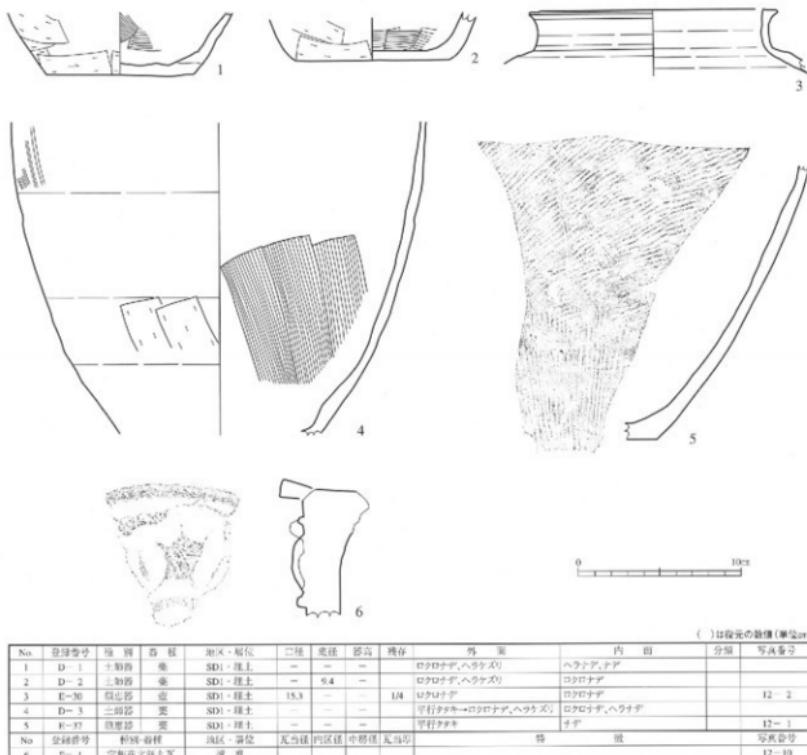
()は復元の数値 (単位cm)



第9図 2号窓跡 (S O2) 出土遺物 (3)

る。また上半部は杉の大木等により窓体の全体を検出することはできず、西側への拡張を断念した。

〔構造・規模〕上半部残存長1.6m、下半部残存長1.7m、下半部幅1.0mで、推定残存長約5mを測る半地下式無段窓窓である。深さは上半部で10~20cm、下半部で約40cmを測る。窓跡の長軸中心線上を通る主軸方向はN-32°-Wである。



第10図 S D 1溝跡等出土遺物

〔堆積土〕第Ⅱ層・擾乱土直下で検出され、堆積土は12層に分けられる。上半部は3層に分けられ、焼土をブロック状に含むにぶい褐色、にぶい赤褐色、赤褐色シルトで、須恵器壺の完形品3点が床面上、床面直上より出土している。下半部は9層に分けられ、焼土を含むにぶい黄色や明黄色のシルト質粘土・粘土・粗砂が堆積している。

〔焼成部・燃焼部〕検出された上半部は奥壁から煙道部が削平されているが、奥壁に近い焼成部と考えられる。焼成部は大部分破壊されているが、上下に分断されて検出され、残存する規模は上半部で残存長1.6m、幅80cm、下半部で残存長50cm、幅1.0mを測り、焼成部の推定の長さは約3.5mである。床面はほぼ平坦で、非常に強く焼けて堅くなっている、上半部はそれが顕著である。床面、壁面は赤褐色を呈し、部分的に還元して灰色となっているところもある。床面の傾斜角度は下半部で25°、上半部で30°であり、奥壁に向かって急角度となる。

燃焼部は残存長70cm、幅1.0mで、床面はほぼ水平に近い。床面はあまり焼けた状態ではなく、壁面が焼けて赤褐色を呈し、熱変化のため赤褐色・橙色に変色している。

〔その他の施設〕北側から東側にかけて窓跡を開むように幅約70cmの溝跡(S D 1)が検出され、深さ約15cm前後を測る。この溝跡は窓跡外側に施設された排水溝と考えられる。溝跡及びその周辺より須恵器壺・壺、瓦などが出土

している。

〔出土遺物〕本窯跡中より出土した遺物は、須恵器388点、平瓦5点の合計393点がある。その大部分は須恵器で、壺・甕・壺の器種が出土している。

壺は登録資料17点、破片資料81点（口縁部37点、体部27点、底部17点）の合計98点が出土し、2号窯跡出土須恵器の25.3%を占めている。底部の切り離し技法は、すべて回転ヘラ切り無調整のもので、回転糸切りのものは含まれていない。図示された壺の法量は口径11.8～16.8cm、器高3.1～5.5cm、底径6.6～8.4cmの中に収まる。第7図1・2の壺底部にはヘラで描かれた「+」あるいは「×」が施されている。

甕は登録資料7点、破片資料283点（口縁部19点、体部261点、底部3点）の合計290点と最も多く出土し、本窯跡出土須恵器の74.7%を占める。その殆どは破片資料で完形のものはない。大甕2点が図示され、第8図6は口頭部から体部下半にかけての復元されたもので、体部外面は平行タタキ・格子目風タタキが施され、内面は青海波文のあて具痕があり、ナデ調整によりすり消しされている。第8図7は体部下半から底部のもので、底部は丸底で、外面は平行タタキ・内面は青海波文である。その他第9図3・4は描描波状文の施された口縁部である。

第10図3は窓外排水溝（SDI溝跡）中から出土した短頸甕であり、口縁部から体部上半にかけての破片で口縁端部は水平に施されている。

3号窯跡（S O3）（第11～16図）

〔遺構の確認〕調査区中央部東側の下半部に位置し、標高67～69cmの東側斜面で検出されている。北西約5mの所に1号窯跡、南西約4～6mの所に2号窯跡が位置している。

〔構造・規模〕残存長約3.5m、幅約1mの地下式無段窯で、深さ約50cmを測る。すでに煙道部から燃焼部にかけての天井部は崩壊している。窯跡の長軸中心線上を通る主軸方向はW-4°～Nである。

〔堆積土〕大きく4層に分けられる。1層は明橙色シルトの流入土、2層は橙色砂礫層の天井部崩壊土である。3層は黒色シルトの炭化物層で、炭化材が多く残存している。4層は2層に細分され、4a層は黄灰色紗質シルト、4b層は黄褐色粘土質シルトで須恵器壺の一括資料や破片などが多く含まれている。

〔煙道部・焼成部・燃焼部〕煙道部は搅乱及び天井部崩壊のため不明な部分もあるが、奥壁中央より右側に寄った所に位置し、奥壁より垂直に約70cmの高さまで立ち上がる。

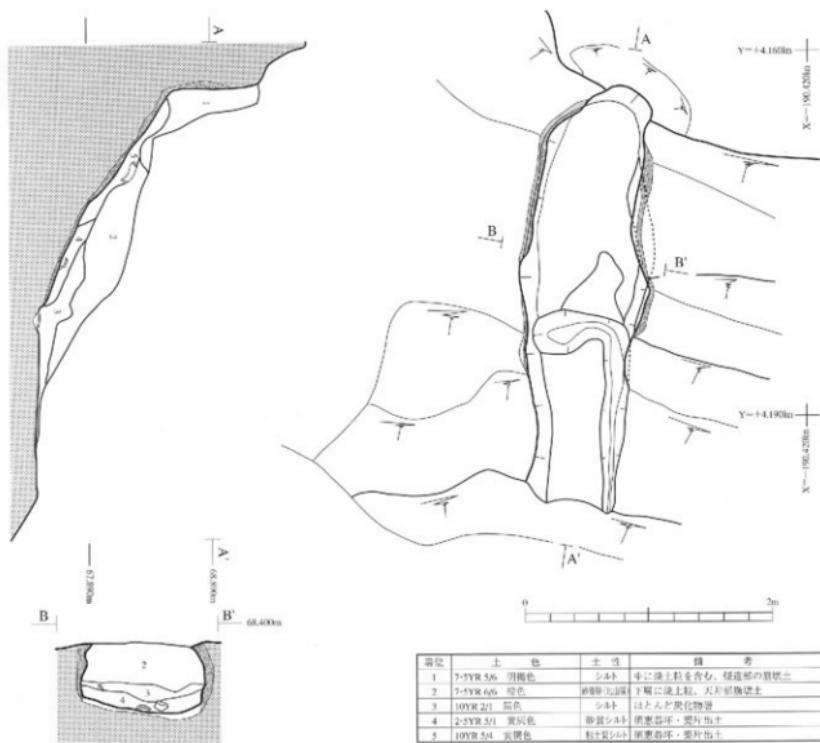
焼成部は奥壁より横断する排水溝までであり、長さ1.75m、最大幅約1mである。床面は最大幅約80cm、奥壁付近で幅約80cmを測り、排水溝付近はやや凹んでいるがほぼ平らである。床面は1枚で、その傾斜角度は排水溝から焼成部中央までが25°であり、それより奥壁にかけては37°と極めて急角度となる。天井部は崩落しており、側壁は床面より約20～55cmの高さまで残存している。床面・側壁は焼けて非常に堅く、熱変化のため暗赤色に変色している。

燃焼部は排水溝から東側で残存長約1.4m、幅70～80cm、深さ約10cmを測る。床面はほぼ平らで、その傾斜角度はほぼ水平に近い。側壁は床面・排水溝底面より約10～30cmの高さまで残存しており、焼成部に近い燃焼部側壁は焼けて暗赤色を呈している。

排水溝は傾斜角度の変換する焼成部と燃焼部の境に横断し、さらに右側の側壁に沿って窓外へと続いている。排水溝の幅は約10～25cm、深さ5～10cmで、排水溝中に須恵器壺・甕の破片を並べて置いている。

〔出土遺物〕本窯跡から出土した遺物は須恵器のみで、壺・甕・壺の器種がある。その出土状況は焼成部から燃焼部にかけてほぼ全面にわたり分布し、多くは床面・床面直上・第4層から出土しているものが殆どである。

出土した須恵器は登録資料76点、破片資料509点の総数585点がある。その多くは壺で、登録資料69点、破片資料295点（口縁部200点、体部70点、底部70点）の合計364点が出土し、3号窯跡出土須恵器の62.2%を占めている。



第11図 3号窯跡（S03）

須恵器壺は64点が図示され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリされているものが1点ある以外、すべて回転ヘラ切り無調整のもので回転糸切りのものは含まれていない。壺の法量は口径12.0~18.0cm、底径6.3~9.3cm、器高2.6~4.5cmの中に収まる。

甕は登録資料7点、破片資料213点（口縁部7点、体部202点、底部4点）の合計220点が出土し、壺に次いで多く37.6%を占める。

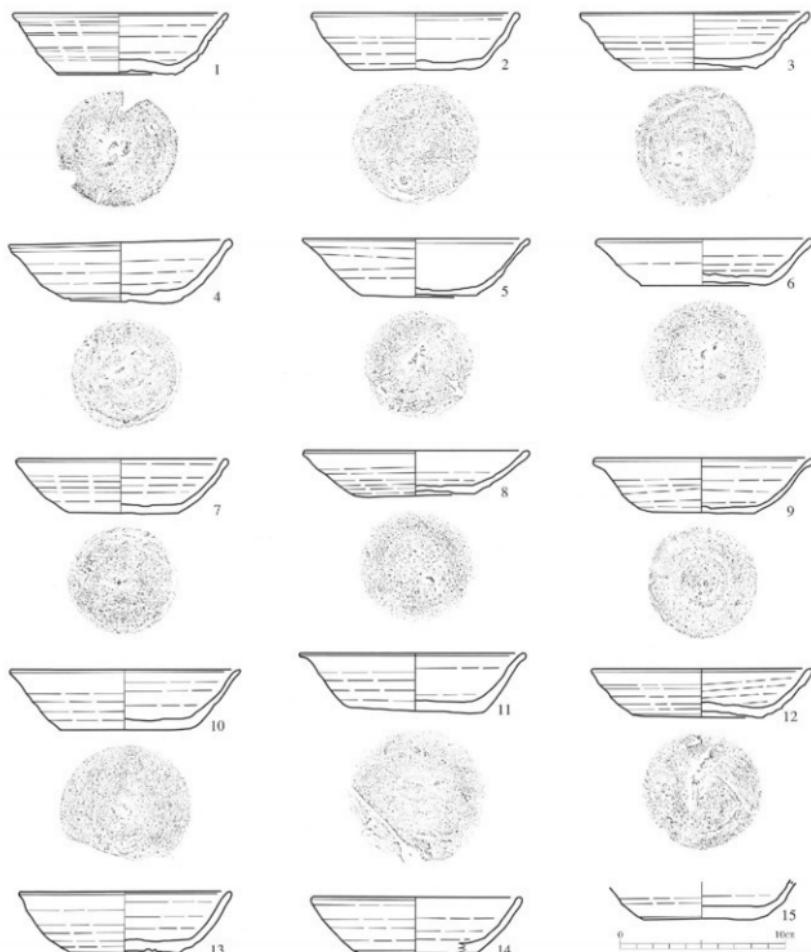
(2) 出土遺物

調査によって出土した遺物は、1~3号窯跡及び2号窯跡外側に施設された排水溝（SD1）周辺から須恵器・土師器・瓦があり、その出土量は総数1328点で須恵器が99.1%を占める1316点が出土している。

須恵器

壺

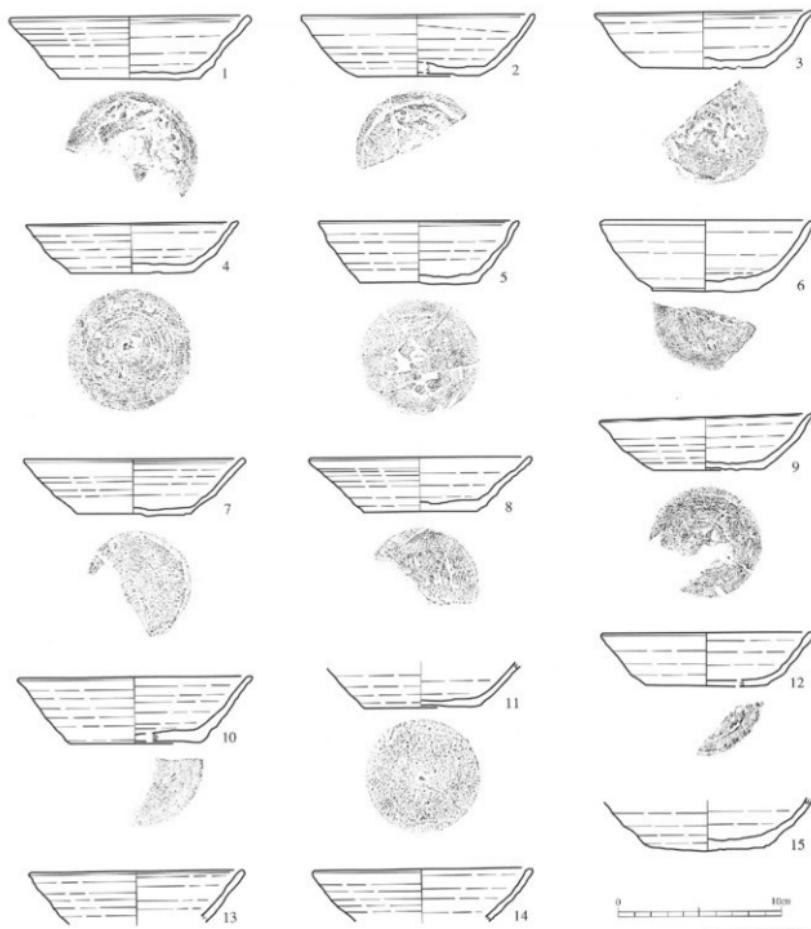
壺は甕に次いで多く、須恵器全体の出土量の38.2%に当たる503点が出土した。これらは主に2・3号窯跡からの出土であり、大部分が破片資料であるが登録資料として96点がある。



()は復元の数値(推定値)

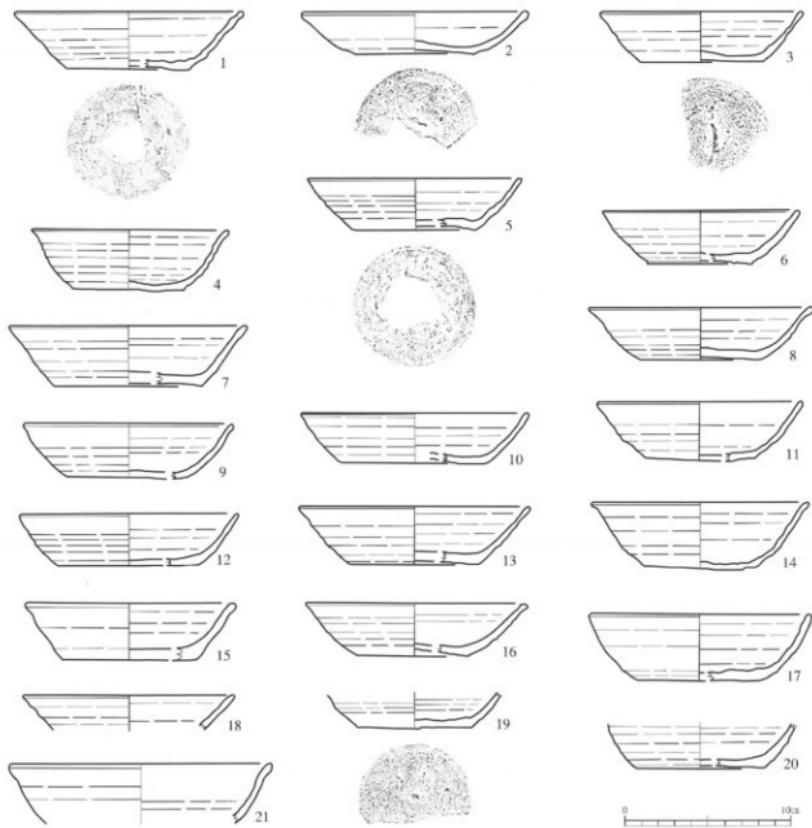
No.	笠縁番号	種類	器種	直径・底径	上縁	高さ	口径	残存	外観	内観	分類	参考番号
1	E-39	須恵器	平	S03・須恵	13.1	7.2	3.6	消失	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A II	12-1
2	E-40	須恵器	平	S03・須恵	12.6	7.5	3.4	2/3	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A III	12-2
3	E-54	須恵器	平	S03・須恵	14.0	7.4	3.4	2/3	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A II	12-5
4	E-42	須恵器	平	S03・須恵	13.6	6.8	3.7	3/5	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A I	12-3
5	E-43	須恵器	平	S03・須恵	13.8	7.4	3.5	3/5	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A III	12-4
6	E-44	須恵器	平	S03・須恵	13.3	7.6	2.9	3/5	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A II	12-5
7	E-47	須恵器	平	S03・須恵	13.0	6.7	3.4	1/2	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A I	12-8
8	E-26	須恵器	平	S03・須恵	13.8	7.0	2.9	3/4	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A I	12-7
9	E-48	須恵器	平	S03・須恵	13.6	6.6	3.4	1/2	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A III	12-5
10	E-49	須恵器	平	S03・須恵	(14.1)	8.1	3.8	2/3	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A III	12-3
11	E-59	須恵器	平	S03・須恵	13.9	8.5	3.7	2/3	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	B	12-6
12	E-29	須恵器	平	S03・須恵	(13.4)	7.2	3.0	1/2	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A I	12-16
13	E-41	須恵器	平	S03・須恵	(13.0)	8.8	3.7	1/6	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A III	12-1
14	E-50	須恵器	平	S03・須恵	(13.0)	(7.4)	3.5	1/5	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト	A I	12-4
15	E-51	須恵器	平	S03・須恵	-	7.0	-	1/2	ロクロナイト底部口付付焼落	ロクロナイト		

第12図 3号窯跡（S 03）出土遺物（1）



No.	登録番号	種別	器種	地区・位置	口径	底径	壁高	残存	外観	内面	分類	写真番号
1	E-55	瓦窯器	环	S03・表面直上	14.8	8.6	3.9	1/2	コクロナデ、底部・凹部へハラ切無焼	コクロナデ	A II	14- 2
2	E-45	瓦窯器	环	S03・表面直上	(14.3)	7.4	3.8	1/3	コクロナデ、底部・凹部へハラ切無焼	コクロナデ	A I	14- 8
3	E-83	瓦窯器	环	S03・表面直上	(13.3)	7.6	3.5	1/3	コクロナデ、底部・凹部へハラ切無焼	コクロナデ	A III	14-12
4	E-76	瓦窯器	环	S03・表面直上	(13.0)	7.6	3.1	2/3	コクロナデ、底部・凹部へハラ切無焼	コクロナデ	A V	13- 4
5	E-53	瓦窯器	环	S03・直上	(12.3)	7.2	3.8	2/3	コクロナデ、底部・凹部へハラ切無焼	コクロナデ	A II	12- 9
6	E-14	瓦窯器	环	S03・直上	(13.1)	(6.5)	4.4	1/4	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A I	13-13
7	E-1	瓦窯器	环	S03・直上	13.4	7.0	3.5	2/5	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A N	13- 7
8	E-52	瓦窯器	环	S03・表面	(13.6)	(7.0)	3.4	1/3	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A II	14- 6
9	E-46	瓦窯器	环	S03・直上	13.6	7.0	3.5	2/3	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A II	13- 2
10	E-20	瓦窯器	环	S03・直上	(14.4)	(7.8)	4.1	1/4	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A N	14- 9
11	E-67	瓦窯器	环	S03・直上	-	(7.0)	-	1/3	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ		
12	E- 5	瓦窯器	环	S03・直上	(13.0)	(7.4)	3.3	1/4	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ	A I	
13	E- 90	瓦窯器	环	S03・表面直上	(13.2)	-	-	1/3	コクロナデ	コクロナデ		
14	E- 89	瓦窯器	环	S03・4号	(13.6)	-	-	1/3	コクロナデ	コクロナデ		
15	E-25	瓦窯器	环	S03・4号	-	(7.7)	-	1/4	コクロナデ、底部・直上へハラ切無焼	コクロナデ		

第13図 3号窯跡（S 03）出土遺物（2）

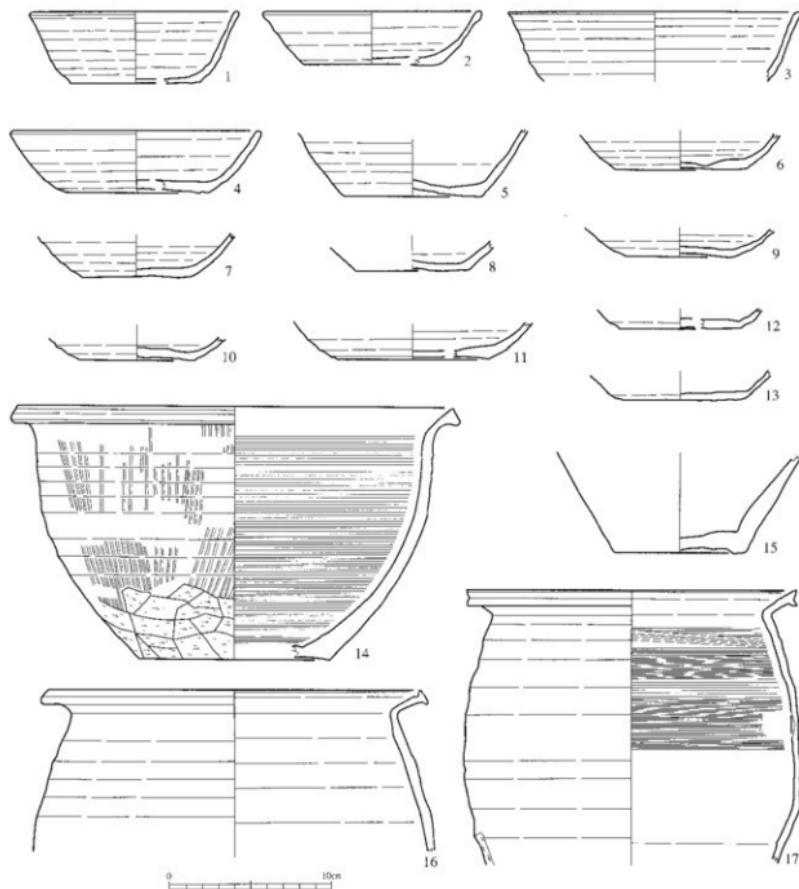


()は復元の数値(単位cm)

No.	空器番号	種類	形体	地区・桟柱	口径	底径	厚径	深さ	外観	内面	分類	万古番号
1	E-57	碗形器	平	S O3-1 直溝	14.8	7.4	3.6	1.2	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	AIV	13- 1
2	E-75	碗形器	平	S O3-4 溝	(13.8)	(7.2)	2.6	1.2	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A I	
3	E-77	碗形器	平	S O3-4 溝	(12.4)	(7.4)	3.1	1.4	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	14-15
4	E-2	碗形器	平	S O3-4 溝	(12.0)	6.7	3.7	1.3	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A III	14-14
5	E-72	碗形器	平	S O3-4 溝	(13.0)	7.4	3.2	2.0	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	13- 8
6	E-86	碗形器	平	S O3-3 厚面	(12.0)	(6.3)	3.3	1.4	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	14-10
7	E-4	碗形器	平	S O3-3 厚面	(14.6)	(9.0)	3.7	1.3	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	14- 7
8	E-62	碗形器	平	S O3-3 厚面	(13.8)	7.2	3.2	1.5	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A II	13-10
9	E-58	碗形器	平	S O3-3 厚面	(12.9)	(7.4)	3.4	1.3	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A II	14-13
10	E-20	碗形器	平	S O3-3 厚面	(14.0)	(8.8)	3.1	1.5	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	14- 7
11	E-3	碗形器	平	S O3-3 厚面	(12.6)	(6.6)	3.7	1.3	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A I	12-15
12	E-17	碗形器	平	S O3-3 厚面	(13.4)	(8.6)	3.2	1.3	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A I	13- 9
13	E-90	碗形器	平	S O3-3 厚面	(14.2)	(7.8)	3.6	1.5	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A V	13-14
14	E-69	碗形器	平	S O3-3 厚面	(13.2)	6.8	4.1	1.2	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A III	13- 6
15	E-7	碗形器	平	S O3-3 厚面	(13.0)	(8.2)	3.5	1.0	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A IV	13- 12
16	E-71	碗形器	平	S O3-3 厚面上	(13.6)	(6.6)	3.2	1.0	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A III	14-11
17	E-5	碗形器	平	S O3-4 溝	(13.6)	(7.2)	4.1	1.4	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ	A I	13-11
18	E-94	碗形器	平	S O3-3 厚面上	(12.9)	—	—	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ		
19	E-82	碗形器	平	S O3-4 溝	—	—	—	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ		
20	E-80	碗形器	平	S O3-3 厚面上	(—)	(—)	—	—	ロクロナゲ、底部・直溝から少少剥離	ロクロナゲ		
21	E-91	碗形器	平	S O3-4 溝	(16.2)	—	—	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ		

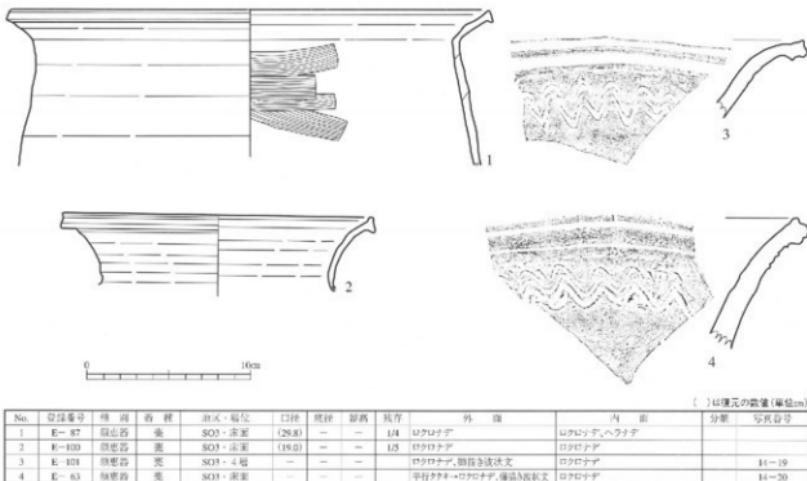
第14図 3号窯跡（S O3）出土遺物（3）

第1図 五本松古跡（第3次調査）



Am.	部屋番号	種類	性質	地区・位置	口径	底径	高さ	保存	外観	内観	分類	等級番号	
1	E-74	漆器	环	S03・床西上	(12.9)	(8.6)	4.5	1/6	クロコナメ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	クロコナメ	AⅡ		
2	E-79	漆器	环	S03・床	(11.6)	(8.1)	3.3	1/5	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ	AⅢ	14-3	
3	E-92	漆器	环	S03・4層	(18.0)	-	-	1/3	クロコナメ	クロコナメ			
4	H-66	漆器	环	S03・1層	(15.5)	(8.5)	3.8	1/4	クロコナメ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	クロコナメ	AⅠ	14-18	
5	E-85	漆器	环	S03・床	-	-	-	1/2	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ			
6	E-81	漆器	环	S03・床西上	-	-	-	1/5	クロコナメ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	クロコナメ			
7	E-65	漆器	环	S03・4層	-	-	6.6	2/3	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ			
8	E-84	漆器	环	S03・床西上	-	-	7.0	1/2	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ			
9	E-93	漆器	环	S03・床西	-	-	6.7	1/2	クロコナメ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	クロコナメ			
10	E-98	漆器	环	S03	-	-	7.0	1/2	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ			
11	E-96	漆器	环	S03・4層	-	(9.3)	-	1/4	クロコナメ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	クロコナメ			
12	E-95	漆器	环	S03	-	-	(7.4)	-	1/3	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ		
13	E-73	漆器	环	S03	-	-	7.0	2/3	ヨリナギ, 底張, 舟形ヘラの漆瓦型	ヨリナギ			
14	E-61	漆器	环	S03・2層下部	(27.8)	(11.8)	15.6	1/2	平行タキ, ヨリナギ, ヘラナメ	ヨリナギ		14-22	
15	E-60	漆器	环	S03・4層	-	-	8.2	-	クロコナメ	クロコナメ		14-23	
16	E-102	漆器	环	S03・4層	(24.0)	-	-	1/2	クロコナメ, ヘラナメ	クロコナメ			
17	E-79	漆器	环	S03・床西上	(20.4)	-	-	1/2	ヨリナギ, ヘラナメ	ヨリナギ		14-21	

第15図 3号窯跡（S03）出土遺物（4）



第16図 3号窯跡（S O3）出土遺物（5）

登録された資料のうち81点が図示されており、図上復元されて全体の器形が明らかなものは、2号窯跡で14点、3号窯跡の45点がある。环は灰色・灰白色・暗赤褐色・黄灰色・にぶい橙色など様々な色調を呈し、焼成不良なものも見られる。

环はすべて平底で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りされているもので、回転糸切りされたものは含まれていない。底部の切り離し技法・再調整の有無・器形の特徴などから以下のとおり分類される。

A類：底部の切り離し技法は回転ヘラ切りされ、再調整のないものである。

A I類：体部から口縁部にかけてやや内弯ぎみに立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので、口縁端部は丸く収められている。断面形は逆台形を呈するもので、口縁部は比較的器厚の厚いものが多くシャープさに欠けている。环の法量は、口径12.4~14.3cm、底径6.5~7.6cm、器高2.6~4.4cmの中に收まり、器高が浅いもの（2.6~3.2cm）とやや深いもの（3.5~4.4cm）とがある。

A II類：体部はI類同様やや内弯ぎみに立ち上がり、体部上半から口縁部が外傾して「く」の字状を呈するもので、口縁部はそのまま丸く收められている。断面形は逆台形を呈するもので、环の法量は口径13.0~14.8cm、底径7.0~8.6cm、器高2.9~4.5cmの中に收まる。

A III類：体部は内弯ぎみに渦曲あるいは直線的に立ち上がり、口縁部が外反するもので、器形はやや椀形を呈するものと考えられる。この類のものは21点図示され、环の法量は口径11.8~15.4cm、底径6.6~8.1cm、器高3.1~4.2cmの中に收まる。

A IV類：体部は底部より直線上に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので、器形は逆台形を呈している。この類のものは11点あり、环の法量は口径12.0~16.8cm、底径6.3~9.0cm、器高3.1~5.5cmの中に收まる。

B類：底部の切り離し技法は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施されているもので、3号窯跡から1点が出土しているのみである（第12図11）。器形の特徴はA III類と同じである。环の法量は口径13.9cm、底径8.3cm、器高3.7cmである。

壺

今回の調査で出土した須恵器の中で最も多く、須恵器出土量の61.5%の809点が出土している。その大部分は破片であり、出土量の多少はあるが1~3号窯跡及びSD1溝跡などから出土している。完形のものは少なく、登録された資料のうち図示されたものは12点、拓本資料10点がある。

器形の大きさ・特徴などから以下のとおりに分類される。

A類：器高が40cmを超えるような大型の壺で、2点が図示された以外は破片資料が多い。図示されたもの2点が2号窯跡から出土しており、第8図6は口頭部から体部下半部にかけて復元された破片で、体部中央部に最大形があり、75cmを測る。口頭部は内外面ロクロナデ調整され、体部外側は平行タタキ後手り消しされ、内面は平行タタキのあと具模、ナデ調整されている。第8図7は丸底の底部で、体部下半から底部の破片である。第9図4と第16図3・4とは3つの横構沈線文が1条施された口縁部片である。

B類：口径と体部中央部がほぼ同じ大きさで最大形が体部中央にある小壺の壺で、3点が図示されている。口径が24~30cmで、口縁部はくの字に短く外反し、口縁端部が上方と外側に引き出され口縁帯を形成する。の中でも第15図17は比較的全体の器形が明らかなもので、外面の調整はロクロナデ後体部下半がヘラケズリされ、内面の調整はロクロナデ・回転ハケメされている。

C類：口径が器高よりも大きい小型の壺で、最大形は口縁部にある。3号窯跡より出土した第15図14が1点あるだけで、口径27.8cm、器高15.6cm、底径11.8cmを測る。底部よりやや内寄ぎみに立ち上がり口縁部が外反するもので、口縁端部は下方外側に引き出されて口縁帯を形成する。平行タタキにより成形された後、外面がロクロナデ・ヘラケズリ調整、内面が回転ハケメ調整されている。

壺

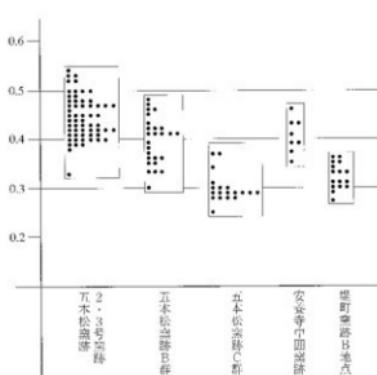
短頭壺の口縁部のものと底部の破片があるだけである。

土師器

壺の破片3点があるが、色調から土師器としたが須恵器の焼成不良の可能性もある。

瓦

宝相花文瓦丸瓦1点、平瓦6点、丸瓦2点の9点が出土しただけである。すべて小破片のものであり全体の明らかなものはない。宝相花文瓦丸瓦は2号窯跡の外側に施設された排水溝（SD1）東側の攪乱から出土したものである。平瓦5点は2号窯跡から出土しており、それ以外はSD1溝跡周辺から出土している。

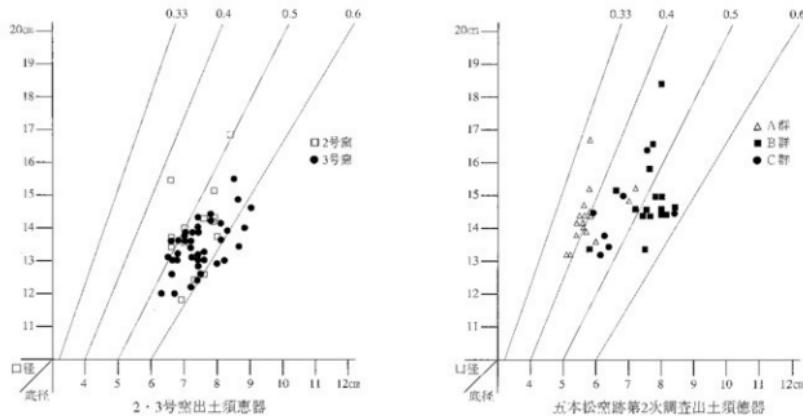


第17図 窯跡須恵器壺の口径と底径の比

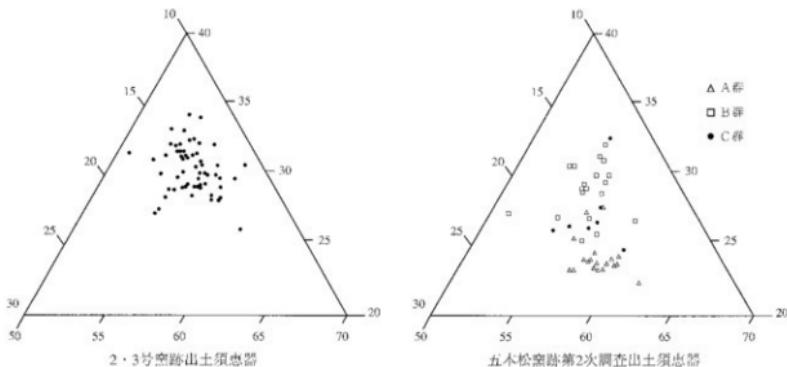
今回発見された遺物は、須恵器壺を中心に2号・3号窯跡からまとめて出土している。これらの壺は、3号窯跡から出土した1点のB類を除けば、すべて底部の切り離し技法が回転ヘラ切り無調整のA I類からA IV類で構成されており、器形や底部の切り離し技法・法量等についても同様の特徴をもち、相違する点は見られない。

さて東北地方の須恵器壺については、岡田茂弘・桑原滋郎両氏の研究がある（1974）。多賀城周辺における古代壺形土器の変遷では、底部の切り離し技法及び調整の有無などから9類に分類されている。それらは切り離し技法が一般に静止糸切り・ヘラ切りから回転糸切りへ、技法では調整のある段階から調整を行なわない

第1図 五本松窯跡（第3次調査）



第18図 五本松窯跡出土須恵器の口径と底径の比



第19図 五本松窯跡出土須恵器の三角ダイアグラム

段階へ、形態的には、口径に対する底径の比が大きいものから小さいものへと、という変遷が認められることが指摘されている。

今回出土した2号・3号窯跡の壺は多賀城の6-a類に相当するものであり、その時期は8世紀末頃から9世紀後半とされる。壺の製作技法の変遷は一般的にヘラ切りから糸切りへと移行し、その変換点は東北地方ではほぼ9世紀後半が主要な変換点とされている。

昭和60・61年度の調査である五本松窯跡D地点2次調査では半地下式窯窓15基が検出され、B群須恵器壺とC群須恵器壺が出土している。

B群須恵器壺は、底部の切り離し技法が回転糸切り・回転ヘラ切り・再調整のため切り離し技法が不明なものも含み、形態的・法量的に多様なものを包括している。

C群須恵器坏は、底部の切り離し技法が回転糸切り・回転ヘラ切りの両方があるが、ほぼ回転糸切りが主体のものである。

これらの須恵器坏はB群が回転ヘラ切り主体から回転糸切り主体への移行した段階、C群がほぼ回転糸切りのみとなった段階のもので、口径と底径の比はB群が1:0.5、C群が1:0.4である。つまりB群よりC群が口径に占める底径の割合は小さく、B群からC群への変遷が想定されている。しかしB群のなかには口径と底径の比がC群と近似するものも含まれていることを踏まえると、B群からC群への推移は時期的に歴近接したものと考えられ、共作する瓦の年代より多賀城IV-1期の時期に位置づけられている。また台原・小田原窯跡群中の多賀城IV-1期の須恵器を生産した窯跡との比較により、五本松窯跡B群→安養寺中園窯→五本松窯跡C群・堤町窯跡B地点の変化が考えられ、多賀城IV-1期内での推移で時間差は歴近接したものとしている。

今回出土した同じD地点の2・3号窯跡出土の須恵器坏は、五本松窯跡B群須恵器坏と比較した場合、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りで回転糸切りのものを含んでいないこと、さらに器形も逆台形のものが多く口径と底径の比が2・3号窯跡のものが平均で1:0.55と五本松窯跡B群のものよりも大きいものである。このことは2・3号窯跡のものが、五本松窯跡B群よりも口径に占める割合が大きいことを示している（第16～18図）。

これらのことから今回調査した2・3号窯跡出土の須恵器坏は、底部の切り離し技法や口径と底径の比により、貞觀11年（869）の陸奥国大地震後の復興瓦や須恵器を焼成した五本松窯跡B群よりも時期的に先行することが考えられ、その時期については平安時代前半に位置づけられる。

5.まとめ

- ①五本松窯跡は仙台市の北部、台原・小田原丘陵の西部に位置し、台原・小田原窯跡群の中でも最も標高の高い約50～80mの丘陵斜面にA～G地点がそれぞれ立地している。
- ②五本松窯跡は、これまで2次にわたりD地点とG地点の2ヶ所で発掘調査が実施され、多賀城IV期の瓦や須恵器を焼成した窯跡17基が検出されている。これらはすべて瓦陶兼用窯で、半地下式窯窓である。出土遺物としては、青車文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦？、宝相花文軒丸瓦、印刻花文軒丸瓦、均整軒草文軒平瓦、須恵器などがある。
- ③今回の調査は、五本松窯跡D地点の東端部にあたり、都市計画道路建設に伴って発掘調査された第2次調査の東に隣接した台原けん銃射撃場跡地等造成に伴って実施され、調査の結果地下式窯窓1基と半地下式窯窓2基の合計3基の窯跡が検出された。そのうち1基は未使用のものである。
- ④窯跡などから出土した遺物は、須恵器坏・甕・瓶、宝相花文軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある。その大部分は須恵器坏が占めている。
- ⑤今回出土した2・3号窯跡出土の遺物の年代については、多賀城IV-1期に位置づけられている貞觀11年（869）の陸奥国大地震後の復興瓦や須恵器を焼成した五本松窯跡D地点第2次調査B群窯跡出土のものよりも先行するもので平安時代前半の時期に位置づけられる。
- ⑥今回検出された3号窯跡はこれまで五本松窯跡では発見されていない須恵器専用の窯であり、主に坏類を主体に焼成された小型の地下式窯窓であり、今後五本松窯跡を考える上で貴重な発見となった。

引用・参考文献

- 岩渕 康治（1973）：「仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第6集
- 岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代不形土器の変遷」『研究紀要』
官城県多賀城跡調査研究所
- 小川 淳一（1987）：「五本松窯跡—都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第99集
- 金森 安孝（1982）：「堤町窯跡B地点—仙台平野の遺跡群」仙台市文化財調査報告書第37集
- 工藤雅樹・桑原滋郎（1972）：「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号
- 古窯跡研究会（1973）：「陸奥国官窯跡群」研究報告第2冊
- 古窯跡研究会（1976）：「陸奥国官窯跡群Ⅱ」研究報告第4冊
- 古窯跡研究会（1988）：「陸奥国官窯跡群V」研究報告第8冊
- 篠原 信彦（1993）：「大蓮寺窯跡—第2・3次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第168集
- 篠原 信彦（1997）：「安養寺配水場前窯跡調査報告書—高座敷遺跡ほか調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第223集
- 篠原 信彦（1998）：「神明社窯跡（第2次調査）—神明社窯跡ほか発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第232集
- 白鳥 良一（1980）：「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ 宮城県多賀城跡調査研究所
- 内藤 政恒（1963～65）：「仙台市台ノ原・小出原瓦窯址群と出土の古瓦（I～IV）」『歴史考古』9～13
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1980）：「多賀城跡—政府跡 図版編」
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1982）：「多賀城跡—政府跡 本文編」
- 渡邊泰伸・結城慎一（1980）：「橋江遺跡発掘調査報告書—造瓦所の調査」仙台市文化財調査報告書第18集



写真1
調査区全景（南より）



写真2
調査区全景（東より）



写真3
1号窓跡全景（東より）

第1図 五本松窓跡（第3次調査）



写真4
2号窓跡全景（南より）



写真5
2号窓跡上半部（東より）



写真6
2号窓跡下半部（南より）



写真7
3号窯跡全景（東より）



写真8
3号窯跡遺物出土状況（東より）

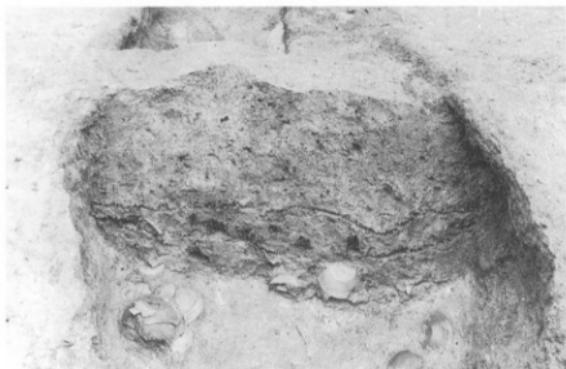


写真9
3号窯跡横断面（東より）

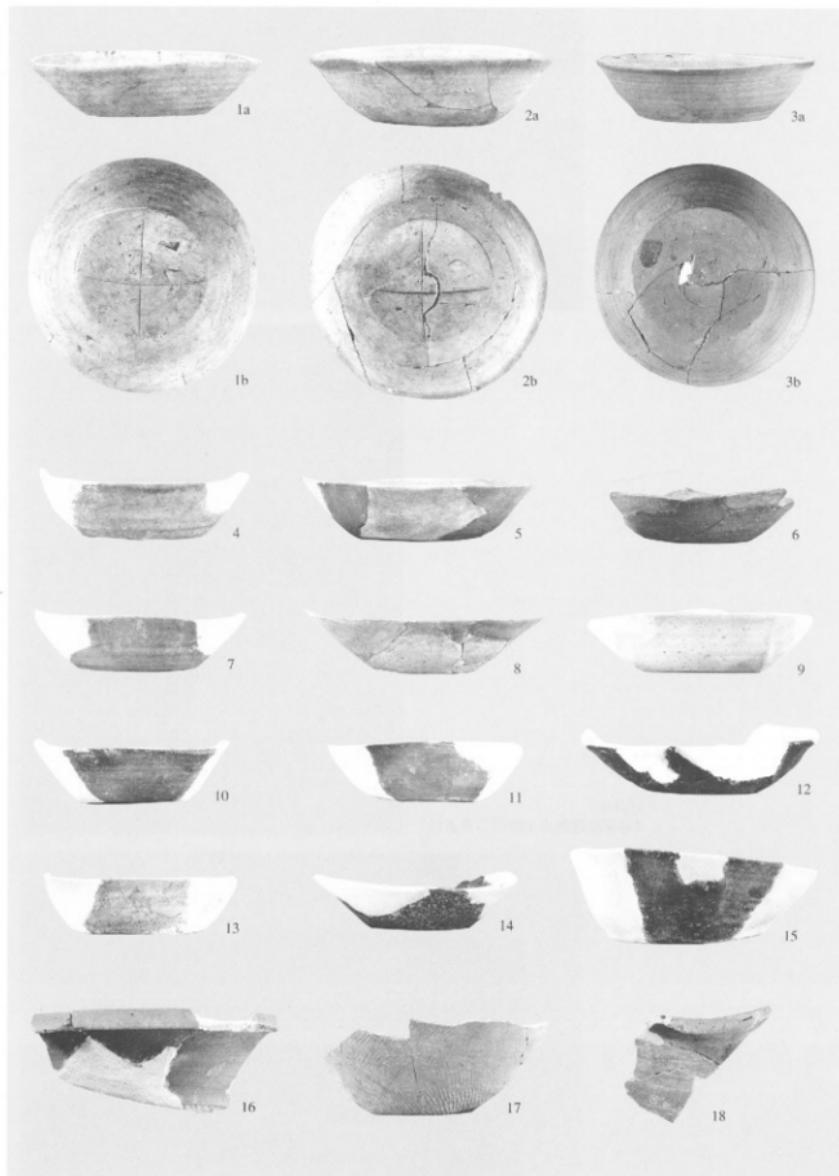


写真10 2号窯跡（S O2）出土遺物（1）



写真11 2号窯跡（S02）出土遺物（2）他

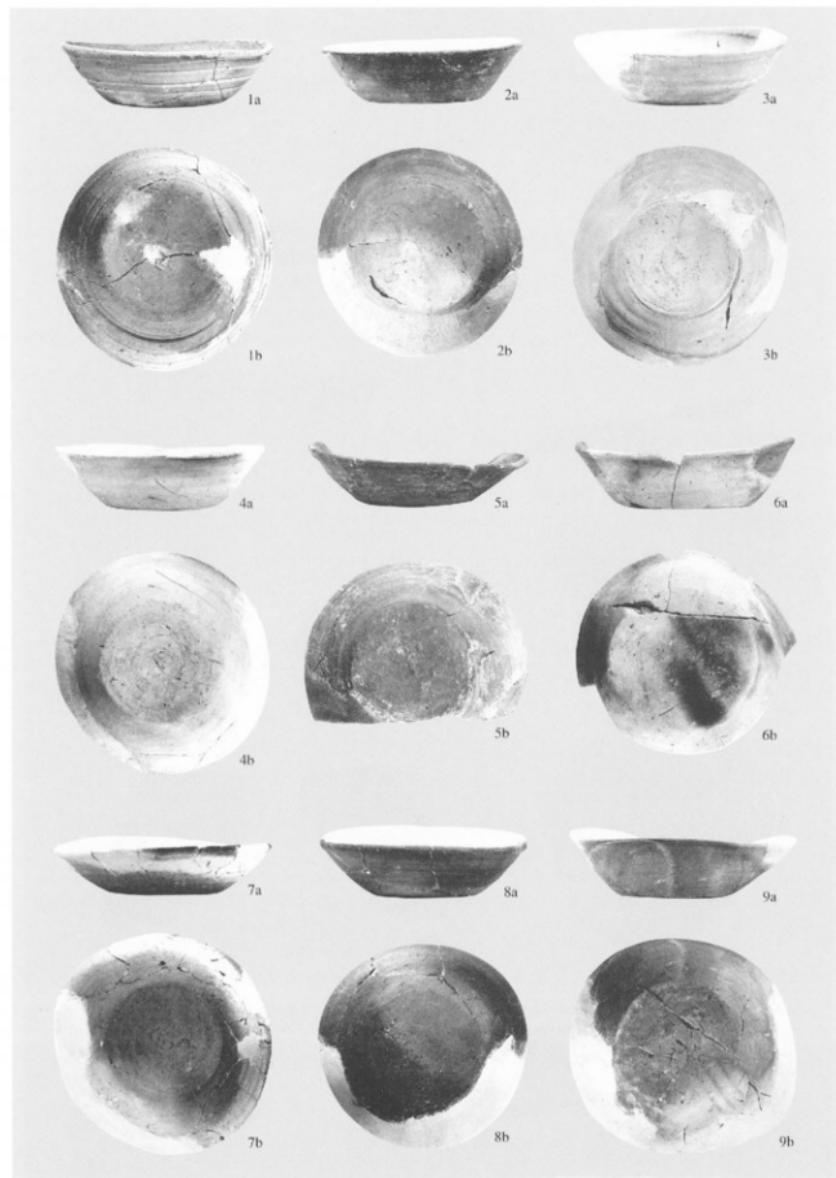


写真12 3号窯跡（S.O3）出土遺物（1）

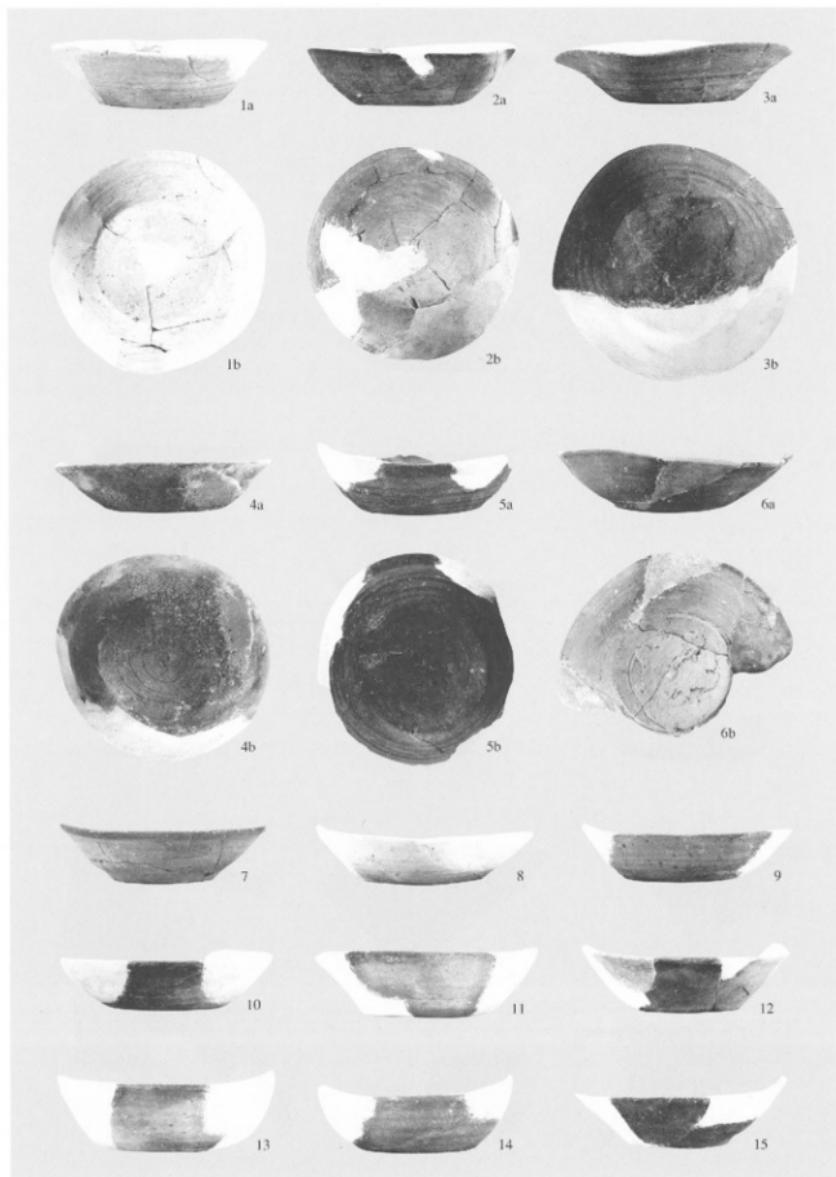


写真13 3号窯跡（S O3）出土遺物（2）

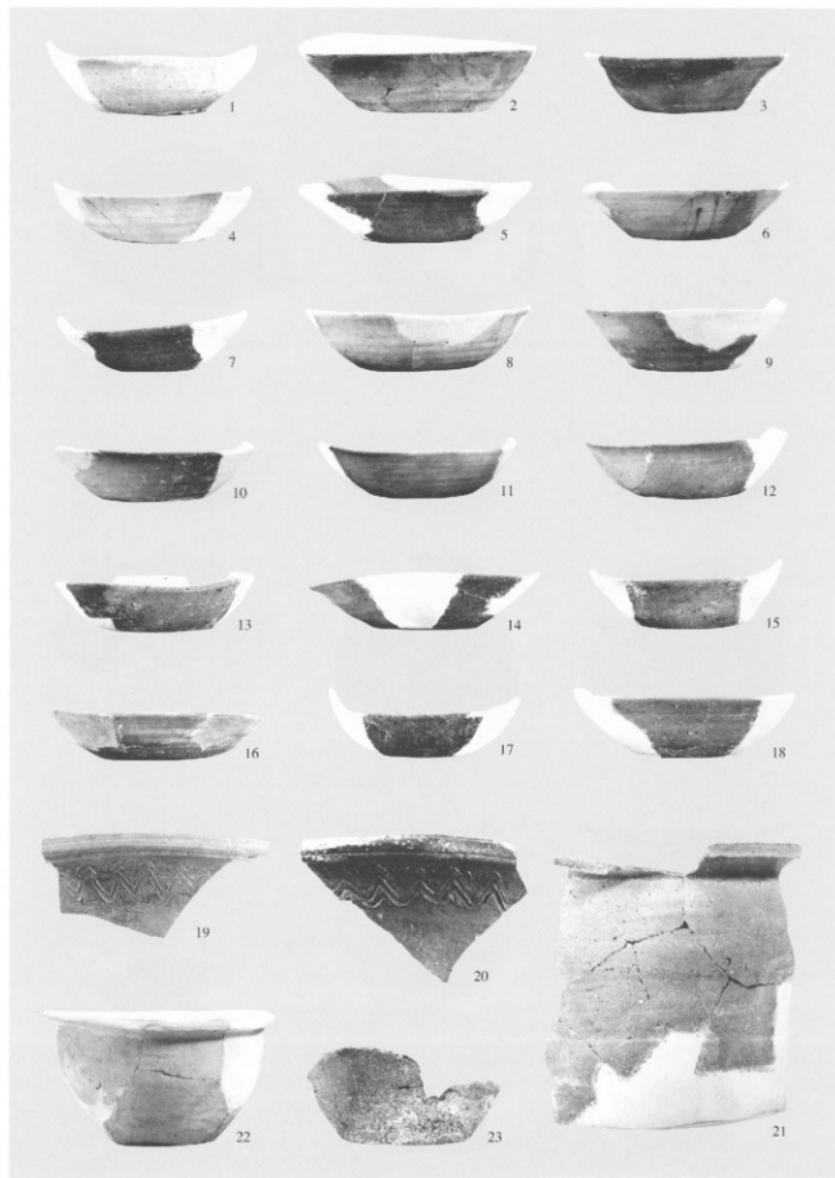


写真14 3号窯跡（S O3）出土遺物（3）

第2編 陸奥国分尼寺跡（第9次調査）

1. 調査要項

遺跡名 陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号01020）

調査地点 仙台市若林区白萩町23

調査原因 RC7階建店舗付共同住宅建設

調査対象面積 約1800m²

調査面積 約200m²

調査期間 確認調査：平成11年4月19～22日 本調査：平成11年5月24日～7月2日

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

担当職員 確認調査：篠原信彦 吉岡恭平 本調査：工藤信一郎 佐藤 淳

調査参加者（野外調査） 佐藤 利子 小林 国子 加藤 由利 阿部 洋子 菅井 君子 小畑 和子

上野 美子 後藤 靖子 小沼ちえ子 佐藤 とし 相原 実

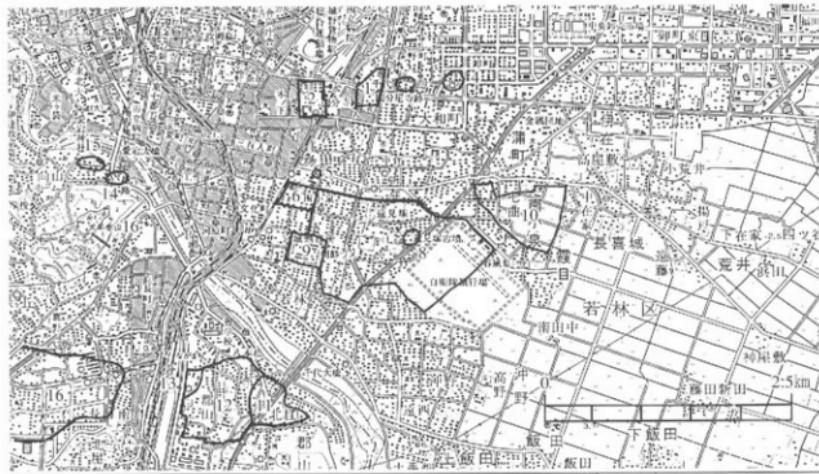
（整理作業） 山田やす子 佐藤 久栄 鈴木 峰子 千葉 勝子 米沢 俊子 伊藤 房江

泉 美恵子 高橋 勝恵 千田タイ子 横尾由記子 菅井 民子 高橋 美香

菅井 清子 菅井 君子

申請者 高橋 正松 高橋 正則

調査協力 調査協力 大和田地株式会社東北支店



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	陸奥國分尼寺跡	寺社跡	沖積平野	前良・平安	9	若林城跡	古墳・城跡	古墳時代	三場・中世～近世
2	陸奥國分寺跡	寺社跡	沖積平野	前良・平安	10	印旛丸島貝塚跡	秦漢遺構	洋風地	古井・平安
3	土城遺跡	集落跡	沖積地	前良・平安	11	北日輪山	城	自然環境	漢文・平安・後漢～後世
4	羽根原跡	城	冲積地	中世	12	郡山古墳	古墳・古墳	自然環境	漢文・平安・古墳～後世
5	法蔵塚古墳	古墳	沖積平野	古墳(後期)	13	西台古墳跡	私有地	自然環境	秦代
6	垂楊柳遺跡	居跡・集落跡	冲積平野	前良・古墳・江戸	14	大字牛堀六番	耕	穴	丘陵斜面
7	南北室道跡	集落跡	自然地帶	前良・古墳・奈良・平安・中世～近世	15	向山東穴群	耕	穴	丘陵斜面
8	蓬見塚古墳	前方後円墳	自然地帶	古墳	16	宮八塚	未開発・包蔵地	地質調査	新石器・绳文・他世～近世

第1図 陸奥国分尼寺跡と周辺の遺跡



第2図 調査地点と周辺の地形

2. 遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡は、JR仙台駅の東南東約2.5kmに位置し、市街地に広がる段丘から沖積平野へ移行する標高約11mの所に立地している。推定寺域の中央部を県道荒浜・原町線（通称産業道路）が東西に貫いており、寺域内には曹洞宗国分尼寺がある。寺院中心部と考えられる県道南側部分は昭和23年に国史跡に指定されている。

陸奥国分尼寺跡の西方500mには、奈良時代後半に建立された陸奥国分寺跡が位置している。東西800尺（242m）、南北800尺

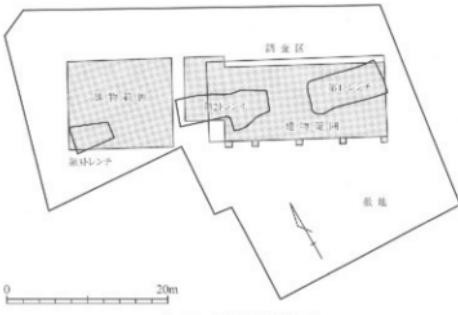
以上の墓地帯で囲まれた大規模な寺院である。伽藍配置は、中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊が並び、中門と金堂は回廊で結ばれている。金堂と講堂の間には東に鐘楼、西に経楼があり、金堂の東には回廊の巡る七重塔を配する堂々たるものである。

南方約1.2kmには、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である南小泉遺跡があり、その中心部には古墳時代前期末に築造された主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳がある。

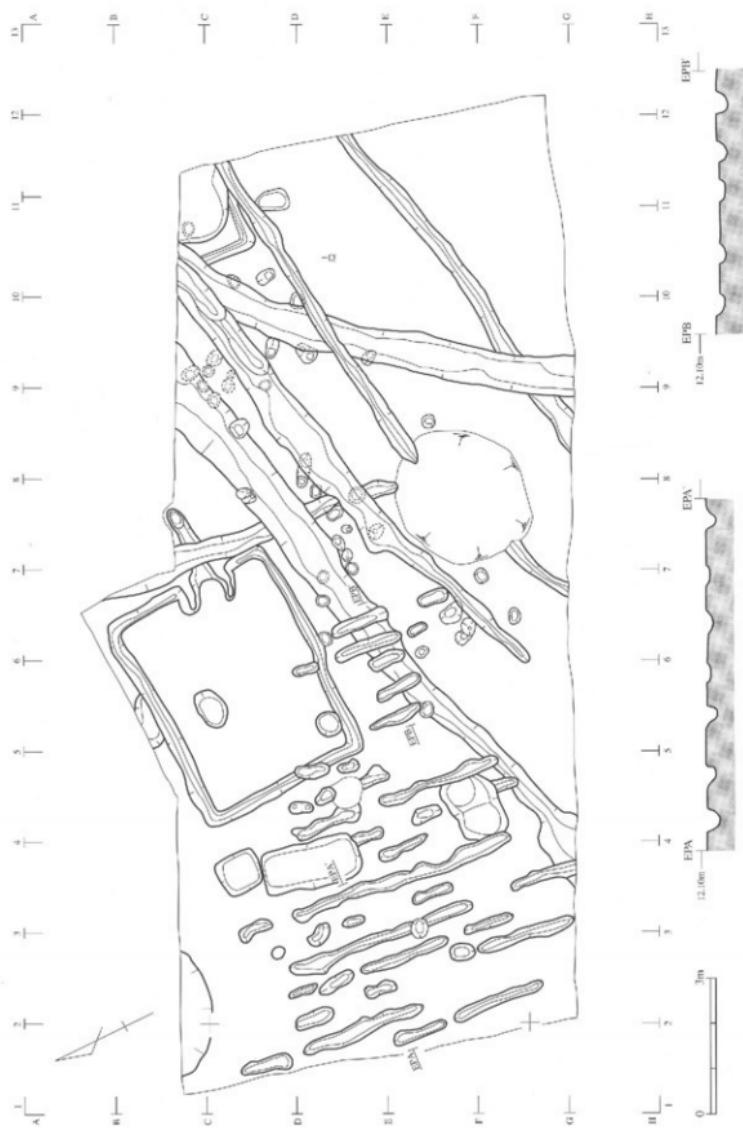
陸奥国分尼寺跡では昭和39年に、「觀音塚」と呼ばれていた陸奥国分尼寺跡の中心建物と考えられる礎石が露出した土壇の一画で発掘調査が行なわれ、南面する桁行5間、梁行4間の礎石建ちの建物跡が発見された。この建物は、金堂跡と考えられている。この金堂跡の周辺では、これまでにも数回の調査が実施されてきたが、開述する建物跡などはあまり発見されておらず、伽藍配置や寺域については不明である。わずかに、平成8年に行なわれた第6次調査において県道を挟んだ金堂跡の北側で、桁行5間またはそれ以上、梁行3間と考えられる東西棟の掘立柱建物跡が検出されている。この建物跡は、ほぼ同一の場所で建て替えられており、金堂跡の中心から150尺（44.7m）、南北中軸線より20尺（6m）東寄りの位置で発見されており、陸奥国分尼寺跡の主要な建物跡の一つと考えられている。

3. 調査の方法と基本層序

陸奥国分尼寺跡の仙台市若林区白萩町地内において、高橋正松・正則氏によりRC7階建店舗付共同住宅建築工事が計画されたことから事前協議を行ない、その後発掘届が提出された。この場所は陸奥国分尼寺跡の推定金堂跡の



第3図 調査区配置図



第4図 造構配図

西側に位置している。仙台市教育委員会では、申請者と協議のうえ、建設予定地内で遺構の残存状況を確認するための調査を行なうこととした。その結果、竪穴住居跡・溝跡などが検出されたことから本調査が必要と判断された。

本調査では、確認調査で遺構が検出されたトレンチを中心に調査区を設定し、重機で表土を排除した後、人力で遺構の検出・精査を行なった。

遺構の測量は、杭A・Bを基準として設定した。その後、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測するための測量を行ない、遺跡内の正確な位置を把握している。

基準点A : X = -194350.524km Y = +6909.245km

基準点B : X = -194342.492km Y = +6893.134km

今回の調査では、盛土下に大別5層、細別では8層が確認された。標高約11.30mの9層が砂礫層となっている。

全体的な層の傾きは、南東方向へ緩やかな下り傾斜を示している。遺構調査終了後、調査区西側に1.5×1.5mの下層調査グリッドを設定し、掘り下げを行なった。遺構検出面から-70cmほど掘り下げたところで、10~15cmの大の中深層を検出している。

4. 発見された遺構と出土遺物

今回検出された遺構には、竪穴住居跡・竪穴遺構3軒・土坑5基・溝跡6条・性格不明遺構2基・小溝状遺構群などのはか、ピット44基がある。

(1) 竪穴住居跡

SI-1竪穴住居跡

調査区中央部北側の3層上面で確認された。小溝状遺構群とSD6溝跡に切られているが、SK5土坑をきっている。平面形は、東西5m、南北4mの長方形で、東壁にカマドが造られている。カマドを基準とする主軸方位はN-88°-Eである。堆積土は4層に分けられ、住居の埋土2層上面には灰白色火山灰がブロック状に混入していた。壁は床面から急角度で立ち上がり、残存する壁高は東壁17~31cm、西壁20~30cm、南壁18~26cm、北壁28~32cmを計る。床面は若干の凹凸はあるもののほぼ平坦で、傾斜はみられない。床面施設としては、ピット・土坑・周溝がある。ピットは南西コーナー部で1基検出されただけで、掘り込みも浅く柱痕跡も確認されなかった。SK1土坑は北側床面で検出され、東西長75cm、南北長60cmで、平面形は不整形形を呈している。掘り込みの浅い凹地状のものである。周溝は床面を全周しており、幅は25~35cmで、北側では幅が広く、東・南側では狭くなっている。

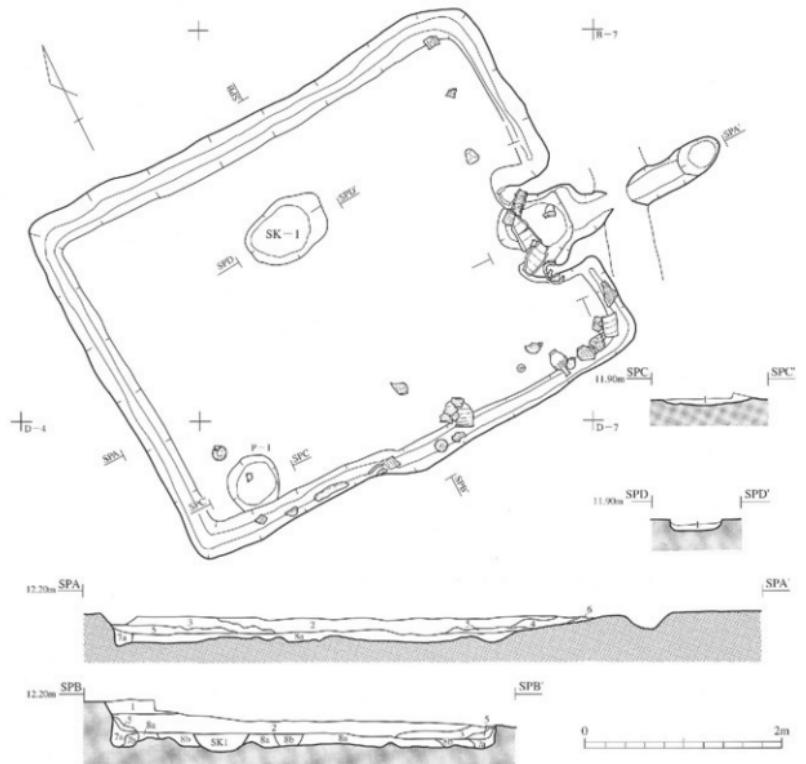
カマドは、東壁の南寄りの部分に構築されており、燃焼部と煙道部及び煙出しピットが検出された。天井部はなく、両側壁が残存しており、瓦が施設として使用されている。燃焼部の規模は、奥行き75cm、幅130cmで底面、奥壁、側壁内面は加熱により赤変していた。底面に瓦片が立てられており、支脚として用いられたものと考えられる。焚き口部に組み合わせて用いられたと考えられる丸瓦が、押しつぶされたように検出され、側壁の芯材としても丸瓦が使用されている。煙道部はSD6溝跡に切られているが、幅30cm、長さ160cmを計る。煙出しピットは45×30cmの楕円形を呈している。

SI-1出土土器群について

今回の調査により出土した登録遺物のうちの大半は、SI-1に伴うものである。図示し得たものは、非クロロ土器器坏（C-1）、ロクロロ土器器坏（D-1）、甕（D-2）、須恵器器坏（E-1~5）、甕（E-7、9）、水瓶（E-8）である。このほかに、カマドの施設瓦としての丸瓦（F-1、3~6、8）や平瓦（G-1~13）重介蓮草文軒丸瓦（F-2）、偏行唐草文軒平瓦（G-7）が出土している。ここでは、年代をある程度限定できるSI-1出土遺物のうち、瓦類を除いてSI-1住居跡廃絶時に埋没したことが確実な、床面、周溝、床面ピット出土の土器群について個々の特徴を

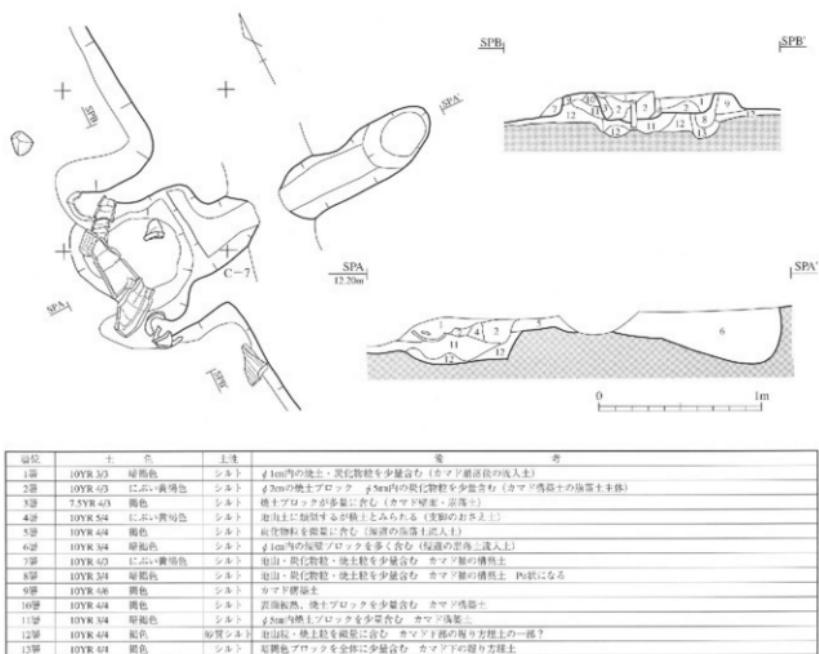
挙げ、年代の検討をしていきたい。

SI-1は、その堆積土上部に灰白色火山灰が含まれていることから、出土土器群には、その降灰前の時期が与えられる。灰白色火山灰の年代は、陸奥国分寺跡において灰白色火山灰直上に承平4（934）年の七重塔焼失時に伴うと考えられる焼上層があること、直下に陸奥国修理府が設置された貞觀12（870）年以降に用いられた宝相花文や連珠文の軒瓦を多量に含む整地層があることから、陸奥国修理府設置以降、七重塔焼失以前ということになる。さらにこれらの瓦の使用期間と整地層中の廃棄という時間幅を考慮に入れて10世紀前半頃と捉えられる（註1）。火



層位	土色	寸法	備考	
			下層	上層
SI01	1層	10YR 3/1	黒褐色	シルト
	2層	10YR 2/2	黒褐色	シルト
	3層	10YR 3/2	黒褐色	シルト
	4層	10YR 3/1	黒褐色	シルト
	5層	10YR 3/2	黒褐色	シルト
	6層	10YR 3/2	黒褐色	シルト
	7a層	10YR 3/3	黒褐色	シルト
	7b層	10YR 4/4	褐色	シルト
P-1	8a層	10YR 3/4	暗褐色	シルト
	1層	7.5YR 4/2	褐色	シルト
SK01	1層	10YR 4/1	褐色	シルト

第5図 SI01堅穴住居跡



第6図 SOO1 Kamado平面図・断面図

山灰の噴出源については、湯沼周辺、栗駒山などの見解も示されているが（註2）、現時点では十和田山をその供給源とする見方が一般的である（註3）。また文献史料による検討から、『扶桑略記』延喜15（915）年の火山灰降灰記事を以て灰白色火山灰の実年代とする考えが示されている（註4）。

SI-1から出土した土器は、指のオサエとナダにより調整された口径6.6cmの小型の壺（C-1）の他はロクロ調整により製作されている。ロクロ使用の上部器は、東北地方南部の上部器幅年式の表形ノ入式に該当し、平安時代に位置付けられている（註5）。土器器壺（D-1）は、ロクロで成形され、静止糸切り離し後外面を手持ちラケグリし、内面を横方向のミガキにより仕上げている。法量は口径が8.3cm、底口比は0.6、高口比は0.37で、厚手（7mm）にできている。口縁部内面には薄く赤褐色の油焼状付着物と灯芯の痕跡が認められること（写真図版17-2b）から灯明皿としての使用が考えられる。壺（D-2）は内外面ロクロ調整された口径25cmの大型の長削壺である。

須恵器壺は、いずれも回転ヘラ切りによる切り離し技法を用いており、底部周縁を回転ヘラケグリにより再調整するもの（E-1、3~4）と切り離し後無調整のもの（E-2、5）がある。法量は口径が12.4~14.4cm、底口比は0.53~0.6、高口比は0.27~0.32ではほぼまとまった数値を示している。焼成は堅密で胎土は石英粒、長石粒などをやや含む。器形は概ね逆台形を示しており、体部下半から直線的に外傾して立ち上がり口縁部がわずかに外反し器厚がやや厚手のもの（4mm）（E-1、3）とやや薄手のもの（3.5mm）（E-5）口縁部が丸みをもって立ち上がり器厚がやや薄手のもの（3.5mm）（E-2）、口縁部まで直線的に立ち上がり器厚が薄手のもの（3mm）に分類し得る。須恵器壺

(E-7) は、口径が30cmの大型のもので器高が口径よりも若干小さい。叩き成形後に内外面ロクロ調整され、内面にヘラナデを施している。壺(E-9)は、口径が30cmの大型であるが器高が口径よりも小さい鉢形を示す。内外面ともロクロ調整のみである。水瓶(E-8)は、卵形の胴部に細長い頸部と台形状の高台を付す形態を示し、内外面ロクロ調整で仕上げられ口縁部はごく薄く成形されている。頸部から体部上半部にかけて暗オリーブ褐色をした自然釉の湧出が見られる。類例としては、硯沢B9号窯跡より頸部のみ出土しており8世紀中葉頃と報告されている(註6)。ただし、口縁部の形状がE-8と異なり丸みをおびて厚手に作られている。

SI-1出土土器群は、手捏ねの小壺上師器坏をのぞくと、ロクロ土師器と須恵器で構成されており赤燒土器を全く含まない。また、須恵器坏は、底部切り離し技法が回転ヘラ切りのみで回転ヘラケズリによって再調整されるものを含む。以上の特徴は多賀城跡出土土器群のうちC群土器に位置付けられているものに認められる(註7)。最近の編年案によれば、C群土器に属する一括土器群でかつ年代をある程度限定し得るものは多賀城跡SI2153件居跡・SI2160A件居跡出土土器群(以下第I群土器と略記)(註8)、多賀城跡SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群(註9)があり、第I群土器→SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群の変遷が考えられている。その根拠として第I群土器中、坏類は底部切り離しがヘラ切りのみで構成されている点、上師器坏の内面のミガキが放射状のものを含まず横方向のみである点、土師器壺に非ロクロのものが含まれている点、ロクロ上師器壺に叩き調整のものが含まれている点を挙げている(註10)。SI-1出土土器群で見ると、坏類に回転糸切りのものを含んでいない点、上師器坏のミガキが横方向である点で第I群土器により近い傾向を示しC群土器中でも前出的要素を見出しえる。年代的には、第I群土器は、類似する伊治城跡SH173住居跡出土土器群、市川築造跡SK236土塼出土土器群との対比から上限年代を8世紀末と捉え、下限年代を9世紀前葉とし9世紀初頭を中心とする年代が想定されている。一方SE2101B井戸跡第Ⅳ層出土土器群は、上限年代を9世紀前葉に、下限年代を共伴する墨書き土器から警城団成立期の承和10~15(843~848)年以降の9世紀中頃に位置付けている(註11)。よってSI-1出土土器群は、C群土器中でも古い様相を呈することより9世紀初頭から前葉を中心とした年代が与えられよう。

(註)

(註1) 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』

なお、これと同じ灰白色火山灰が秋田県仙北町弘田柏跡の外郭線C期角材列の機能している期間に降りていることから、このC期角材の年輪年代測定値907年を以て火山灰の降灰時期も907年以降とする新たな知見が得られている。児玉準備 1997 「弘田柏跡-第107~109次調査概要-」

(註2) 庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

(註3) 新井房夫・町田洋・森鷗広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』第51巻9号

井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”的同定」『第四紀研究』第29巻2号

阿子鳥功 1991 「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

(註4) 鈴木恵治 1982 「文獻史料からみた古代奥羽での大災」『考古風上記』第7号

(註5) 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会

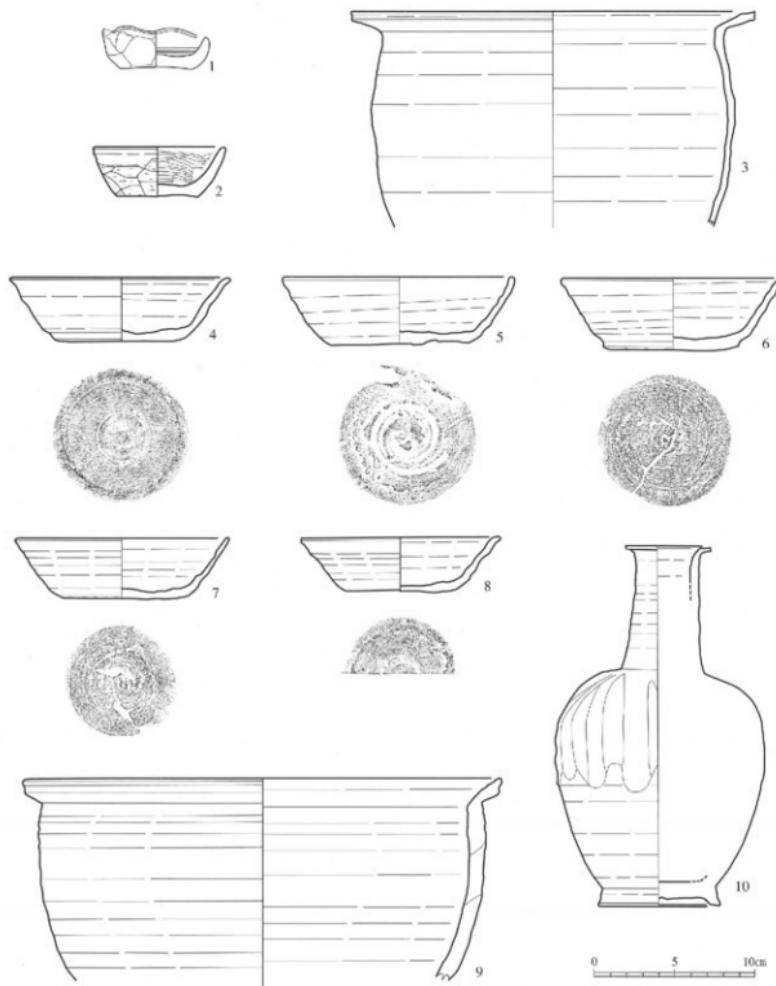
(註6) 宮城県教育委員会 1987 「硯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集

(註7) (註1)と同じ。

(註8) 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992 「多賀城跡」第62次調査

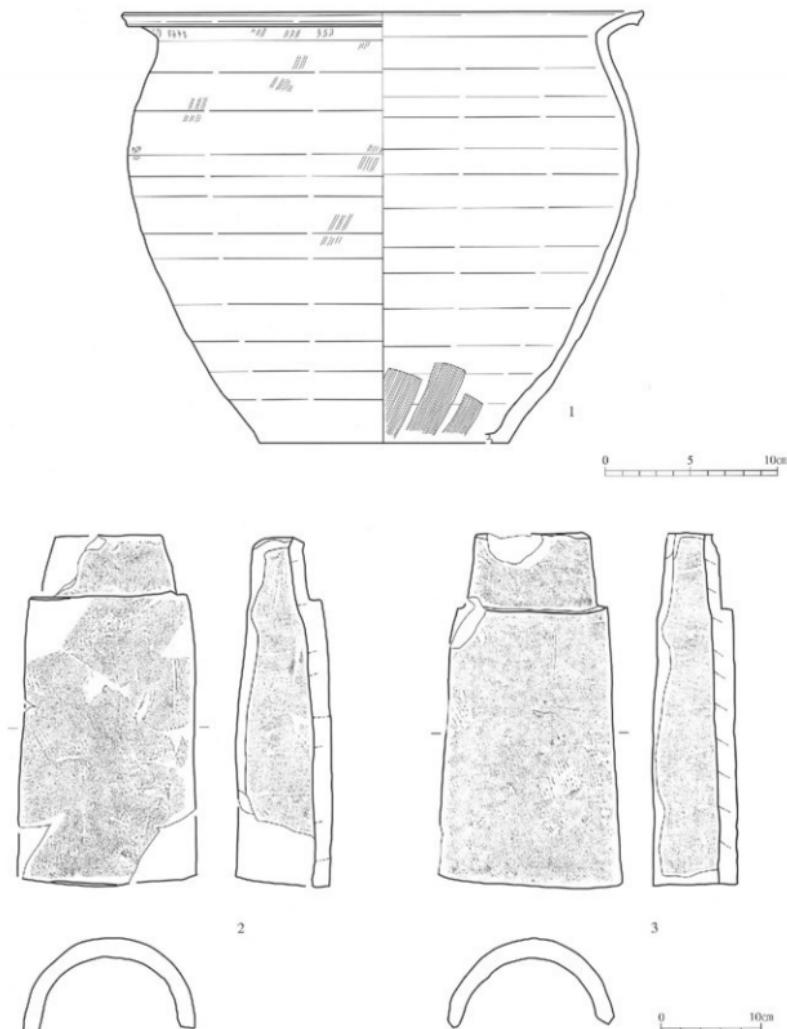
(註9) 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991 「多賀城跡」第60次調査

(註10) (註8)と同じ。



番号	型鉢番号	出土地名等	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	残高等	外観	内面	底部	写真枚数
1	C-1	SI1	土師器	壺	6.6	4.4	2.5	空腹	指捺目3	指捺目3→指ナメ	指ナメツケ	17-1
2	D-1	SI1	土師器	壺	8.3	5.0	3.1	空腹	コクロナメ・手背もテラ(?)	コクロナメ→ヘラヌガキ	同上へタ切口→ヘラヌ(?)	17-2
3	D-2	SI1	土師器	壺	(25.3)	(-)	(-)	1.4	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-11
4	E-1	SI1	土師器	壺	13.7	8.2	3.9	空腹	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-4
5	E-2	SI1	土師器	壺	14.4	8.5	4.2	空腹	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-5
6	E-3	SI1	土師器	壺	14	8.4	4.5	空腹	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-6
7	H-4	SI1 9マジ	土師器	壺	13.4	7.4	3.8	空腹	コクロナメ→ヘラ(?)	コクロナメ	同上へタ切口→ヘラ(?)	17-7
8	H-5	SI1	土師器	壺	12.4	6.8	3.4	空腹	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-9
9	H-9	SI1	土師器	壺	(29.8)	(-)	(13.5)	1.4	コクロナメ	コクロナメ	コクロナメ	17-13
10	H-8	SI1	土師器	水瓶	5.3	7.0	22.4	空腹	コクロナメ	云台	云台	17-12

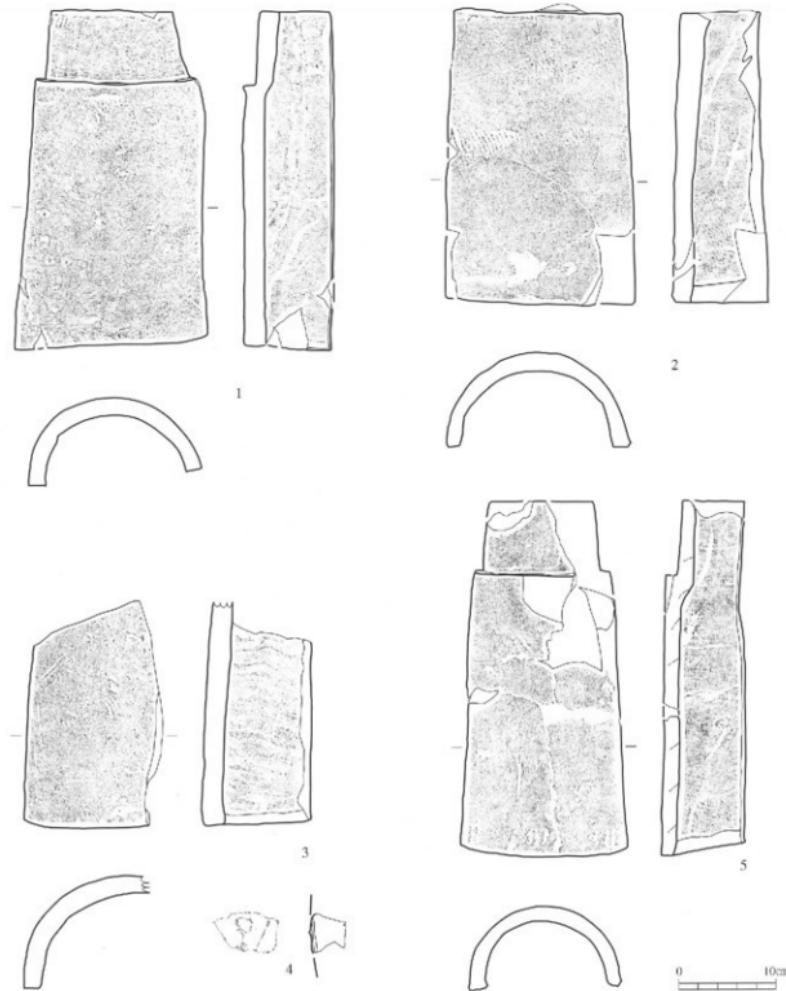
第7図 SI-1出土遺物（1）



番号	登録番号	出土位置	種別	計測	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	残存	内面	外面	写真回数
1	II-7	SH1	壺	深	30.6	14.6	25.7	2/3	平滑・ほつらう	コタロニア→ヘラクシア	17-10

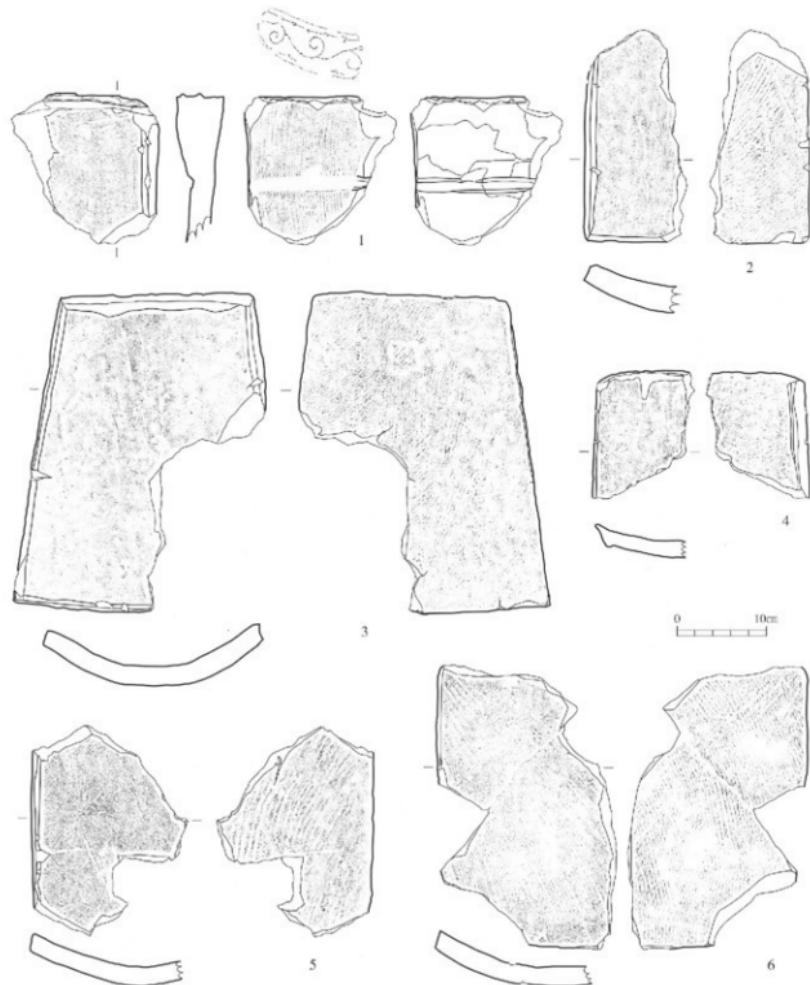
番号	登録番号	出土位置	種別	最大長(cm)	広周幅(cm)	扶葉幅(cm)	厚さ(cm)	内面	外面	写真回数
2	II-1	SH1 カマツ刷	丸瓦	39.5	18.0	5.7	1.9	鏡面→スリット→ロクロナギ・剥面ヘラケズ	布目裏、柄土目裏、剥面ヘラケズ	18-1
3	II-3	SH1 カマツ刷	丸瓦	36.1	18.8	11.8	2.0	鏡面→スリット→ロクロナギ・剥面ヘラケズ	布目裏、柄土目裏、剥面ヘラケズ	18-2

第8図 SI-1出土遺物（2）



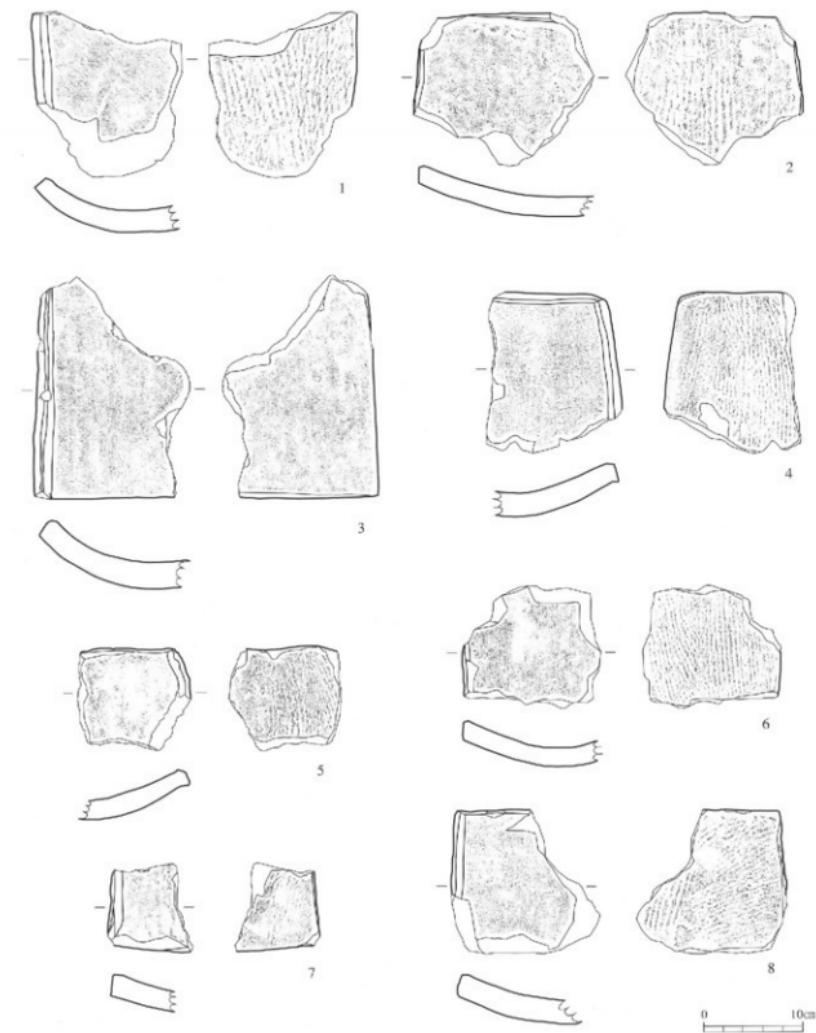
番号	登録番号	系・部品番号	種 別	最大長(㎜)	左幅(㎜)	右幅(㎜)	厚さ(㎜)	測定(㎜)	左	右	四 面	写真出版
1	F-1	SH1 カマド焼	瓦瓦	34.9	19.6	12.5	1.7	調理3→ナメ 調面ヘラケズリ	布田窯一筋ナメ、瓦土柱直、斜面ヘラケズリ			18-3
2	F-5	SH1 カマド焼	瓦瓦	30.9	(13.9)	(16.9)	1.9	調理3→スリケン 調面ヘラケズリ	布田窯、調面ヘラケズリ			18-4
3	F-6	SH1	瓦瓦	(23.2)	(14.0)	(14.0)	3.1	調理3→ナメ 調面ヘラケズリ	布田窯、瓦土柱直、斜面ヘラケズリ			19-2
4	F-2	SH1	瓦瓦	(-)	(-)	(-)			布田窯、瓦土柱直、斜面ヘラケズリ			19-3
5	F-8	SH1 カマド	瓦瓦	36.8	18.9	(10.7)	2.0	調理3→スリケン、私清蒸ナメ、側面ヘラケズリ	布田窯一筋スリケン、私清蒸ナメ、側面ヘラケズリ			18-6

第9図 SI-1出土遺物（3）



番号	登錄番号	地點名	種別	最大長(cm)	広葉幅(cm)	最窄幅(cm)	厚さ(cm)	内面	外面	参考文献
1	G-7	SI-1	輪唐子形器	(16.0)	(16.0)	(10.5)	3.0	平行凹き→ナギ、朱墨有り、剣面ヘラケズ	布目表→スリケン、側面ヘラケズ	19-4
2	G-1	SI-1	平底	(23.8)	(11.4)	(—)	3.0	布目表→スリケン、側面ヘラケズ	網目表、側面ヘラケズ	19-6
3	G-10	SI-1	平底	25.5	(15.6)	21.5	2.4	純凹き、剣面ヘラケズ	布目表→スリケン、側面ヘラケズ	19-5
4	G-8	SI-1	平底	(13.5)	(11.1)	(—)	1.9	純凹き→ナギ、裏面ヘラケズ	布目表→スリケン、側面ヘラケズ	20-11
5	G-2	SI-1	平底	(23.3)	(17.4)	(—)	2.1	純凹き→ナギ、裏面ヘラケズ	布目表→スリケン、側面ヘラケズ	20-1
6	G-4	SI-1	平底	(30.3)	(17.8)	(15.8)	2.2	複凹き、自然端付着、側面ヘラケズ	布目表→ハナナギ、側面ヘラケズ	20-3

第10図 SI-1出土遺物（4）



第114図 SI-1出土遺物(5)

番号	登録番号	出土施設名	種類	最大長(cm)	広幅深(cm)	軸部幅(cm)	厚さ(cm)	写真	写真回数
1	G-5	SIH	平瓦	(16.7)	(15.0)	(17.0)	2.5	写真3、鏡面ヘラケズリ	20-5
2	G-3	SIH	平瓦	(15.8)	(-)	(-)	2.1	写真3、ナギ、鏡面ヘラケズリ	20-2
3	G-6	SIH	平瓦	(22.8)	(15.5)	(-)	2.6	写真3、ナギ、鏡面ヘラケズリ	20-4
4	G-9	SIH	平瓦	(16.6)	(13.5)	(-)	2.4	写真9	20-13
5	G-13	SIH	平瓦	(10.4)	(11.5)	(-)	2.0	写真9→2面、鏡面ヘラケズリ	20-9
6	G-12	SIH	平瓦	(11.7)	(14.0)	(-)	7.1	写真3、鏡面ヘラケズリ	20-8
7	G-11	SIH	平瓦	(8.9)	(8.3)	(-)	2.4	写真3、鏡面ヘラケズリ	20-12
8	G-15	SI2	平瓦	(14.6)	(14.8)	(9.1)	2.6	写真3、鏡面ヘラケズリ	20-7

(註11) 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993 「多賀城跡」第58・60次調査資料の追加報告

SI-2堅穴住居跡

調査区東端北側の3層上面で確認された。SD3・5溝跡とSX2性格不明遺構に切られている。南西コーナー部を確認したのみであるが、平面形と主軸方位はSI-1堅穴住居跡とはほぼ同様と思われる。堆積土は3層に分けられ、壁は床面から急角度で立ち上がり、残存する壁高は西壁20cm、南壁10cmを計る。床面はSX2性格不明遺構に切られはほとんど残存していない。床面施設としては周溝があり、幅は20~25cmを計る。

SI-3堅穴遺構

調査区東端北側の3層上面で確認された。SD1・5溝跡に切られている。南西コーナーの一部を確認したのみで遺構はほとんど残存していない。残存する西壁の壁高は、8~10cmを計る。床面ははっきりしないが、加熱により赤変した硬化面が検出された。



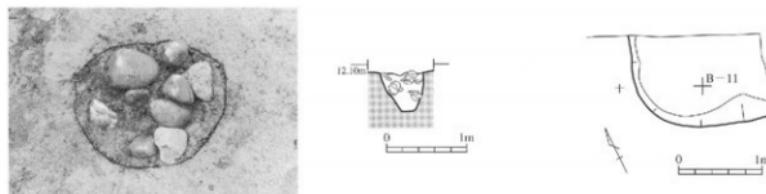
第12図 SI-2・3堅穴住居跡

(2) 性格不明遺構**SX-1性格不明遺構**

調査区北西部に位置し、平面形は円形を呈し、径約30cmを計るピット状の遺構である。底面はちいさく、深さは約25cmを計る。堆積土については、10cm大の礫が人為的に詰め込まれたような状況を呈している。

SX-2性格不明遺構

調査区東端北壁側の3層上面で確認された。SI-2堅穴住居跡の床面の精査時に検出し、調査区北壁断面の検討により堅穴住居跡を切っていると判断された。南西コーナー部を確認したのみであるが、平面形は隅丸方形を基調にしていると思われる。残存する壁高は約10cm程度であるが、調査区断面をみると断面形は逆台形状を呈している。床面は小縫面となっている。



第13図 SX-1性格不明遺構

第14図 SX-2性格不明遺構

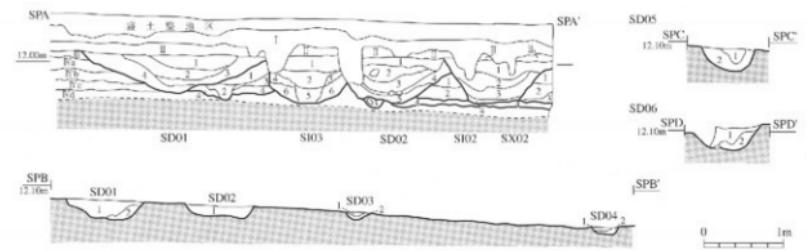
(3) 溝跡

溝跡は調査区東側で6条検出され、SD5・6以外、方向はおむねN-80°-Eのなかにおさまっている。多数のピットと重複しているが、これらのピットについては溝よりも古いものと新しいものの両方が認められる。後述する小溝状遺構群に切られている。

SD-1溝跡

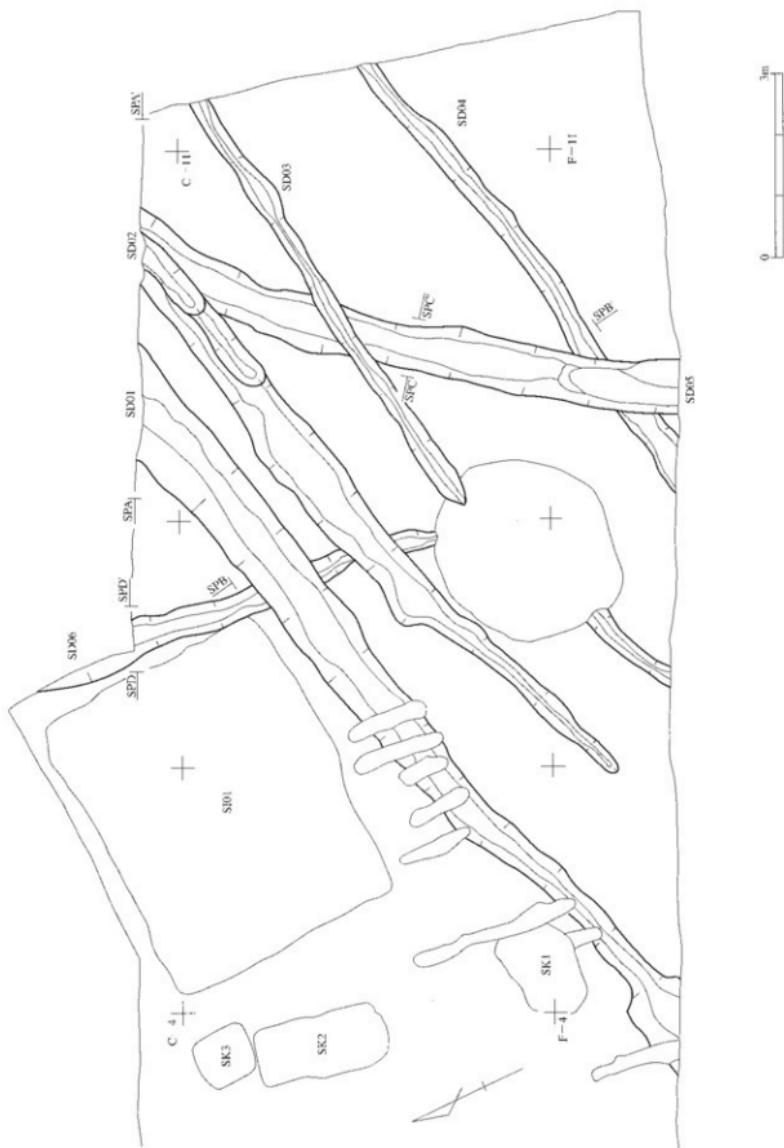
調査区を東西方向に横断し直線的に延びる溝で、SD6を切っている。方向はN-80°-Eである。検出長は13.5m、幅は40~100cm、深さは北側が約30cm、南側で約7~20cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

出土遺物は図示できなかったが、堆積土中から土師器の細片が出土している。



層	層	土色	土性	編	
				名	号
表土層	1層	HYR 5/1 黒褐色			
	2層	HYR 5/2 黒褐色			
既存	3層	2.5Y 3/1 黑褐色			
B ₁ 層	4層	HYR 5/3 黒褐色			
B ₂ 層	5層	2.5Y 6/5 深灰色			
B ₃ 層	6層	HYR 5/4 黑褐色			
既存	7層	2.5Y 5/4 深灰色	砂質		
SD01	1層	HYR 5/2 黑褐色	シルト		
	2層	HYR 2/0 黑褐色	シルト		
	3層	HYR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	4層	HYR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4ブロック状に混入	
	5層	HYR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
SD02	1層	7.5YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	2層	10YR 2/2 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	3層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	
	4層	10YR 2/2 黑褐色	シルト	泥化物	灰土粒混入
	5層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	灰土粒混入
SD03	1層	10YR 3/2 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	2層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	3層	10YR 2/0 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	4層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	5層	10YR 2/2 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
SD04	1層	10YR 3/2 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	2層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	3層	10YR 2/0 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	4層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	5層	10YR 2/2 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
SD05	1層	10YR 3/2 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	2層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	3層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	4層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	5層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
SD06	1層	10YR 3/2 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	2層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	3層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干
	4層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	泥化物	泥干
	5層	10YR 3/1 黑褐色	シルト	10YR5/4泥干	泥干

第15図 SD01~SD06断面図



第16図 SD01~06溝跡平面図

SD-2溝跡

調査区を東西方向に横断し直線的に延びる溝で、SD5・6を切っている。方向はN-76°-Eである。検出長は5.8m、幅は30~90cm、深さは北側が約15~25cm、南側で約5~8cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

SD-3溝跡

調査区を東西方向にわずかに湾曲しながら延びる溝で、SD5を切っている。方向はN-82°-Eである。検出長は12.0m、幅は30~40cm、深さは北側が約10~20cm、南側で約7~17cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

SD-4溝跡

調査区を東西方向に横断し直線的に延びる溝で、SD5に切られている。方向はN-81°-Eである。検出長は8.6m、幅は40~50cm、深さは北側が約10cm、南側で約8~15cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

SD-5溝跡

調査区を南北方向に縦断し直線的に延びる溝で、方向はN-40°-Eである。検出長は6.7m、幅は70~90cm、深さは北側が約30cm、南側で約30cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

SD-6溝跡

調査区を南北方向に縦断し直線的に延びる溝で、SD1・2に切られている。方向はN-5°-Eである。検出長は7.0m、幅は40~60cm、深さは北側が約15cm、南側で約8cmである。断面形は、舟底形である。堆積土は2層に分けられた。

（4）土 坑

検出された土坑はいずれも調査区西半に位置している。

SK-1土坑

調査区南西部に位置し、平面形は不整形形を呈している。長軸185cm、短軸110cmを計る。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面には段差があり、深さは西側で22cm、東側で38cmを計るが、平面形がこの段差部分で若干くびれている事などから、2基の土坑が重複している可能性もある。堆積土については、試掘調査時に東側部分の掘り込みを行なっていたことからあまり残っていなかったが、人為的に埋め戻されたと考えられる状況を呈している。

SK-2土坑

調査区北西部に位置し、平面形は長方形を呈している。長軸215cm、短軸100cmを計る。壁は底面から急角度に立ち上がっている。底面は壁際に比べ中央部が若干凹んでいるが、ほぼ平坦で、深さは25~30cmを計る。堆積土については、試掘調査時に南側部分の一部の掘り込みを行なっていたが、人為的に埋め戻されたと考えられる状況を呈している。

SK-3土坑

調査区北西部に位置し、平面形は隅丸方形を呈している。長軸95cm、短軸85cmを計る。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、深さは約10cmを計る。堆積土については、人為的に埋め戻されたと考えられる状況を呈している。

SK-4土坑

調査区北西コーナー部で北壁にかかる位置しており、完掘していないが、平面形は円形を基調としていると思

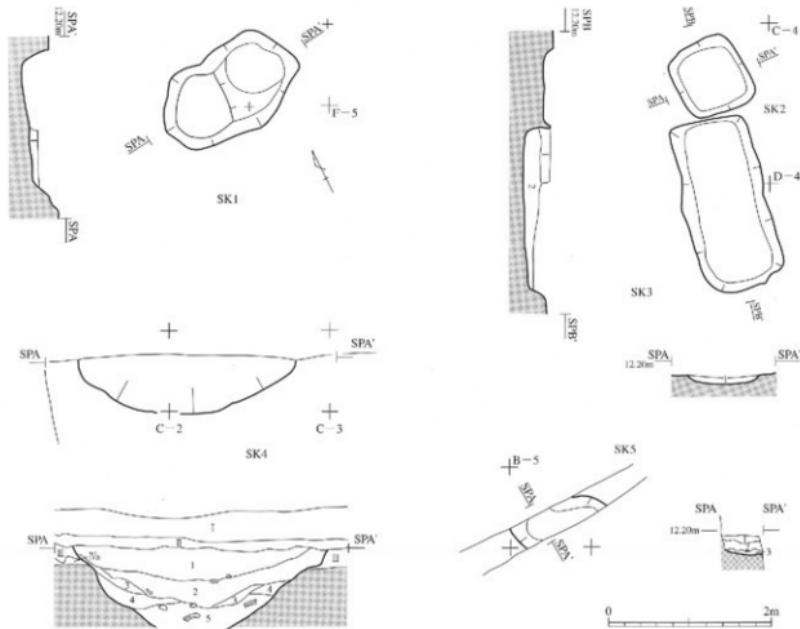
われ、長軸270cm以上を計る。底面も検出していないが、検出された壁は底面から緩やかに立ち上がっている。堆積土には5~10cmの小礫が入り、瓦などの遺物も混入している。

SK-5土坑

調査区北西部で北壁にかかる位置しており、SI01竪穴住居跡に切られている。平面形は円形を基調としていると思われ、確認長で100cmを計る。底面はほぼ平坦で、深さは約20cmを計る。検出された壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

(5) 小溝状遺構群

小溝状遺構群は調査区西側で検出されたが、耕作の影響によりかなりの削平を受けており、特に東側の遺存状況はよくない。これら小溝の方向は、おおむねN-5.5°~Eのなかにおさまっている。検出された大きさも多様で、



SK01土手

層位	土 色	土性	施 工	考
1段	H0YR 2/2 黒、褐色	シルト	硬土・灰化含む	これらのプロフの混合層
	H0YR 4/4 褐色	シルト	(地山ブロック)	人为堆積の可能性あり

SK02土手

層位	土 色	土性	施 工	考
1段	H0YR 3/1 黒褐色	シルト	しまり良 光沢ひどい	H0YR 3/4 硬土に深入
2段	H0YR 3/1/2 黒褐色	シルト	しまり良 光沢ひどい	H0YR 3/4 大ブロック状に深入

SK03土手

層位	土 色	土性	施 工	考
1段	H0YR 3/1 黑褐色	シルト	しまり良 光沢ひどい	H0YR 3/4 大ブロック状に深入

SK04地上

層位	土 色	土性	施 工
1層	H0YR 3/2 緑褐色	シルト	45cm内の門柱を含む、灰化物・硬土層を少量含む
2層	H0YR 3/3 緑褐色	シルト	45cm内の門柱を含む、灰化物・硬土層を少量含む
3層	H0YR 3/2 緑褐色	シルト	(上層かやや青)
4層	H0YR 4/2 灰青褐色	シルト	45cmの門柱ブロック層に並び、門柱を含む、堅泥・強粘
5層	H0YR 4/2 灰青褐色	シルト	堅泥を軟泥に少量含む、門柱を含む

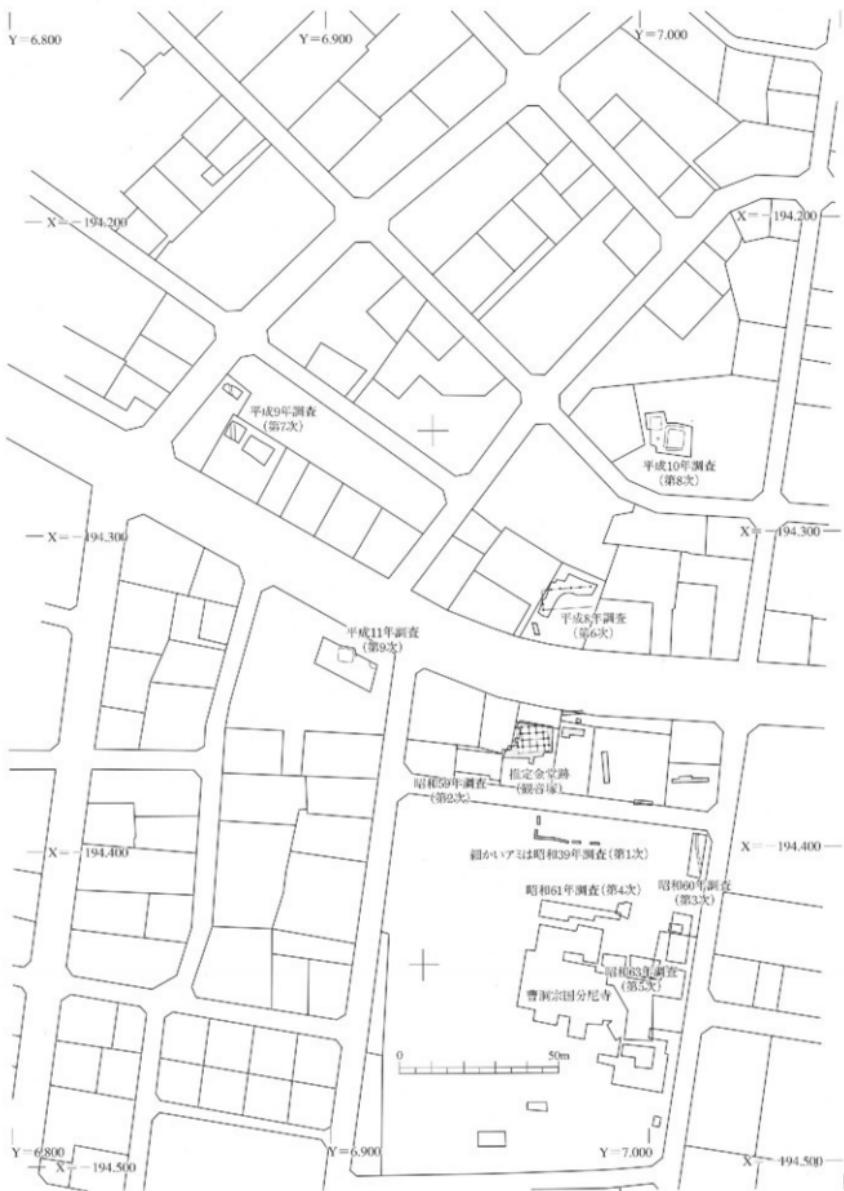
層位	土 色	土性	施 工
1層	H0YR 2/2 黑褐色	シルト	
2層	H0YR 2/3 画面色	シルト	地山を小ブロック状に少量含む
3層	H0YR 4/6 雪 色	シルト	地山ブロックより構成

第17図 土坑平面図・断面図



番号	登録番号	系・系部	高大長(cm)	幅・幅	厚・厚	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	外観	内面	表部	等級
1	D-3	SK2	土師器	平	(3.5)	5.6	3.5	完形	クロナデ	カクナデ→ヘラギ	目地有り	17-3	
2	E-6	SH1	灰窓器	平	(13.6)	(8.0)	3.3	2/3	クロナデ	クロナデ	目地ヘラギ	17-8	
3	F-1	1号灰窓	土器品	陶・灰窓	7.8	(--)	(8.2)	2/3	ヘラケズリ・斜によるおろぎ	ヘラケズリ	目地有り	17-14	
4	F-9	FM2008上	丸瓦	(10.2)	(9.1)	(4.1)	2.1	縫合→スリナシナフ、引面ヘラケズリ	赤目地、焼面ヘラケズリ	赤目地、焼面ヘラケズリ	19-1		
5	G-14	SK4	平瓦	(12.7)	(18.0)	(--)	2.6	縫合	赤目地・ナフ、凹凸ヘラケズリ	赤目地・ナフ、凹凸ヘラケズリ	20-3		
6	F-7	SH1	丸瓦	33.1	11.9	11.0	2.6	縫合・スリナシ、焼面ヘラケズリ	赤目地、焼面ヘラケズリ	赤目地、焼面ヘラケズリ	18-5		
7	G-16	SK4	平瓦	(15.7)	(14.9)	(--)	2.3	縫合・ナフ、斜面ヘラケズリ	赤目地・スリナシ、斜面ヘラケズリ	赤目地・スリナシ、斜面ヘラケズリ	20-6		
8	G-17	SK4	平瓦	(22.8)	(14.4)	(--)	2.8	縫合・引面ヘラケズリ	赤目地・ナフ、引面ヘラケズリ	赤目地・ナフ、引面ヘラケズリ	20-10		

第18図 その他の出土遺物



第19図 陸奥国分尼寺跡調査地点と建物配置図

長さ40～260cm、幅15～20cm、深さ10～15cmを有する。堆積土はすべて単層で、10YR3/1～3/2黒褐色シルト土に、10YR4/3に近い黄褐色土又は2.5Y4/3オリーブ褐色土をブロック状に混入している。小溝状造構の時期についてでは出土遺物も少なくはっきりしないが、堅穴住居跡や溝跡などを切っていることから中世以降のものと考えられる。

5.まとめ

1. 今回の調査は、陸奥国分尼寺跡の推定寺域の北西側で行なわれた。
 2. 今回の調査で発見された造構は、堅穴住居跡3軒、溝跡6条などであり、陸奥国分尼寺跡に係わる施設と考えられるものは検出されなかった。
 3. 出土遺物は、土師器、須恵器、瓦など整理用平箱で13箱程度である。大部分がSI-1堅穴住居跡の出土遺物である。
 4. 陸奥国分尼寺と陸奥国分寺は、同時代に同一基準で造営されたものと考えられるが、これまでの調査では、陸奥国分尼寺の伽藍配置はもとより、寺域範囲についても明らかになっていない。陸奥国分寺跡の寺域が東西800尺、南北800尺以上と考えられていることから、陸奥国分尼寺跡の寺域はこれを超えることはなく、明治末年の古地図や航空写真の観察検討により東西600尺、南北800尺ほどと推定されている（本村：1986・1996）。
- 陸奥国分尼寺跡周辺地区においては、急速な都市化が進行しており発掘調査の実施が困難になりつつあり、今後計画的に発掘調査をすすめていくことが必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 木村浩二（1986）「陸奥国分尼寺跡—陸奥国分寺・国分尼寺跡周辺の地割と寺域推定について—」
『仙台平野の遺跡群V—昭和60年度発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第87集
- 木村浩二（1996）「陸奥国分寺・尼寺と周辺条里」『論集しのぶ考古—目黒吉明先生頌寿記念—』論集しのぶ考古刊行会
- 主浜光朗（1999）「陸奥国分尼寺跡（第8次調査）」「陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第238集



写真1 遺構検出状況（東より）



写真2 遺構検出状況（西より）



写真3 調査区完掘全景（東より）



写真4 調査区完掘全景（西より）



写真5 SI-1竪穴住居跡検出状況（東より）



写真6 SI-1竪穴住居跡床面検出状況（北より）



写真7 SI-1竪穴住居跡床面遺物出土状況（南より）



写真8 SI-1竪穴住居跡カマド全景



写真9 SI-1竪穴住居跡床面検出状況（西より）



写真10 竪穴住居跡完掘全景（西より）



写真11 SI-2住居跡・SX-2性格不明遺構（南より）



写真12 小溝状遺構群完掘全景（北より）

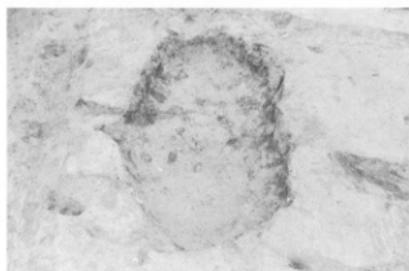


写真13 SK-1土坑完掘全景（東より）

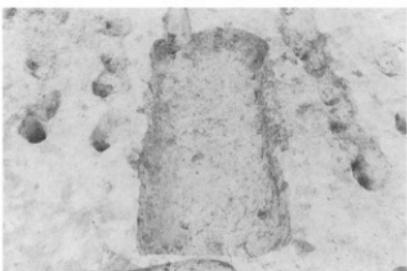


写真14 SK-2土坑完掘全景（北より）

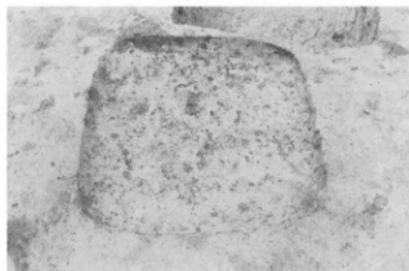


写真15 SK-3土坑完掘全景（北より）

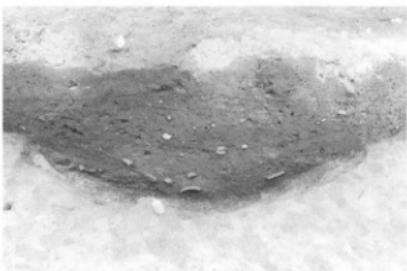


写真16 SK-4土坑完掘全景（南より）



写真17 S101ほか出土遺物（1）

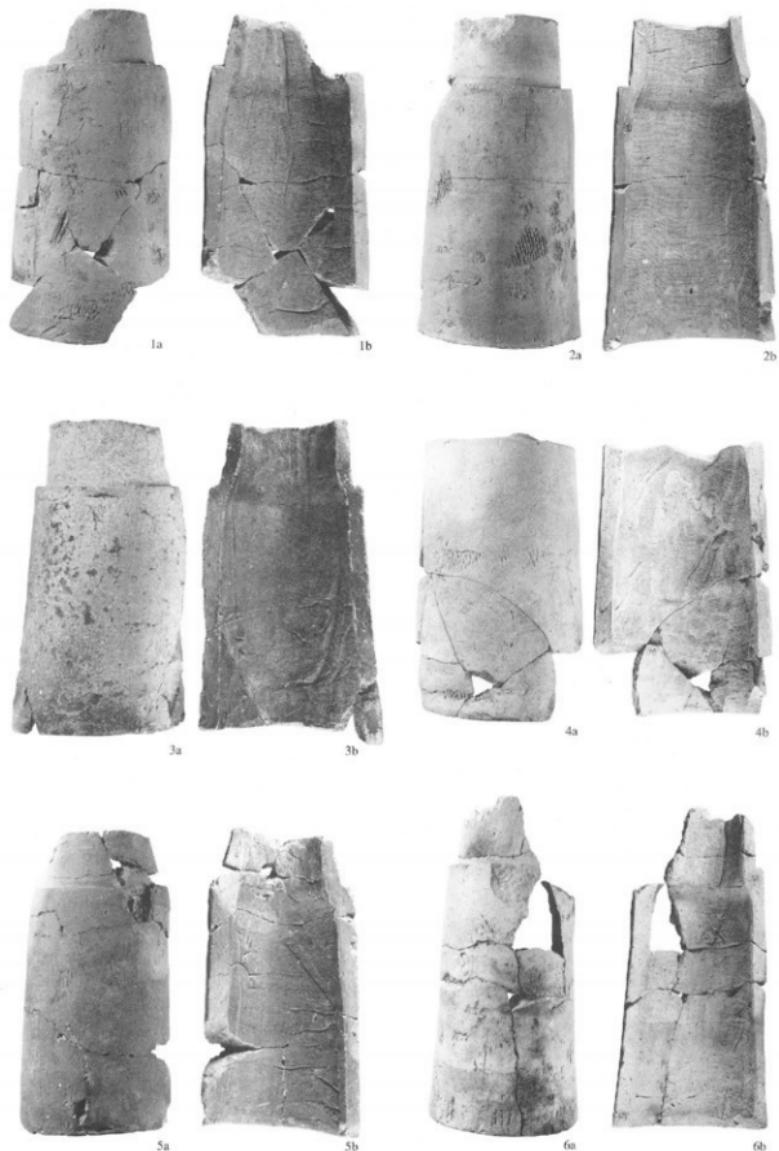


写真18 SI01ほか出土遺物（2）



写真19 SI01ほか出土遺物（3）

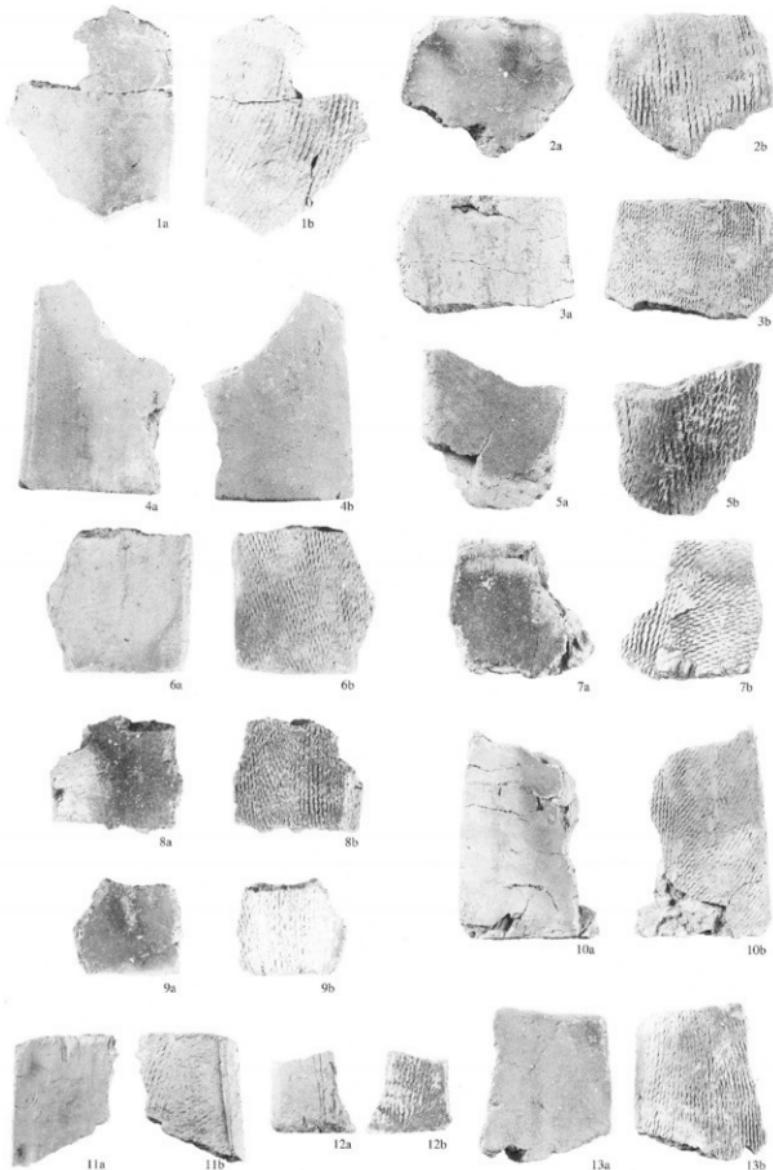


写真20 その他の出土遺物

第3編 山田条里遺跡（第4次・第5次調査）

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査要項

遺跡名 山田条里遺跡（宮城県遺跡登録番号01367、仙台市文化財登録番号C-294）

調査名 山田条里遺跡第4次調査

山田条里遺跡第5次調査

所在地 第4次 仙台市太白区山田字田中前60-1外

第5次 仙台市太白区鈎取字谷地田27外

調査原因 第4次 店舗建設工事

第5次 郵便局庁舎建設工事

対象面積 第4次 8,000m²（調査面積1,700m²）

第5次 11,500m²（調査面積1,200m²）

調査期間 第4次 平成11年4月15日、6月11日～9月2日（実働41日）

第5次 平成11年5月11日～6月11日（実働19日）

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

担当職員 平間亮輔、吉田和正

発掘調査参加者	阿部 敏子	阿部八重子	石井千代子	板橋 栄子	板橋 静江	植野美登子
	遠藤いな子	遠藤 福子	大槻 明美	小川 良子	小野紀美子	小野つや子
	金澤沙知子	狩野 吉則	神崎 是夢	菊地 恵子	菊地 富子	熊沢 とも
	小林 齊美	小松千代子	佐藤 清治	佐々木志津子	佐野たみえ	庄子かつえ
	島崎なつ子	菅井 清子	菅田みき子	菅原 弘	鈴鹿 久子	鈴木きぬ子
	鈴木みよ子	高橋たづよ	富永美輪子	早川 裕子	早坂みつえ	菱沼みのり
	日野きみ子	松野 順子	三浦たか子	三浦つよの	宮城 富子	森 ミヨノ
	吉田 公治					

整理作業参加者 及川のり子 小山つるよ

庄子 善昭 杉本奈緒子

関谷 栄子 吉田 桂

調査協力 第4次 山田土地利用共同組合

第5次 東北郵政局



写真1 調査開始直後の第4次調査2区

第2節 遺跡の概要

山田条里遺跡は仙台市の南東部にあり、JR長町駅の西方約4kmに位置している。

遺跡は東西・南北共約900mの広がりを持ち、かつてはその中の東西600m、南北800mの範囲にはほぼ真北方向を向く条里型土地割が認められていた。平成元～3年には農業基盤総合整備事業に先立って第1次発掘調査が実施され、その後に行われた同事業によって現在はその景観は失われてしまっている。平成10年には土地区画整理事業と市道建設に伴う第2次と第3次の発掘調査も行われた。

遺跡の歴史的環境に関しては第1次調査の報告に詳しいのでここでは割愛し、地形と表層の条里型土地割との関係についてのみ簡単に触れておきたい。

この付近には南方を流れる名取川の河岸段丘が広がり、段丘上には北西から南や南東方向に向かって名取川に注ぐ小河川が多くある。遺跡はこれら的小河川が河岸段丘上に形成した緩やかな扇状地に立地している。

条里型土地割は遺跡の東部を中心に広がっている。遺跡の西側では、東から延びてくる坪境の大畠畔は大部分のものが南流する小河川（第3図A）にぶつかって途切れたり、ここから西側では一部を除いて明確な条里型土地割を確認することができない。

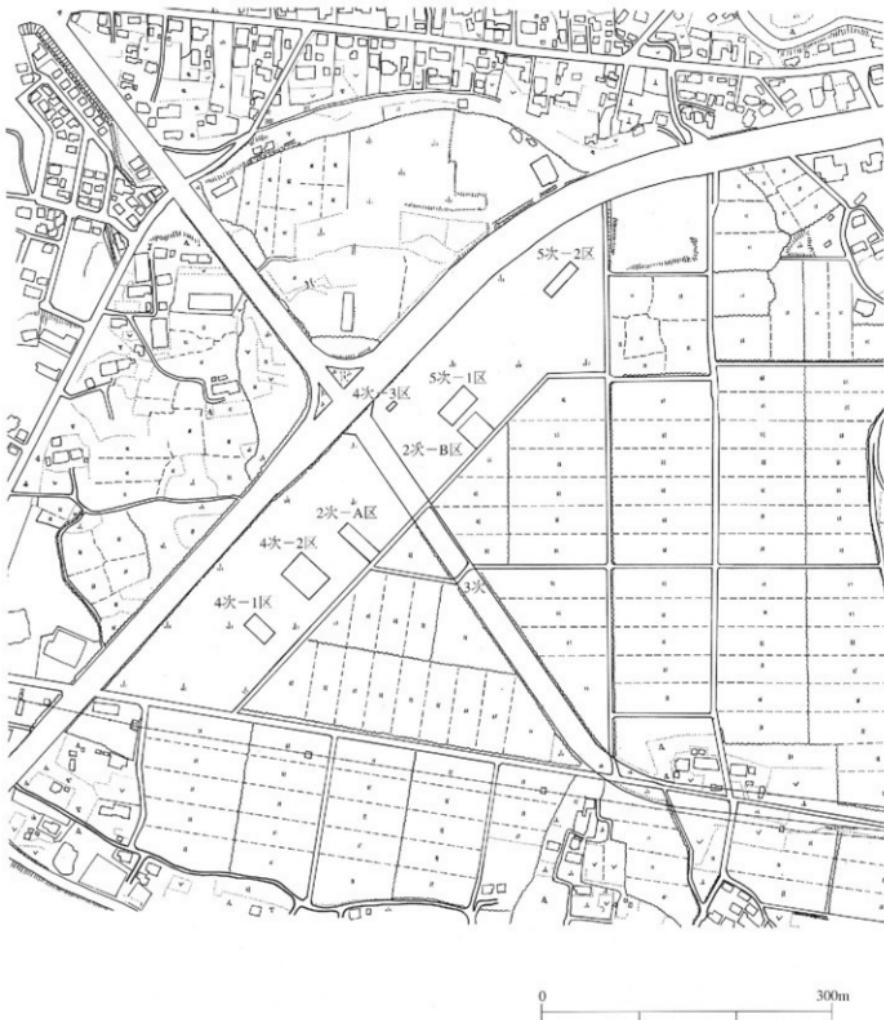
この付近の遺跡西部の微地形を見てみると、北から南に向かって等高線が張り出しており、周囲よりもやや小高



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	山田条里遺跡	段丘、名取川、名生	平安	11	当内遺跡	自然谷筋	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安
2	日向ノイケ遺跡	丘、名取川、名生、奈良、三室、追跡	中世、近世	12	山田遺跡	自然谷筋	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
3	北畠遺跡	丘、名取川、名生、平安、追跡	後晉	13	アノ内毛跡	自然谷筋	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
4	上野遺跡	丘、名取川、奈良、平安	後晉	14	云ノ内毛跡	自然谷筋	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
5	吉田家堤等	丘、名取川、奈良、平安	後晉	15	大井寺三澤跡	自然谷筋	六歳、中世
6	放牧跡	丘、排水、灌漑、台地、平安	後晉	16	アノノ山毛跡	自然谷筋	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
7	二種毛跡	丘、灌漑、平安	後晉	17	六野天王毛跡	自然谷筋	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
8	鉢呂原A遺跡	自然灌漑、台地、平安、平安	後晉	18	御山遺跡	自然谷筋	新石、古墳、奈良、平安
9	鉢呂原B遺跡	自然灌漑、台地、平安	後晉				
10	宮沢跡	自然灌漑、台地	後晉				

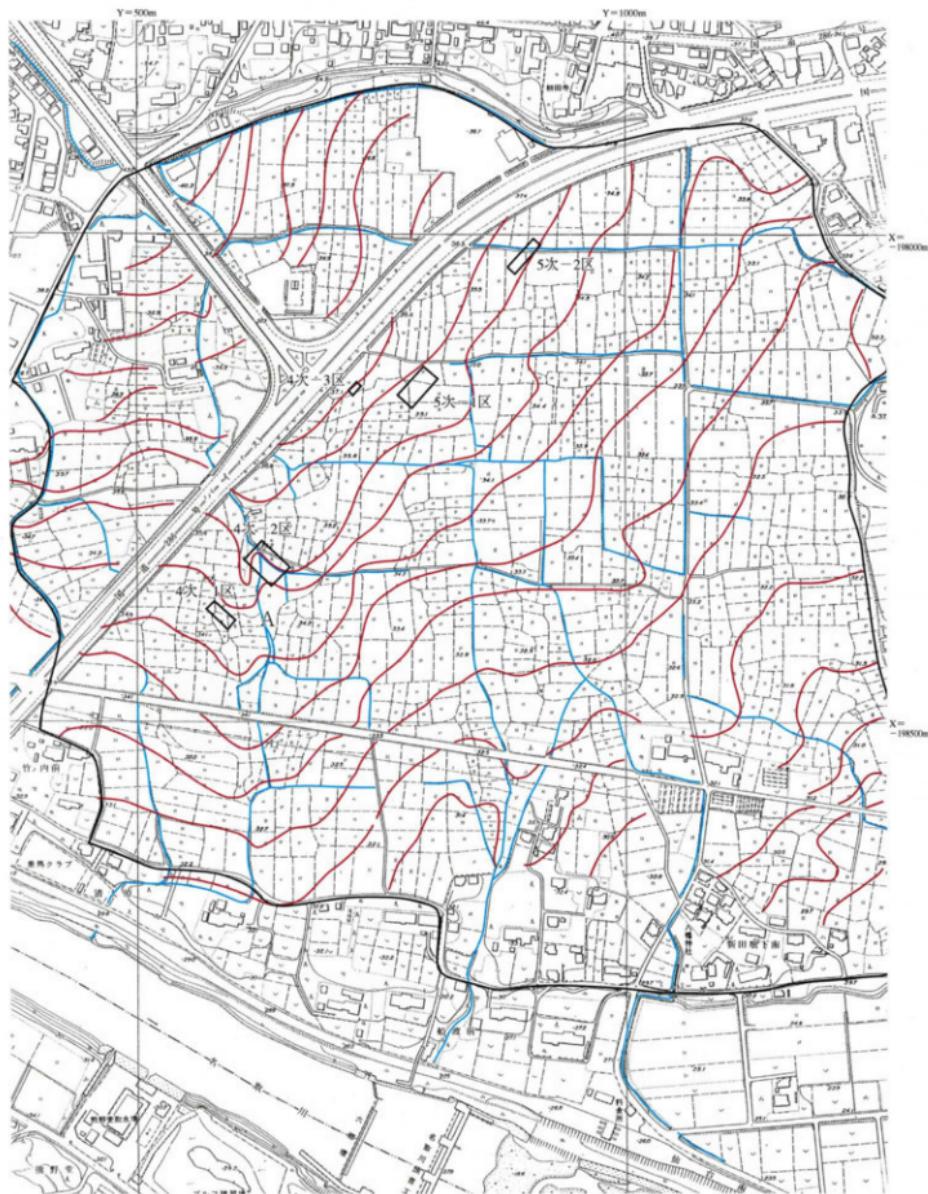
第1図 周辺の遺跡

くなっている。ちょうどこの部分に位置する第2次調査A区と後述する第4次調査1区・2区では、河岸段丘の基盤礫層上に厚く土砂が堆積している（註1）ことからも、この付近は扇状地の中でも特に土砂の供給が盛んな場所であり、遺跡が立地する緩やかな扇状地の上にさらに重ねて形成された小規模な扇状地のような地形であることが見てとれる。この付近には条里型土地割と方向を異にする小畦畔が連続し、歪んだ区画が集中しているが（第3図アミ点部分）、この区域がほぼこの小扇状地の範囲を示していると考えられる。なお、東側に広がる条里型土地割



第2図 遺跡全体図1（現況）

第3編 山田条里遺跡（第4次・第5次調査）



第3図 遺跡全体図2（基盤整備前）



写真2 山田条里遺跡航空写真（1961年）

はこの小扇状地と重複する場所で不明確になりながらも小扇状地を越えて西側にも延びていくが、このことは土砂の供給によって一時埋没した条里型水田が不完全ながらも復旧された状況を平面的に示しているものと考えられる（註2）。なお、遺跡の西端部では明確な条里型土地割は確認できないが、復旧されなかった水田が埋没している可能性はあり、それによって地割の範囲が更に西に広がる可能性も考えられる。

一方、遺跡南東部でも条里型土地割が途切れているが、その原因については明確ではない。段丘崖に近い場所であり、南や南東方向に向かう等高線の張り出しや浅い谷地形が認められるなど地形的に不安定な区域であるので、当初から区割りがされていなかった可能性もある。

註1 第1次調査の大部分と第3次調査、第5次調査区では地表面から50～100cm程度の浅いレベルで河岸段丘の基盤構造が確認されていることから、遺跡の東部は比較的土砂の供給が少ない、安定した状況であったと考えられる。これに対して遺跡西部は基本層が厚く、層も多くなっている。土砂の主な供給源は先述した小河川（第3図A）と推測される。

註2 第2章 第4次調査の項で述べるが、土砂の供給は一度きりではなく、洪水による砂礫層と水田土壤が何枚も重複して認められ、水田の上を覆った洪水砂の上に後に水田が復旧されたことを示している。

第3節 基本層序

第4次調査には1~3区、第5次調査には1区と2区がある。各調査区はそれぞれ50~170m離れており、また部分的にしか認められない層も存在するため各区の基本層序を対応させるのは困難であった。第8図に第1~3次調査までも含めた基本層序の対応関係を示したが、対応できたのは灰白色火山灰との新旧関係が明確な層のみであり、その他の大部分の層については細部についてまでの対応関係を明らかにすることはできなかった。

以下では各区ごとに分けて記述するが、本文中の記述における層名も各区ごとのものであり共通の層名ではない。なお断面図の他に第5・7図では第4次と第5次の基本層序の模式図も示している。

1. 第4次調査1区

I 層 2.5Y4/2黄褐色シルト。厚さは20~25cm前後で下面には緩やかな起伏がある。

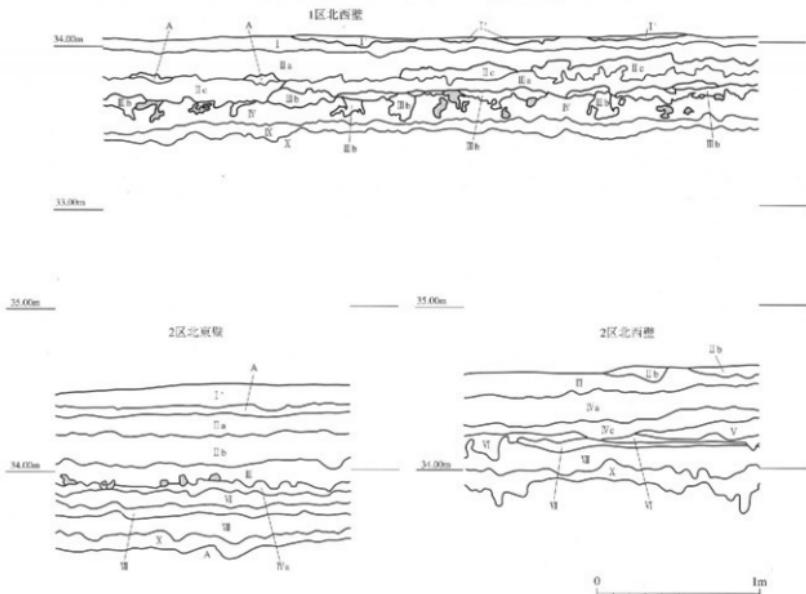
盛土以前の現代水田の耕作土である。

II a 層 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト。径5~30mmの凝灰岩片を多量に含む。厚さは10~30cmで、下面には緩やかな起伏がある。

4次調査2区のII a層に対応する耕作土であるが水田か畑かは限定できず、年代も不明である。

II b 層 本区のみに分布する。5Y4/2灰オリーブ色細砂。部分的に粗砂・礫を含む。厚さはSD2の近くでは約10cmあるが、SD2から離れるにしたがって薄くなる。

SD2を供給源とする部分的な自然堆積層であるが形成された年代は限定できない。



第4図 第4次調査 基本層序 位置は第10図・第17図に▼で示した

A 層 II b 層と II c 層の間にあり、調査区西部にのみ分布する。2.5Y2/1粘土。

II c 層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土。厚さは10~20cmで下面には緩やかな起伏がある。

4次調査2区の II b 層に対応する水田耕作土であるが年代は不明である。

III a 層 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土。厚さは5~15cm程度で下面は凹凸が激しく、直下の灰白色火山灰層とその下のIV層を巻き上げている。ただし下層の巻き上げは下層を完全に攪拌するまでには至らず、火山灰の粒子は層全体に分散して認められるもののそのブロックは層下部に多く、さらにIV層上に火山灰層が厚く遺存する地点も残っている。

4次調査2区の III 層に対応する。平安時代後半以降の水田耕作土であるが下限は限定できない。

III b 層 本区で断片的に確認したのみである。10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土。厚さは5~10cmで下面は凹凸が激しく、III a 層以上に灰白色火山灰を多量に巻き上げており、IV層にも深く食い込んでいる。

部分的な分布で咲畔も確認できなかったが、直下にある灰白色火山灰とIV層の状況から水田耕作土と推定される。

IV 層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土。厚さは10~20cmあって比較的厚く、層上面に灰白色火山灰を乗せる。まれに層中（上部）に火山灰の小ブロックを含む場合があるが、これは火山灰直上のIII b 層水田による部分的な深耕の影響であり、本来層中には火山灰は含まれないと考えられる。下面是凹凸があり、直下層を巻き上げている。

4次調査2区の IV a 層に対応し、平安時代前半の水田耕作土である。

V 層 2.5Y3/2黒褐色粘土。以下の層は自然堆積層である。

VI 層 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂。

VII 層 10YR2/2黒褐色粘土。

VIII 層 10YR3/3暗褐色粘土。

IX 層 10YR2/3黒褐色シルト質粘土。砂粒少量と径10~30mmの凝灰岩片を多量に含む。

X 層 5Y3/2オリーブ黒粗砂。部分的に径10~30mmの凝灰岩片を多量に含む。

2. 第4次調査2区

I 層 2.5Y4/2黄褐色シルト。厚さは20~25cm前後で下面には緩やかな起伏がある。東部では下面に酸化鉄の集積層が認められる。

盛土以前の現代水田耕作土である。

II a 層 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト。径5~30mmの凝灰岩片を多量に含む。厚さは10~30cmで、下面には緩やかな起伏がある。

4次調査1区の II a 層に対応する耕作土であるが、水田か畠かは限定できず年代も不明である。

II b 層 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト。厚さは10~20cmで下面には緩やかな起伏がある。SR1の東側では部分的に径5~30mmの凝灰岩片を多量に含むがこの凝灰岩片はSR1の西側では少くなり、IKでは認められなくなる。部分的に灰白色火山灰の小ブロックを含む。

4次調査1区の II c 層に対応する耕作土で、咲畔は確認できなかったが1区の状況から水田耕作土と推定される。年代は不明である。

III 層 2.5Y6/2灰黄色シルト。厚さは5~15cm程度で下面は凹凸が激しく、直下の灰白色火山灰層とその下のIV a 層を巻き上げている。火山灰の粒子は層全体に分散して認められるがそのブロックは層下部に多い。

4次調査1区 III a 層と対応する平安時代後半以降の水田耕作土である。

IV a 層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土。厚さは10~20cmあって比較的厚く、層上面に灰白色火山灰を乗せるか、層中（上

部)に火山灰の小ブロックを含む。火山灰は1区同様に本來層中には含まれないと考えられる。下面是凹凸があり、直下層を巻き上げている。厚さはやや薄く5~15cm程度で部分的に3cm前後の箇所もある。なお、SR1の東側では径5~10mmの凝灰岩片や凝灰岩粒を多量に含んでいるが、これはこの付近のⅣ層直下に分布する砂礫層(Ⅵ層)を巻き上げたためで、これらはSR1の西側では少なくなる。

4次調査1区のⅣ層と対応する平安時代前半の水田耕作土である。

(IV b ~ VII層)

これらの層は本区SR1の周辺にのみ分布し、層厚もSR1から離れるにしたがって薄くなることから、SR1を供給源とする小規模な氾濫土砂であると推定される。

IV b 層 SR1の西側にのみ分布する。北部(SR1の上流側)では2.5Y4/2暗灰黄色細砂だが南部では徐々に粘土に移行する。径5~10mmの凝灰岩片を多量に含む。厚さは約5cmである。

IV c 層 SR1の西側にのみ分布する。北部(SR1の上流側)では2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトだが南部では徐々に粘土に移行する。径5~10mmの凝灰岩片を少量含む。厚さ5~15cmである。

V 層 SR1の北西部にのみ分布する。10YR4/2灰褐色粘土と2.5YS/2シルトとのやや乱れた互層で部分的に10YR2/2黒褐色泥炭質粘土を挟んでいる。厚さは10cmである。

VI 層 SR1東側の北部(SR1の上流側)では2.5YS/3黄褐色砂礫層で、含まれる凝灰岩片は径10~50mm程度の大きいものであるが、南部やSR1西側では10YR4/4褐色粗砂層となり、凝灰岩片は径5~20mm程度のものが部分的に少量含まれる程度となる。厚さは5~10cmで直下のⅦ層と共にⅨ層水田跡を覆っているが、Ⅸ層の分布が断片的なため直接Ⅸ層水田跡に被る箇所もある。分布は2区南端には達していない。

VII 層 10YR5/3にぶい黄褐色細砂と10YR4/2灰黃褐色粘土上の互層で、SR1北西部ではこれに10YR2/2泥炭質粘土層も加わる。厚さはSR1近くでは約15cmあるが、平均は約10cm、Ⅸ層水田跡上に直接乗っているが分布は断片的で2区南端には達していない。

VIII 層 本区でのみ確認した。2.5Y3/2黒褐色粘土で、部分的に10YR3/2黒褐色粘土ブロックや2.5Y4/2暗灰黄色粗砂または細砂ブロックなどを少量含んでいる。厚さは10~25cmで、下面是凹凸が激しい。
平安時代前半の水田耕作土である。

IX 層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土。部分的に砂粒を微量に含む。以下は自然堆積層である。

X 層 10YR3/2黒褐色粘土。

XI 層 10YR4/2灰黃褐色粘土。

XII 層 北部では2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂で径5~20mmの礫を多量に含むが、南部では色調が薄くなり(5Y4/1灰色)、礫は部分的に含まれるのみとなる。

XIII 層 10YR3/2 黒褐色粘土。

3. 第4次調査3区

I a 層 10YR4/2灰黃褐色シルト。盛土以前の現代水田耕作土である。

I b 層 2.5Y3/2オリーブ黒色粘土。厚さは10~25cmで下面是凹凸がある。水田耕作土と推定されるが、時期は限定できない。

II 層 10YR3/1 黑褐色シルト。厚さは5cm前後で下面是凹凸がある。部分的な分布を示すが水田耕作土と推定される。時期は限定できない。

III 層 10YR5/2灰黃褐色粘土。灰白色火山灰ブロックを少量含む。厚さは5cm前後で下面是凹凸がある。

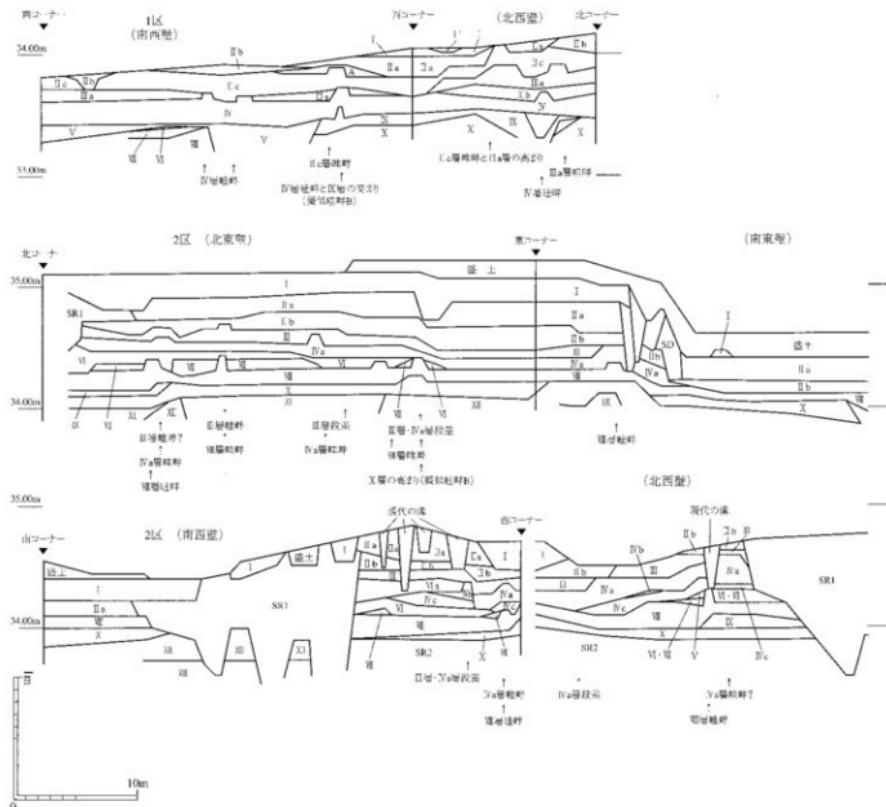
4次調査1区のⅢa層や2区のⅢ層に対応し、平安時代後半以降の水田耕作土である。

IV 層 10YR4/2灰黄褐色粘土。厚さは5~10cmで、灰白色火山灰ブロックを層上面に乗せるか、あるいは上部に少量含む。下面には緩やかな起伏があるが、底面の凹凸や下層の巻き上げがほとんど認められず、水田耕作土とは断定できない。

4次調査1区のIV層や2区のIVa層に対応する。1区と2区では水田耕作土であるが、本調査区では前述したように層相がやや異なり、耕作土としての特徴が顕著ではない。

V 層 10YR2/3黒褐色粘土。厚さは5~10cmで下面は緩やかである。以下は自然堆積層である。

VI 層 10YR4/3に近い黄褐色シルト。



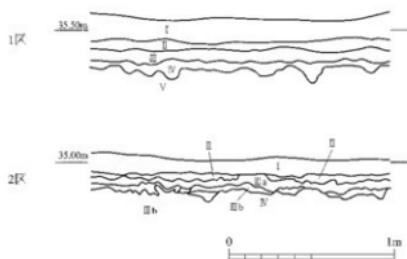
第5図 第4次調査 基本層序模式図

4. 第5次調査1区

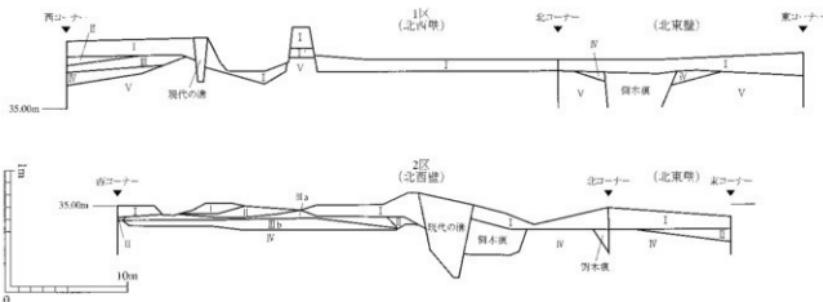
- I 層 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト。層下部に酸化鉄の集積層がある。盛土以前の現代水田耕作土である。
- II 層 本区の西部にのみ分布する。2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトで、細砂粒を少量含む。厚さは5cm前後で下面には緩やかな起伏がある。
- III 層 本区の西部にのみ分布する。10YR3/2黒褐色粘土。厚さは5cm前後で下面には緩やかな起伏がある。1～3次調査で確認されている縄文時代の遺物包含層に対応すると考えられる。
- IV 層 10YR3/1黒褐色粘土。10YR4/2灰黄褐色粘土質ブロックを少量含む。厚さは2～5cmで下面には緩やかな起伏がある。III層同様に、縄文時代の遺物包含層に対応すると考えられる。
- V 層 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト。層下部に部分的に礫を多く含む。

5. 第5次調査2区

- I 層 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト。盛土以前の現代水田耕作土である。
- II 層 10YR3/1黒褐色粘土。厚さは5cm前後だが部分的に20cm近くある箇所もある。下面には緩やかな起伏がある。



第6図 第5次調査 基本層序 位置は第33図・第34図に▼で示した



第7図 第5次調査 基本層序模式図

水田耕作土と推定されるが時期は不明である。

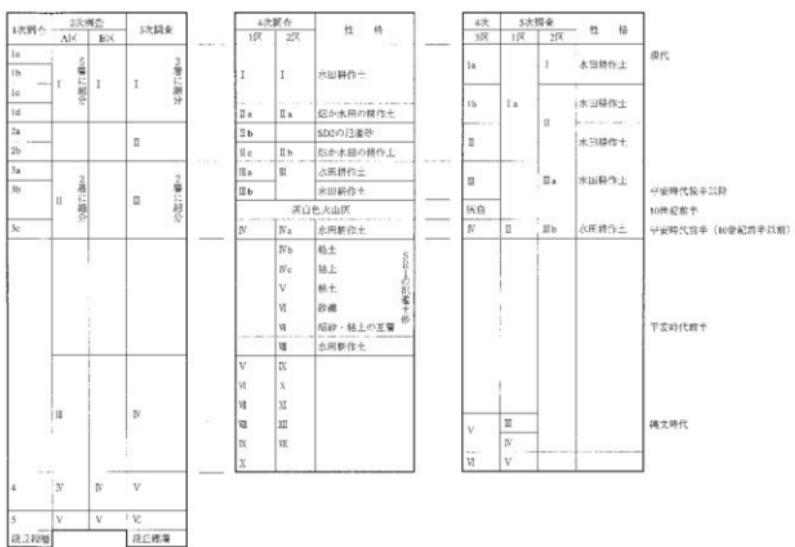
III a層 10YR4/1褐色粘土。厚さは5cm前後で下面は凹凸が激しい。

水田耕作土と推定されるが時期は不明である。

III b層 10YR3/1黒褐色粘土。厚さは5cm前後で下面は凹凸が激しく、直下のIV層を巻き上げている。

水田耕作土と推定されるが時期は不明である。

IV 層 2.5Y5/3黄褐色粘土。自然堆積層である。



第8図 第1次～第5次調査 基本層序対応図

第Ⅱ章 第4次調査

第1節 調査方法

調査区は店舗予定地に3ヶ所、建物の方向に合わせて設定した。西から1区、2区、3区とし、大きさは1区が約 $15 \times 30\text{m}$ (435m^2)、2区が約 $30 \times 40\text{m}$ ($1,195\text{m}^2$)、3区が $5 \times 12\text{m}$ (60m^2)である。調査は一部日程が重複するが2区、1区の順に行い、3区は小規模なため2区の調査中に併行して実施した。

各調査区とも周辺はすでに $1.5\sim 2\text{m}$ 程に盛土されているため、まず重機によって調査区よりも一回り大きく盛土を除去し、次いで盛土以前の現代水田耕作土下部まで重機によって除去している。調査にあたっては、調査区の周囲に土層観察用と排水用を兼ねた側溝を設け、断面観察によって水田耕作土の可能性の高い層やその他の遺構面を確認しながら掘り下げた。

精査は1区がII c・III a・III b・IV層上面とIV層下面までの計5面、2区はII b・III・IV a・Ⅴ層までの計4面で実施している。水田については当該層を一度に検出することはできないので、直上層下部で一旦掘り下げを中断して畦畔確認のための精査を行い、畦畔プランを確認した後に層上面まで掘り下げて精査を行っている。なお、1区のIV層下面の精査では面積を縮小している。3区では水田耕作土は確認できたものの遺構は確認できなかった。遺物もI・II層から少量出土したのみで図化できたものもないため本文中の記述は割愛する。

基準杭は調査区の方向に合わせた任意の方向で設置し、10mグリッドを組んだ。平面直角座標系Xにおける座標

値は1・2区については以下のとおりであるが、3区では遺構が確認できなかつたため測量は実施しなかつた。

1区

杭A : X = -198383.676m

Y = 583.280m

杭B : X = -198397.133m

Y = 598.075m

2区

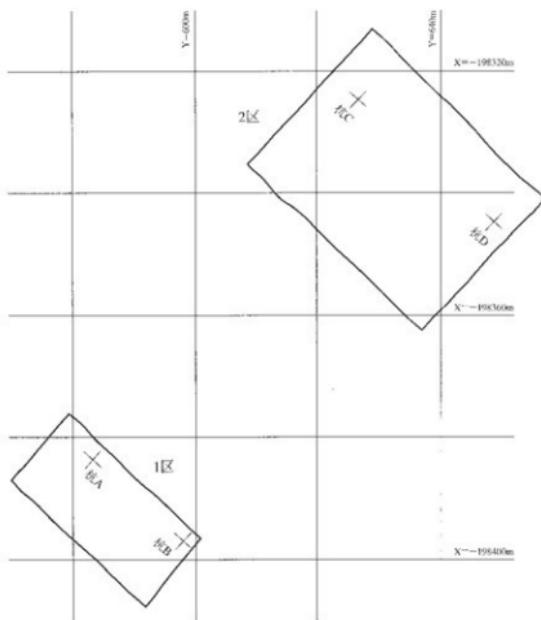
杭C : X = -198324.289m

Y = 626.479m

杭D : X = -198344.474m

Y = 648.673m

遺構の平面図は基準杭を利用して簡易造り方を組み、1/40あるいは1/20で作成した。断面図は1/20で作成した。写真は35mmモノクロとカラーリバーサルで撮影している。遺物は各遺構あるいは層ごとに取り上げている。



第9図 第4次調査 調査区設定図

第2節 1区の調査

1. II c層水田跡

II c層上面ではII c層水田跡を検出した。畦畔と溝跡を各1条ずつ確認したが、溝跡については水田跡に伴うものかどうか断定はできない。なお、区画など水田の構造については不明な部分が多い。

(1) 耕作土

耕作土は基本層II c層で暗灰黄色の粘土である。厚さは10~20cmで比較的厚く安定した分布を示している。下面は緩やかな起伏がある程度で下層への食い込みはそれほど深くはない。

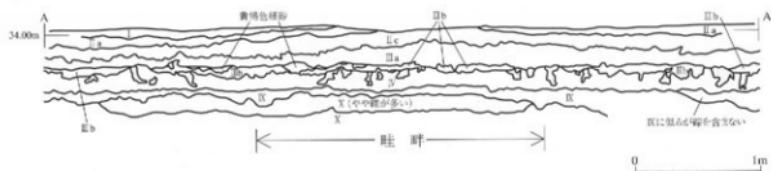
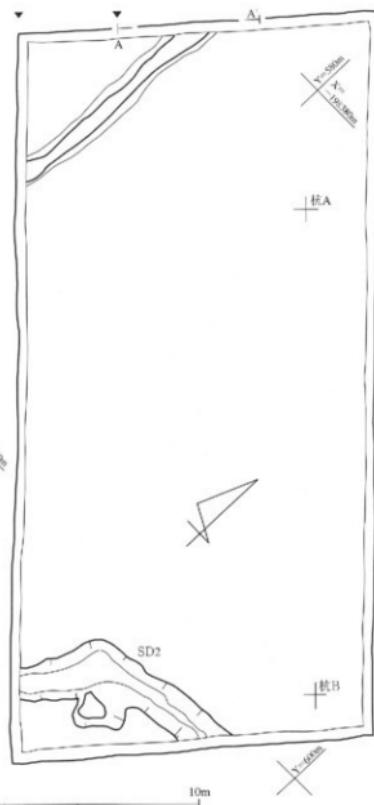
(2) 畦畔

畦畔はII a層を削り込んでいく過程で確認した。耕作土を盛り上げて作られており、遺存状況は比較的良好であったが、調査区北西部で南北方向のものを1条確認できたのみである。上端幅40~70cm、下端幅90~130cm、高さ3~9cm、方向はN-3°-Eである。なお、調査区北西壁面では畦畔下に直下のIII a層の高まりが認められたが（第10図上段の模式図、第10図）、平面では確認できなかった。

(3) 溝跡—SD2（第10図）

調査区南部に位置し、蛇行している。溝跡からあふれた灰オリーブ色の細砂（基本層II b層）が調査区南部を中心にII c層を覆っていたが、溝のプランはこのII b層を除去した後のII c層上面で確認している。

幅1.5~1.8m、深さ12~25cmで、堆積土の状況から水路と考えられる。土手が確認できなかつたためII c層水田跡に伴うものとは断定できず、水田跡よりも新しい可能性もある。なお、土手については前述したように重機でI層を除去する際に削り込んでしまった可能性があるが、調査区壁面でもその有無は確認できなかつた。



第10図 II C層水田跡 平面・断面図 ▼は第4図の断面図の位置

(3) 水田域

II c層に対応する層は4次調査2区にまで広がっているが、1~3次・5次調査区については対応関係は不明確であり、このため水田域も不明である。

(4) 出土遺物

耕作土中からはロクロ土師器片29点が出土したが、当水田跡に伴うかどうかは不明である。同化できたものもない。

2. III a層水田跡

III a層上面ではIII a層水田跡を検出した。ほぼ真北方向とそれに直交する東西方向の小畦畔や段差によって構成されている。

(1) 耕作土

耕作土は基本層III a層で、暗灰黄色のシルト質粘土である。厚さは5~15cmで下面は凹凸が激しく、直下のIII b・灰白色火山灰・IV a層を巻き上げている。灰白色火山灰ブロックは層下部に多い。

(2) 畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、II c層を削り込んでいく過程でNo1~4 (No2は段差)まで確認した。直上のII c層水田の耕作による搅拌を受けており、遺存状況はあまり良くない。

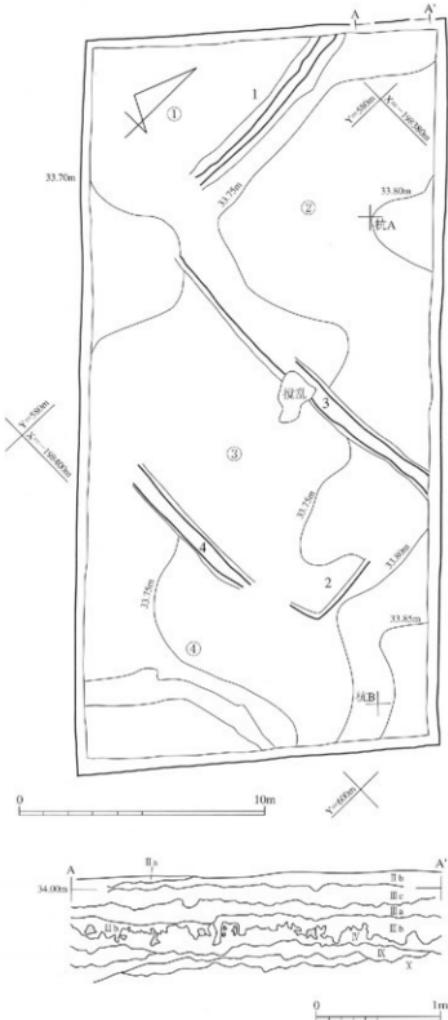
規模は、南北方向のNo1がやや大きいが極端に異なるものは認められず、すべて小畦畔に相当すると考えられる。畦畔の位置は下層のIV層水田跡と大体同じかあるいは畦畔幅ほどずれる程度であり、ほぼIV層やIII b層水田跡を踏襲していると推定される。

(3) 水田区画

水田区画は4区画が確認された。区画③は短辺6.9mの東西に長い長方形であるが、他の区画は部分的な検出であるので全体の形状が判るものはない。

(4) 水田面の標高と傾斜

調査区は第1章の遺跡の概要で述べた「扇状地の上に重ねて形成された小扇状地」の西部に位置するため、調査区全体の地形としては北東から南西へ傾斜している。水田面の傾斜はこの表層地形と同じで北東から南西へ傾斜している。



第11図 III a層水田跡 平面・断面図

No.	N-S	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	N-S-W	(8.6)	25~50	90~140	2~6	吉野水田跡の地盤1をほぼ踏襲
2	N-E-W	(3.2)	—	—	2~4	反走、吉野水田跡の軸跡から延伸1本分程度にわたる位置
3	N-E-E	(14.4)	35~60	65~110	2~4	西手部は段差のみ、吉野水田跡の地盤6から延伸1本分程度にわたる
4	E-W	(9.6)	30~60	75~90	1~5	東端部は段差のみ、吉野水田跡の地盤8から延伸1本分程度にわたる

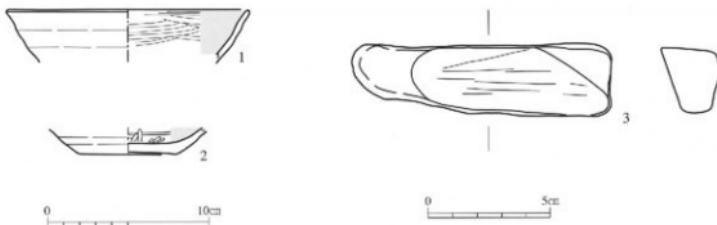
（ ）は測定値

表1 IIIa層水田跡 畦畔計測表

No.	高さ(cm)	比高差(cm)	斜傾方向	東端(m)	西端(m)	南北(m)	東西(m)	測定面積(cm)	備考
①	33.70~33.73	(3)	北東→北西	(9.5)	?	?	?	(35.6)	?
②	33.74~33.80	(6)	北東→東西	?	(10.2)	(15.6)	?	(10.3)	?
③	33.69~33.78	(9)	東→西	6.6	?	(9.5)	(14.0)	(94.7)	6.9×?
④	33.71~33.88	(17)	北東→西面	?	?	?	?	(105.8)	?

（ ）は測定値

表2 IIIa層水田跡 水田区画計測表



No.	号	実測	出土遺物	場所	種別	器種	保存度	法 面積(cm)	外表面 内面色調	粒土	块状	外表面 内面色調
1	73-1	IIIa層水田跡	上鉢器	3c.	1/3	?	?	(15.2)	にぶい黄褐色	良好	良好	ロクロ高調
2	73-2	IIIa層水田跡	土師器	坏	瓶部 1/3	?	(6.2)	?	灰白色	良好	良好	ハラミガル・環状修理
3	73-3	IIIa層水田跡	瓦器片	砾石	瓦片	?	?	?	墨色	?	?	ハラミガル・黑色斑點

第12図 IIIa層水田跡 出土遺物

水田面の標高は33.69~33.88mである。調査区全体を通しての勾配は測定できないが、区画②や③付近の部分的な勾配は5~8cm/10mである。なお、区画内の傾斜も全体的な傾斜と一致する。区画内の比高差は、全体を検出できた区画がないため不明である。

(5) 水田域

灰白色火山灰を層中に含む耕作土層は、分布が途切れる箇所があるものの遺跡のはば全域で認められており、ほぼ本調査区のIIIa層に対応する。層が認められない箇所については近世頃~現代と考えられる水田土壤によって攪拌・削平されたためと推定され、水田域はかつて遺跡全体に亘っていたと考えられる。

(6) 出土遺物

耕作土中からは土師器片28点と砾石1点が出土した。土師器のうち2点はロクロ使用の有無が確認できないが他の26点はすべてロクロ調整で、図化できたのは土師器坏2点(第12図1・2)と砾石1点(3)である。なお、当水田跡に伴う遺物を限定することはできなかった。

2. III b層水田跡

層上面において畦畔は確認できなかったが、下層にあるIV層水田跡の状況からIII b層水田跡の存在が予想された。記述の順序が一部逆になるが、ここでIV層水田跡の状況にも触れながらその理由について述べておく。

III b層はにぶい黄褐色シルト質粘土で5~10cmの厚さがあり、直下の灰白色火山灰層を巻き込みながら更にその下層のIV層に深く(10~20cm)食い込み、攪拌している。このためIV層水田跡はIII b層の攪拌の影響が著しく、耕作土中にはIII b層と灰白色火山灰の混じったブロックが多量に食い込んでいる(写真36)が、一方これらは畦畔の盛土中にはほとんど認められなかった(写真26・37など)。

このような状況から、IV層水田跡の畦畔を踏襲してⅢb層の畦畔が同じ位置に造られ、その結果としてⅢb層畦畔の直下のIV層上面が攪拌されずに残ったことが推測される。

3. IV層水田跡

IV層上面ではIV層水田跡を検出した。ほぼ真北方向とそれに直交する東西方向の小畦畔によって構成されている。

(1) 耕作土

耕作土は基本層IV層で、暗灰黄色の粘土である。厚さは10~20cmで下面は凹凸があり、直下のV層やIX層を巻き上げている。層上面に灰白色火山灰を乗せる。

(2) 畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、Ⅲa層あるいはⅢb層を削り込んでいく過程で確認した。Ⅲb層水田

の耕作による攪拌をほとんど受けず、遺存状況は比較的良好であった。No1~4は南北方向、5~8は東西方向である。なお、No5~7は連続する1本の畦畔であるが、南北方向の畦畔1と2に接続する箇所で屈曲しているので別なNoを付けている。

規模は、No6の幅が140cmとやや広いが他はすべて100cm前後、高さも5cm前後ではほぼ等しい。すべて小畦畔に相当すると考えられる。

(3) 水田区画

水田区画は7区画が確認された。全体の形状が判るものは図面⑤のみで6.7×12.7mの東西に長い長方形である。他の区画は部分的な検出なため詳細は不明であるが、②のように13.2×13m以上と⑤の2倍以上大きい区画もある。

(4) 水田面の標高と傾斜

水田面は、北から南、あるいは北からやや南西寄りに傾斜している。

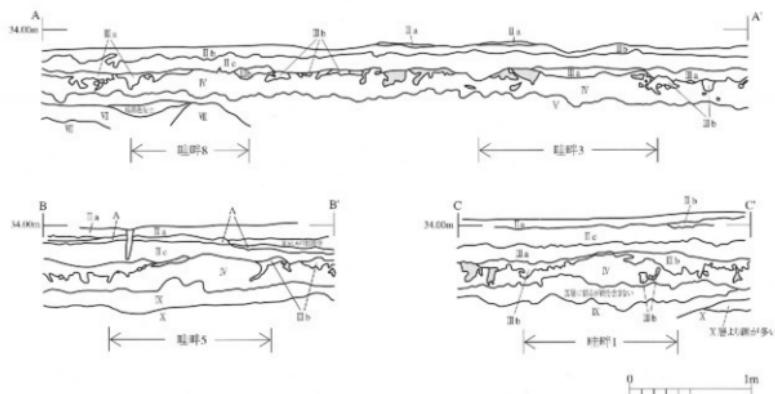
標高は33.56~33.73mである。調査区全体を通しての勾配は測定できないが、区画②と⑤の勾配は4~5cm/10mである。なお、区画内の傾斜も全体的な傾斜と一致する。区画内の比高差は、ほぼ全体を検出できた区画⑤で4cmである。

(5) 水田面の状況

Ⅲb層水田跡の項で述べたように、IV層水田耕作土にはⅢb層が灰白色火山灰を巻き込みながら深く食い込んでいる。このためIV層水田面として検出した面にはまだ多量のⅢb層と灰白色火山灰ブロックが残っている状況であった。



第13図 IV層水田跡 平面図1



第14図 IV層水田跡 断面図

No.	方 向	長さ(m)	上傾角(°)	下傾角(°)	高さ(cm)	備 考
1	N-S	(10.4)	10~50	50~95	4~6	
2	(N 10° W)	(2.2)	35	65~80	3~4	部分的な傾斜のため方向は不確定
3	N-S	(5.0)	40~55	80~110	5~7	
4	N-T-W	7.3	10~40	80~120	2~7	
5	(N 16° E)	(4.7)	30~40	105~120	1~6	畦畔1との接点で盛り、一気にV字の盛り上がり（鶴仙町B）を伴う
6	E-W	14.2	25~60	70~140	4~8	畦畔2との接点で盛り、一気にV字の盛り上がり（鶴仙町B）を伴う
7	?	(2.8)	30~40	85~100	1~5	部分的な傾斜のため方向は不明
8	N 85° W	(16.2)	20~60	70~100	1~5	

() は現存値

表3 IV層水田跡 畦畔計測表1

No.	標高(m)	丸高差(cm)	傾斜方向	東邊(m)	西邊(m)	南邊(m)	北邊(m)	面積(m ²)	面積面積(m)	備 考
①	33.66~33.69	(3)	ほぼ水平	(9.6)	?	(2.3)	?	(37.7)	?	
②	33.63~33.69	(6)	北 → 南	(2.6)	(11.0)	13.2	?	(116.7)	13.2×?	
③	33.66~33.68	(2)	?	?	(2.8)	(1.5)	?	(2.0)	?	部分的な傾斜
④	33.56~33.59	(3)	?	(4.1)	?	?	(3.7)	(9.8)	?	部分的な傾斜
⑤	33.61~33.65	4	北東→東南	6.6	(5.0)	(11.1)	11.6	(83.2)	6.7×12.7	
⑥	33.69~33.73	(4)	北東→東南	?	6.9	(4.8)	(1.0)	(30.5)	7.3×?	
⑦	33.57~33.64	(7)	北 → 東	?	?	?	(15.4)	(65.6)	?	

() は現存値

表4 IV層水田跡 水田区画計測表



写真3

IV層水田跡 検出状況
(南東から)

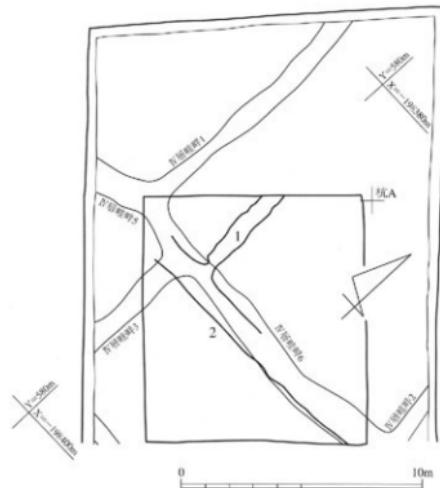
(6) 水田域

灰白色火山灰を層上面に乗せるIV層は比較的識別が容易であり、これに対応する層は分布が途切れる箇所があるものの遺跡のほぼ全域で認められている。層が認められない箇所についてはIIIa層の場合と同様に近世頃～現代と考えられる水田土壌によって攪拌・削平されたためと推定され、水田域はかつて遺跡全体に亘がっていたと考えられる。

(7) 耕作土下面の状況

平面図の作成後畦畔および耕作土を除去したが、耕作土下面の精査については調査期間の制約のため調査区北部の一部の範囲（9×10m）のみに留まった。この付近はIV層の直下に砂粒や凝灰岩粒を多量に含む黒褐色のシルト質粘土（自然堆積層—IV層）が分布しているが、IV層耕作土上下部においてこのIV層の帶状の高まり（擬似畦畔B）を2条確認した（第15図）。擬似畦畔BのうちNo1はIV層水田跡の畦畔No1から東に約3mずれた位置にあり、No2はIV層水田跡畦畔No6のはば直下に位置しているが西部では畦畔幅の半分ほど南側にずれている。

このように畦畔とは異なる位置に擬似畦畔Bが存在することから、より古い畦畔が存在したことことが予想され、実際に検出されたIV層水田跡の畦畔は位置をずらして造り替えられていると推定される。



第15図 IV層水田跡 平面図

No.	方 向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	N=3°-W	(4.6)	—	35-80	—	擬似畦畔B、IV層水田跡の經理位置とは一致しない
2	N=89°-E	(11.5)	—	100	—	擬似畦畔B、実測は不明瞭、IV層水田跡の畦畔No6とは一致

表5 IV層水田跡 畦畔計測表2

() は測定値

(8) 出土遺物

耕作土中からはロクロ土師器片1点、石器1点、剥片1点が出土したのみで、水田跡に伴う遺物を確定することはできなかった。固化できたのは石鐵（第16図）のみである。

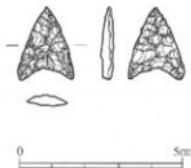


写真4 IV層水田跡 棚出作業

No.	写真枚数	出土遺物・場所	種 别	運行状	長さ	幅	厚さ	重 量	備 考
1	74	Ⅳ層水田跡	石鐵	ほじ穴形	22.0cm	17.0cm	3.5cm	1.0kg	石 鉄

第16図 IV層水田跡 出土遺物

第3節 2区の調査

1. II b層上面

II b層は暗灰黄色の粘土質シルトでI区のII c層に対応する。珪片は確認できなかったがI区のII c層は水田耕作土であるので2区でも同様と考えられる。なお、調査区南部はII a層によって削平されており遺存状況は悪い。

上面では溝跡5条と河川跡1条を確認したが、溝跡のうち4条は堆積土が基本層1層であるので明らかに現代のものと判断し、遺構としては取り扱わなかった。

層中からは土師器・須恵器・赤焼土器・土師質土器等の破片が26点出土したが本層に伴う遺物を限定することはできず、図化できたものもない。

(1) 1号河川跡—SR1 (第17・18回)

北から南に調査区を分断している。幅は上流側である北部が8~10mであるが、南部では西岸だけが急に広がるため15m程になっている。

調査に当たっては、初めに調査区の北端部と中央部の2ヵ所にトレーンチを設定して掘り下げ、深さと堆積状況を観察した。その結果、深さは100~120cmで堆積土は砂礫を中心とする河川であり、周囲の基本層とした層の中にもこの河川からあふれた堆積土があることが確認できた。また、下層にもSR1よりも古い河川(SR2)があることが判明したが、詳細は不明である。

トレーンチ調査の後、河川跡の調査方法を検討したが、その結果調査区にかかる河川全体を底面まで掘り下げるのは困難であると判断し、写真撮影のために確認面から約30cm掘り下げるに留めることとした。なお、調査区中央のトレーンチについては周囲の水田跡の調査終了後に東西両側に延長して下層の補足調査を実施している。

遺物は2本のトレーンチと上層の掘り下げの際に繩文土器7点、土師器91点（この内クロ土師器60点）、須恵器26点、赤焼土器13点、土師質土器6点、陶器11点、磁器5点、石器4点、銅鏡1点などが出土したがほとんどが細片であり、図化できたのは土師器1点、赤焼土器1点、須恵器4点、銅鏡1点、石器3点のみである（第19図）。河川の年代については土師器や須恵器が圧倒的に多いことから古代を中心とする時期と推定されるが、堆積土下層の礫層から銅鏡（聖宋元寶）が出土しているので12世紀頃まではまだ水量も多かったと予想される。なお上層から近世～近代の陶器の他に現代の磁器が出土していることと、重複して現代の水路（I層と共に重機で除去）が造られていたことから、完全に埋没したのは現代に近い時期と考えられる。

(2) 1号溝跡—SD1 (第17・18回)

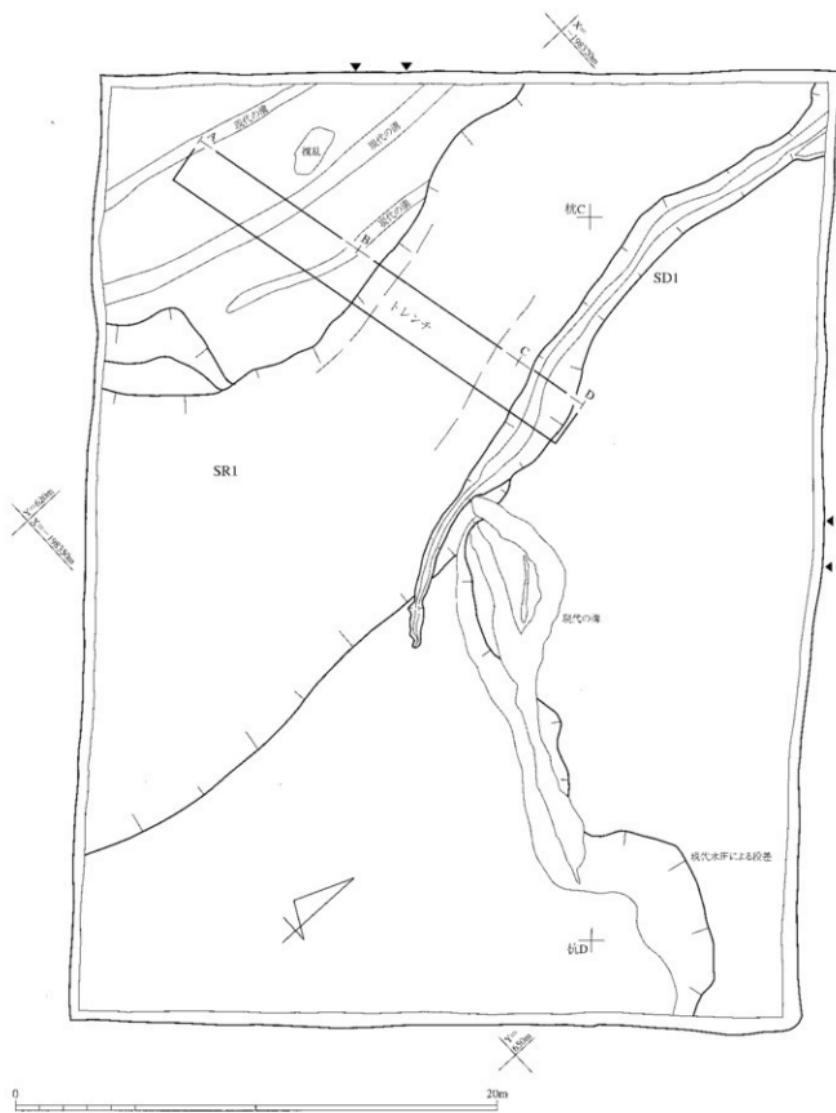
SR1の埋没後に掘られた溝で、東岸に接しながら南北に延びる。幅1~1.2m、深さは約40cm、堆積土は上層が礫混じりの砂質シルト、下層が礫混じりの粘土である。南部で徐々に幅が狭まりながら浅くなっている途切れているが、これはI層水田によって削平された可能性がある。遺物は土師器などの土器片が22点出土したが、遺構に係わる遺物を特定することはできなかった。溝の性格も不明である。



写真5 SR1 調査風景

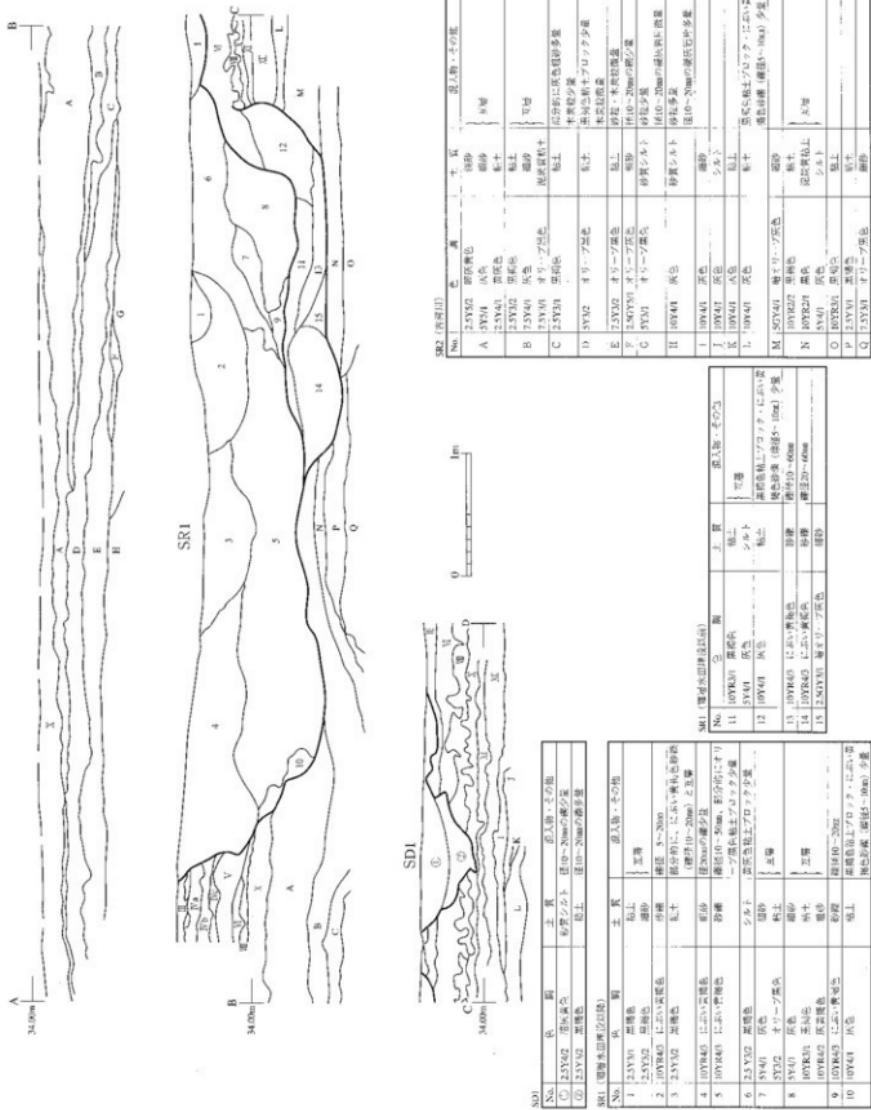


写真6 SD1 調査風景

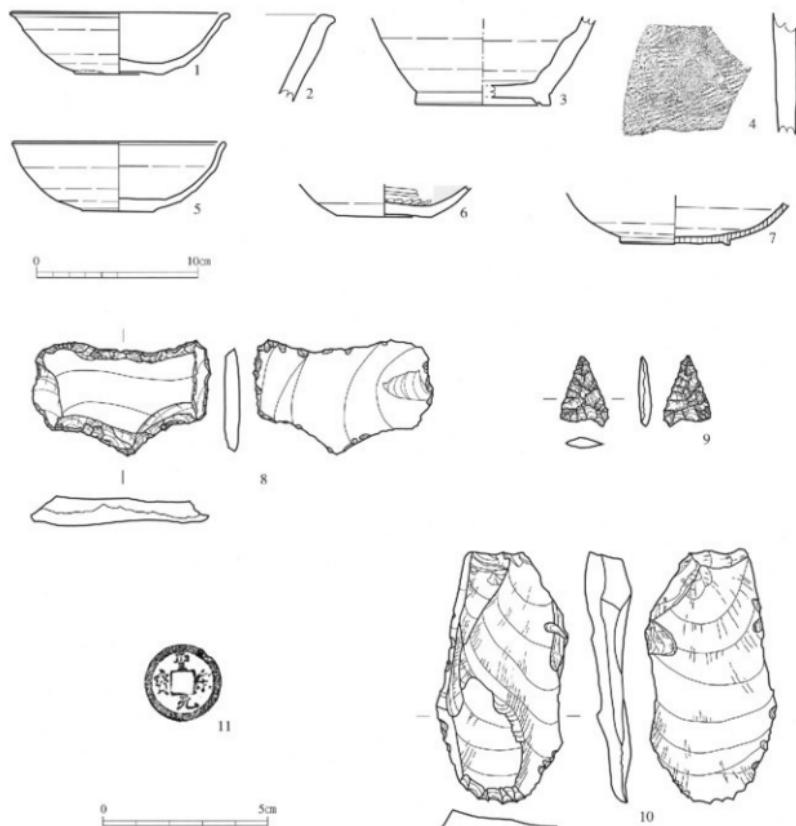


第17図 IIb層上面 平面図

▼は第4図の断面図の位置を示す



第18図 SD1・SR1・SR2断面図



No.	写真図版	出土遺物・部位	種別	器種	保存度	寸 量(cm)	外形容 内形容	胎土	焼成	外 内 片 陶 全 形	外 内 片 陶 全 形
1	75-1	SR1 下層	陶器	环	2/5	3.4 (13.6) 直径孔径 0.40	3.8 内平・橙色 白色吸水性	良好 白色 良好 白色	良好 白針吸水性 良好 白针吸水性	ロクロ調査 泥質 ロクロ調査	ロクロ調査 泥質 ロクロ調査
2	75-2	SR1	陶器	环	口縁部分	?	?	?	?	良好 白色	良好 白色
3	75-3	SR1	陶器	环	直相4/4	?	(8.4)	?	?	良好 灰白色 良好 灰白色	良好 ロクロ調査 泥質 ロクロ調査
4	75-4	SR1	陶器	环	体部小片	?	?	?	?	良好 白色 良好 白色	良好 泥質 良好 白色
5	75-5	SR1	非燃土器	环	3/5	13.2 直径孔径 0.33	4.4 灰黄色 灰黄色	4.3 白色 白色	?	良好 白针吸水性 良好 白色	良好 ロクロ調査 泥質 良好 ロクロ調査
6	75-6	SR1	土器器	环	直相のみ	?	5.8	?	?	良好 白色 良好 白色	良好 泥質 良好 白色
7	75-7	SR1	木製品	柄	1/2	?	6.8	?	?	—	— 内外面可歩通力

No.	写真図版	出土遺物・部位	種別	遺存度	長 さ	幅 さ	厚 さ	重 量	備 考
8	75-8	SR1	石器	完形	34.5cm	54.5cm	8.2cm	14.6g	漆質良石
9	75-10	SR1	石器	部分損 壊	21.5cm	14.0cm	3.4cm	0.8g	石器
10	75-11	SR1	洞穴	完形	77.0cm	37.0cm	14.0cm	30.6g	与高安口器
11	75-9	SR1 下層	銅鉄	完形	所22.5cm	—	—	3.5g	空心丸鉄 (昭和11年)

第19図 SR1出土遺物

第19図 SR1 出土遺物

2. III層水田跡

III層上面ではIII層水田跡を検出したが、調査区南部はIIa・IIb層によって削平されていてIII層は遺存しない。畦畔は南北方向のものを1条確認したのみであるが、畦畔位置を示すと考えられる灰白色火山灰の帶を東西・南北方向の2条確認した。

なお、SR1は水路として機能していたと考えられるが、土手などは確認できないため詳細は判らない。

(1) 耕作土

耕作土は基本層III層で、暗黄色のシルトである。厚さは5~15cmで下面は凹凸が激しく、直下の灰白色火山灰層とIVa層を巻き上げている。火山灰ブロックは層下部に多い。

(2) 畦畔

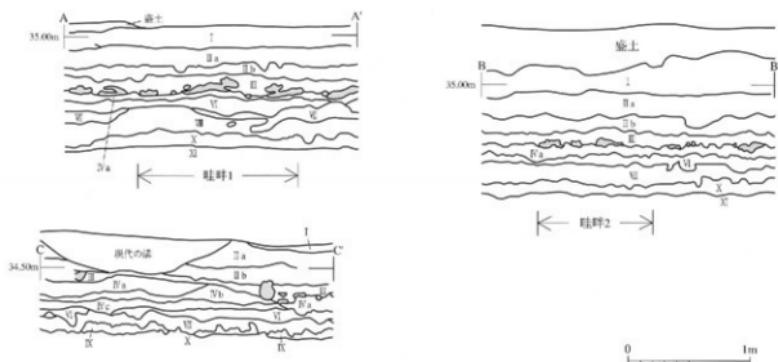
畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、調査区東部のIIb層を削り込んでいく過程で南北方向のNo2を確認した。なお、この畦畔からSR1東岸にかけては重機でI層を除去する際に誤ってIII層下部まで掘り下げてしまい、一部は灰白色火山灰層上面まで掘り下げてしまった所もある。このため畦畔は確認できなかったが、火山灰層まで掘り下げなかった部分では、幅40~65cmの火山灰の帶を2条確認した。この火山灰の帶はIII層水田の畦畔直下の部分が擬似畦畔Bのように残存したものと考えられる。

(3) 水田区画

水田区画は4区画あるがすべて部分的な検出であるので全体の形状が判るものはない。

(4) 水田面の標高と傾斜

調査区は、第1章の遺跡の概要で述べた「扇状地の上に重ねて形成された小扇状地」の中央から東部にかけて位置している。SR1はこの小扇状地を形成した小河川であるが、ちょうど調査区は南東から浅い谷が入り込んでSR1から南東への分流が位置する場所にもあたり、やや複雑な微地形となっている。調査区全体の傾斜方向は北東

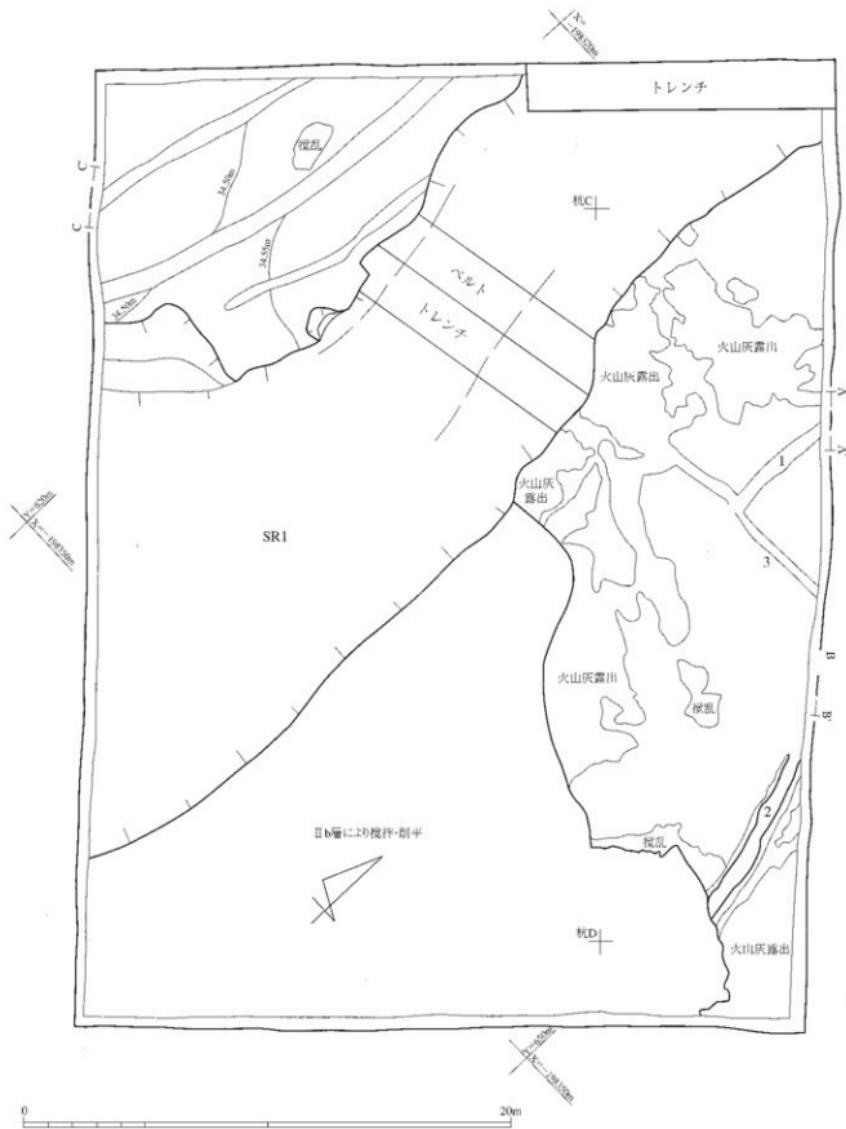


第20図 III層水田跡 断面図

No.	方 向	長さ(m)	上端高(m)	下端高(m)	高さ(m)	備 考
1	N-S	(4.7)	—	59~65	—	灰白色火山灰の帶、Ⅲ層水田跡の擬似畦畔Bと認定、調査区東部では残壁の盛り上がりも確認
2	N-18°-W	(7.2)	50~65	95~112	5	Ⅲ層水田跡の辺境よりやや北にすれば、調査区東部では段差のみを確認
3	N-87°-E	(9.0)	—	49~65	—	灰白色火山灰の帶、Ⅲ層水田跡の擬似畦畔Bと認定、Ⅲ層水田跡の縁壁5mはは西側、調査区東部では確認できず

() は現存値

表6 III層水田跡 畦畔計測表



第21図 Ⅲ層水田跡 平面図

から南西方向である。なお、前述したように、S R 1の東側についてはⅢ層上面よりも掘りすぎてしまったため層上面の標高や区画内の比高差等について不明である。

（5）水田域

前節で述べたように、灰白色火山灰を層中に含む耕作上層は遺跡のほぼ全域で認められており、水田域は遺跡全体に披がっていたと考えられる。

（6）出土遺物

耕作土中からは土師器片33点（この内19点がロクロ調整）、須恵器片10点、赤焼土器片2点、土師質土器片3点が出土したが、当水田跡に伴う遺物は特定できず、同化できたものもない。

3. IV a 層水田跡

IV a 層上面ではIV a 層水田跡を検出した。東西・南北方向の小畦畔によって構成されている。S R 1はこの時期も水路として機能していたと考えられるが、土手等は検出されていない。なお調査区南部はII a・II b 層によって削平されていてIV a 層は遺存しない。

（1）耕作土

耕作土は基本層IV a 層で、暗灰黄色の粘土である。厚さは10~20cmで下面は凹凸があり直下層を巻き上げているが、S R 1の東側では直下層が砂疊層であるためこの付近のIV 層中には砂疊を多く含んでいる。なお、層上面には灰白色火山灰を乗せる。

（2）畦畔

畦畔はⅢ層を削り込んでいく過程でNo1~5まで確認した。耕作土を盛り上げて作られており、Ⅲ層水田の耕作による攪拌をほとんど受けず遺存状況は比較的良好であった。これはⅢ層水田の畦畔がIV a 層水田の畦畔とは同じ場所に造られたためと考えられる。

No1・2は南北方向、3~5は東西方向で、真北基準からは5~16° 振れているが、検出した長さが短いため誤差が大きくなっている可能性もある。

規模は、幅が100cm前後、高さも10cm以下では同じである。すべて小畦畔に相当すると考えられる。なお、直下層は自然堆積層であるが擬似畦畔Bは確認できなかった。

（3）水田区画

水田区画は7区画が確認された。ただし、区画①と③は共に水田面の比高差が20cmを越えていて不自然な上、①の西部と③の南部には等高線の間隔が他と比べて極端に狭い箇所があるので、この部分に畦畔が存在した可能性が高く、したがって区画①と③はさらに分割される可能性がある。なお区画全体の形状が判るものはなく、わずかに区画⑤が南北長9.0mで東西に長い長方形と判明したのみである。他の区画は部分的な検出そのため詳細は不明である。

（4）水田面の標高と傾斜

水田面は、東から西、あるいは北東から南西方向に傾斜している。標高は34.28~34.58mで、S R 1の東側の方が東側よりも低い。調査区全体を通しての勾配は測定できないが、S R 1の東側の区画⑤や⑥の勾配は6~8cm/10mである。区画内の比高差は全体を検出できた区画がないので不明である。

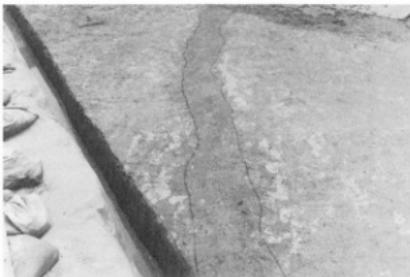
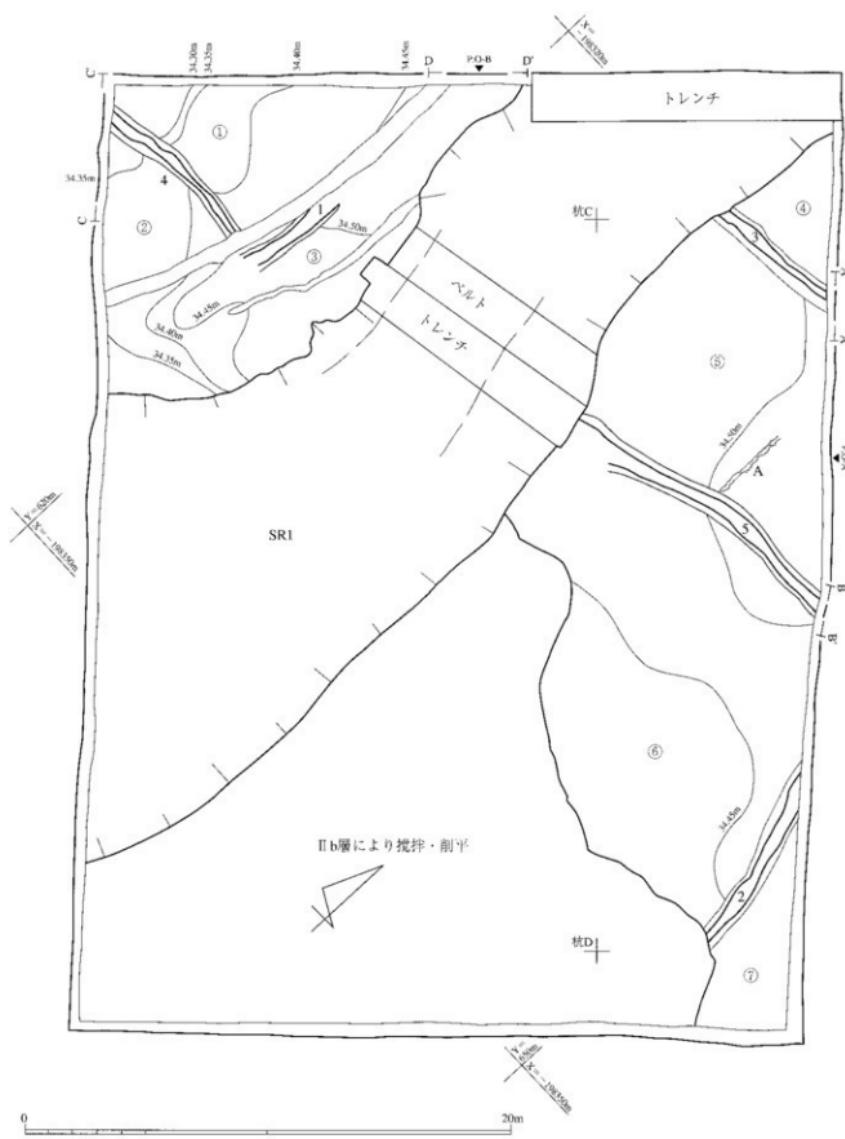


写真7 IV a 層水田跡 畦畔確認状況

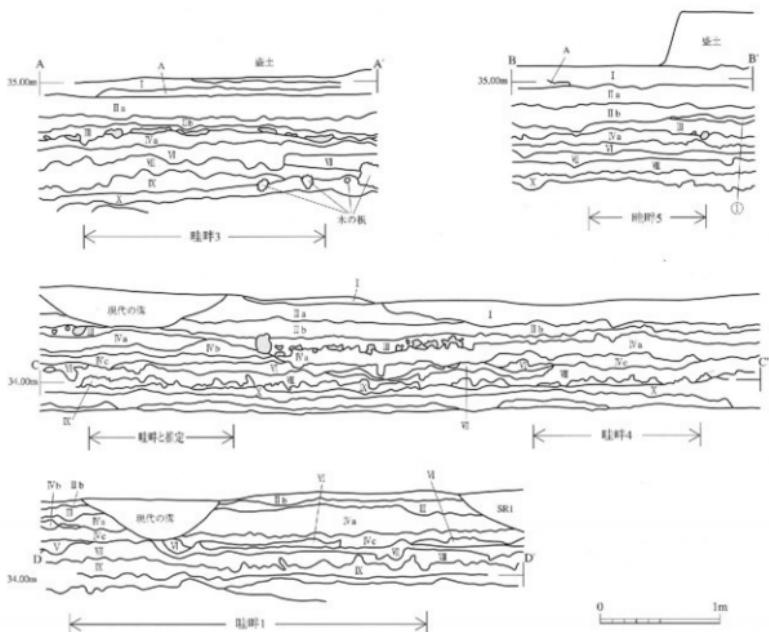


第22図 IVa層水田跡 平面図

▼はプラント・オパール分析用土壤サンプル採取地点

(5) 水田面の状況

I区のIV層水田跡の場合と同じく IVa層水田耕作土にはⅢ層水田耕作土が灰白色火山灰を巻き込みながら深く食い込んでいる。このため IVa層水田面として検出した面にはまだ少量のⅢ層ブロックと多量の火山灰のブロックがⅢ層水田の耕作痕跡として残っている状況であった。



第23図 IVa層水田跡 断面図

No.	方 向	高さ(m)	上踏幅(cm)	下踏幅(cm)	高さ(m)	備考
1	N-S'-E	(4.5)	40~60	75~100	2~4	部分的に露出
2	N'-W	(7.5)	35~60	80~110	3~7	やや屈曲、蓮瓣式田園の軸跡よりもやや北にずれる、関金区側面では段差の差を確認
3	N-S'-E	(5.3)	20~55	85~95	2~10	蓮瓣式水田跡の達河よりも軸跡1本分程北にずれる
4	N-S'-E	(6.9)	15~55	45~110	4~7	蓮瓣式水田跡の達河よりも軸跡1本分程北にずれる（一部南側か？）
5	N-S'-E	(12.4)	30~55	70~105	2~5	やや屈曲

（ ）は復存部

表7 IVa層水田跡 軸跡計測表

No.	標高(m)	北西端(cm)	傾斜方向	東端(cm)	西端(cm)	東端(cm)	北端(cm)	面積(m ²)	推定面積(m ²)	備考
①	34.28~34.54	(26)	東 → 西	(9.7)	?	(8.2)	?	(44.4)	?	分割される可能性が高い
②	34.34~34.42	(8)	東 → 西	?	?	?	(6.5)	(22.1)	?	部分的な起伏
③	34.32~34.54	(22)	?	?	(18.5)	?	?	(55.8)	?	分割される可能性高い
④	34.55~34.58	(8)	?	?	?	(8.1)	?	(12.6)	?	部分的な起伏
⑤	34.46~34.52	(6)	東 → 西	?	?	(12.2)	(6.1)	(87.6)	9.0×?	
⑥	34.42~34.52	(10)	東 → 南西	?	?	?	(12.6)	(135.0)	?	
⑦	34.37~34.39	(2)	1412水平	?	?	?	?	(17.3)	?	部分的な起伏

（ ）は復存部

表8 IVa層水田跡 水田区画計測表

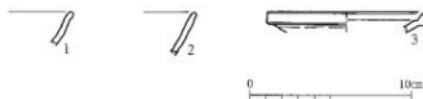
火山灰ブロックを中心とするⅢ層水田の耕作痕跡は1区では不定型で方向性なども認められなかったが、2区の区画⑤を中心とする区域では幅5~20cmの溝状となっていた（写真56）。平面プランは直線的ではなくかなり出入りがあり（写真57）、溝と溝の間隔は約10cmで方向は真北方向である。時間の制約からすべてを図化することはできなかつたが、1条のみ図化したのが第22図のAである。また、他の部分でこの溝状のプランを掘りあげてみたところ底面には平面プランの出入りと対応して細かな凹凸があり、小さな窪みが連続して結果的に溝状の形態となつたことが判明した（写真58）。なお部分的な精査しかできなかつたためか農具の痕跡等は認められなかつた。

（6）水田域

前節で述べたように、灰白色火山灰を層上面に乗せるIVa層に対応する水田跡は遺跡全体に拡がっていたと考えられる。

（7）出土遺物

耕作土中からは土師器片58点（この内クロ土器片45点）、須恵器片14点、赤燒土器片2点、剝片1点が出土した。図化できたのは須恵器3点（第24図）のみで、水田跡に伴う遺物を確定することはできなかつた。



No.	年 代 層	出土遺物・層位	強弱	形種	遺存度	法 面(cm)				外表面質 内面質	形状	焼成	外表面質 内面質
						口	横	奥	側				
1	76-1	IVa層水田跡	須恵器	环	二段部小片	?	?	?	?	オリーブ灰褐色	良好	良好	ロクハ灰褐色
2	76-2	IVa層水田跡	須恵器	环	二段部小片	?	?	?	?	灰褐色	良好	良好	ロクハ灰褐色
3	76-3	IVa層水田跡	須恵器	良頭 環	口沿部1/5 (9.8)	?	?	?	?	オリーブ灰褐色	良好	良好	ロクハ灰褐色

第24図 IVa層水田跡 出土遺物

4. VII層水田跡

VII層上面ではVII層水田跡を検出した。東西・南北方向の小畦畔によって構成されている。SR1はこの時期も水路として機能していたと考えられるが、後の時期に川幅が広がったため土手等は検出されていない。

なお調査区南部はⅡb層によってVII層上部が削平されているため畦畔などは確認できなかつたが、それ以外の箇所はSR1からの氾濫土砂（IVb~VII層）によって覆われていたため、遺存状況は良好であった。

（1）耕作土

耕作土は基本層植層で、黒褐色の粘土である。厚さは10~25cmで安定した分布を示し、下面是凹凸があつて直下層である暗灰褐色の粗砂・細砂を巻き上げている。

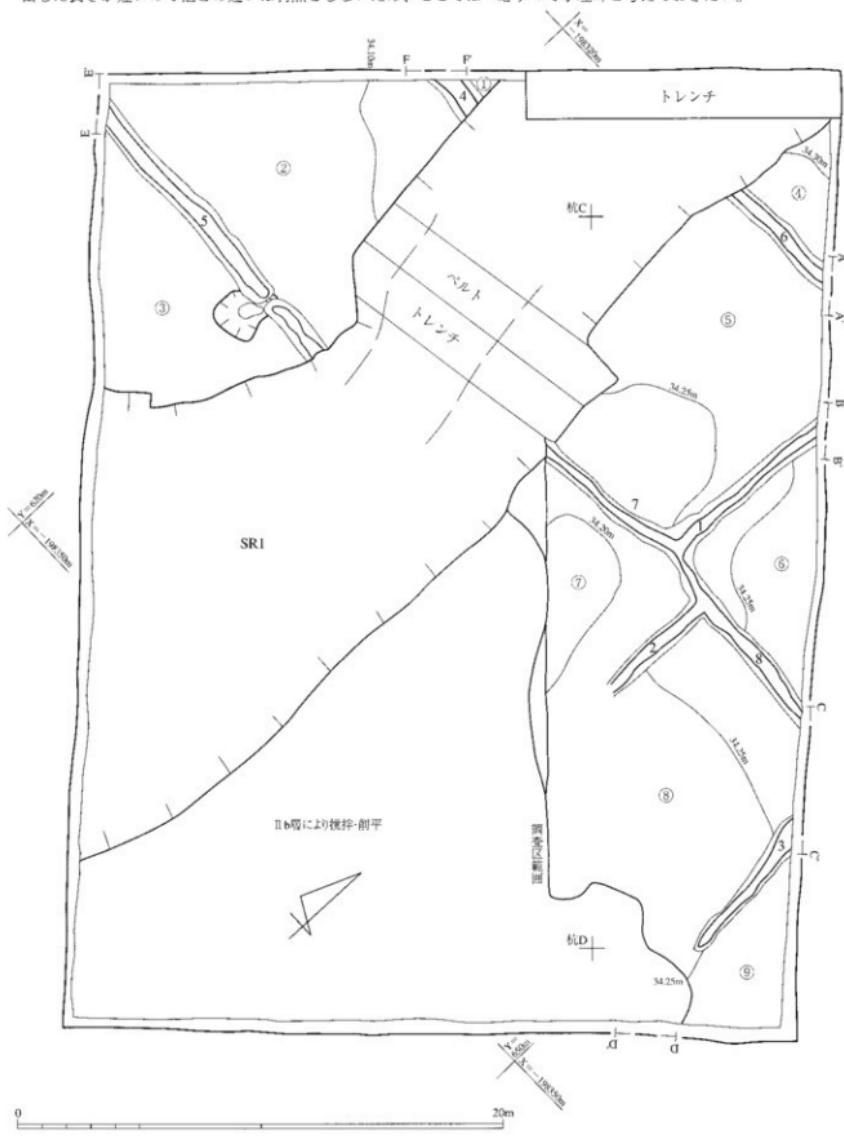
（2）畦畔

水田面を直接覆っていたのは主にVII層（細砂と粘土の互層）であったが、VII層は層厚が比較的薄いことと、SR1から離れるにしたがつて分布が途切れがちになることから畦畔の上までを覆うまでには至っていない。畦畔上を覆っていたのはVI層（砂礫層）であり、VI層が畦畔を越えて下流側へ堆積した状況が認められた。畦畔の確認作業はこの砂礫層を除去しながら行つた。

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、No1~8まで確認した。これらは前述したような自然堆積層で覆われていたため上層水田の耕作による攪拌を受けておらず、遺存状況は良好であった。

No1~3は南北方向、4~8は東西方向であるが、No7を除けば概ね真北かあるいは真北から東に最大7°程度振れた方向を基準としている。

規模はNo4が幅130cmあるが、他は大体100cm前後である。高さは最も高いNo11で13cmある。No4がやや大きいが検出した長さが短いので他の違いは判然としないため、ここでは一応すべて小畦畔と考えておきたい。



第25図 VII層水田跡 平面図

なお、調査区北東壁ではⅦ層直下にX層の高まり（擬似畦畔B）が認められたが（第5図中段の模式図・第26図断面図C-C'）、平面では確認できなかった。

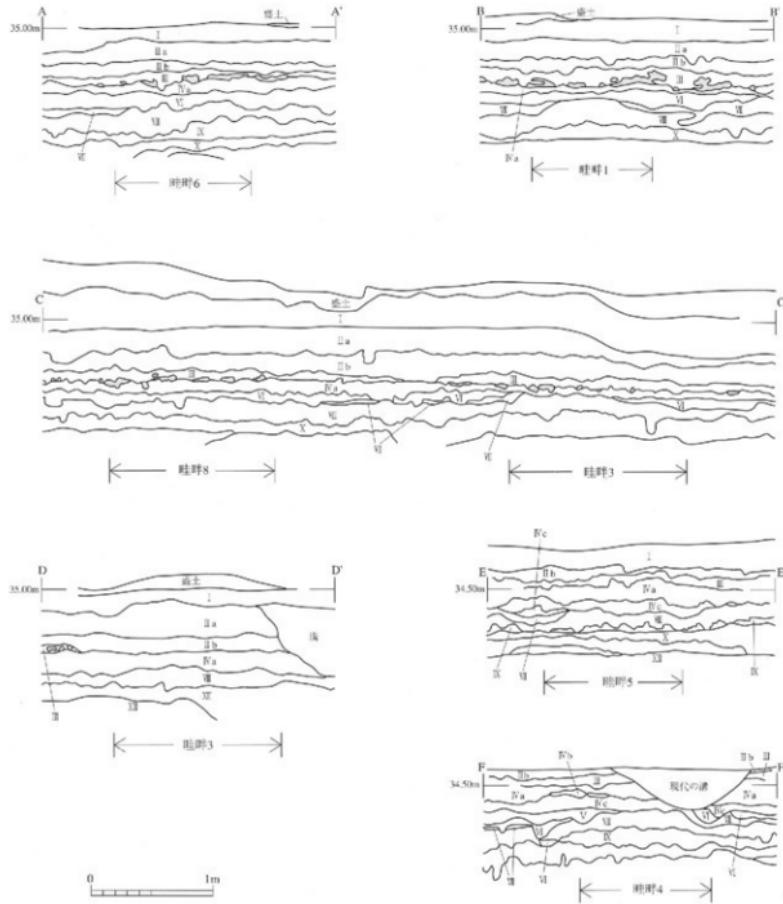
また、東西方向の畦畔No5には区画②と③を結ぶ幅約55cmの水口が設けられていた。下流の③側には径2~2.7mのやや歪んだ指円形で深さ約15cmの窪みが認められ、VI層の砂礫層が堆積していたことから、水流によって抉られた窪みであると推定される。

(3) 水田区画

水田区画は9区画が確認された。全体の形状が判るものはないが、区画②と⑤の南北長がそれぞれ10mと12m、⑥の東西長が9mであるので大体1辺10m前後の区画が多いのではないかと考えられる。

(4) 水田面の標高と傾斜

S R 1 の東側では北から南へ傾斜しているが、西側では検出面積が少ないのではっきりしない。標高は34.06~



第26図 Ⅶ層水田跡 断面図

No.	方 向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	解 考
1	N-3°-E	(7.5)	25~50	75~110	9~13	
2	N-1°-E	(5.4)	30~45	55~85	4~5	面積67m ² 確認
3	N-7°-E	(6.6)	30~70	55~100	2~6	
4	N-85°-W	(1.6)	70~75	125~130	8~9	部分的な復古のため方向は不確定
5	N-89°-W	(12.8)	25~55	105~110	3~10	面積55cmの水口あり
6	E-W	(4.9)	35~50	85~90	3~8	
7	N-80°-E	(6.7)	20~40	60~80	3~7	
8	N-87°-W	(8.3)	20~50	70~100	3~7	

() は複合体

表9 VII層水田跡 畦畔計測表

No.	緯度(m)	北緯度(cm)	傾斜方向	東端(cm)	西端(cm)	南北(cm)	面積(m ²)	面積(m ²)	解説
①	34.15	(6)	?	?	?	(6.6)	?	(0.4)	?
②	34.06~34.12	(6)	北東-西西	?	?	(13.6)	(2.3)	(0.8)	9.0×?
③	34.06~34.09	(3)	ほぼ水平	?	?	?	(12.5)	(48.8)	?
④	34.28~34.32	(4)	北→東	?	?	(4.3)	?	(0.8)	?
⑤	34.22~34.26	(4)	北→東	?	?	(5.7)	(5.4)	(0.21)	12.0×?
⑥	34.28~34.32	(4)	北東-西西	?	?	(7.0)	(7.4)	(28.0)	?
⑦	34.18~34.23	(5)	北→東	8.0	?	?	(8.0)	(34.7)	?
⑧	34.21~34.28	(7)	北→東	8.0	(9.1)	(7.4)	(6.0)	(0.9)	9.0×?
⑨	34.26~34.29	(3)	ほぼ水平	?	(6.6)	?	(17.7)	?	部分的な検出

() は複合体

表10 VII層水田跡 水田区画計測表

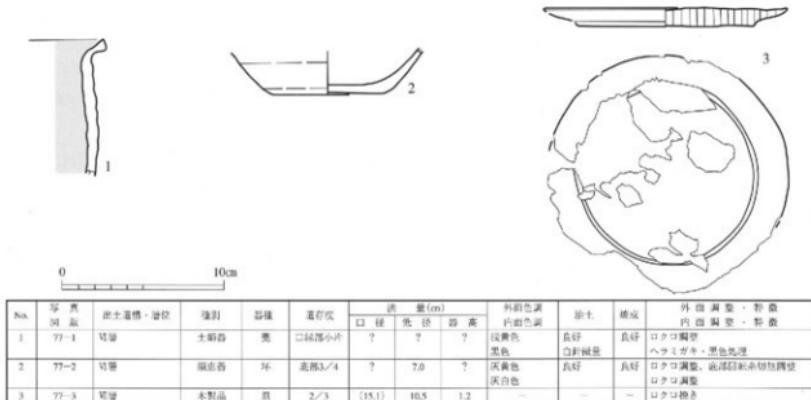
34.32mで、S R 1の西側の方が東側よりも低い。調査区全体を通しての勾配は測定できないが、S R 1の東側の区画⑤や⑧の勾配は3~7cm/10m、西側の②は6cm/10mである。区画内の比高差は全体を検出できた区画がないので不明であるが、傾斜の方向に広く検出できた区画⑤や⑧の状況からすると4~7cm前後と推定され、かなり水平に近いと考えられる。

(5) 水田域

上層のIV a層水田跡はVII層水田跡をほぼ踏襲する同じ構造の水田であることから、IV a層水田跡はVII層水田跡埋没後の極めて近接した時期に造られた復旧型の水田であると言える。VII層水田跡に対応する水田跡は他の調査区では確認されていないが、VII層水田跡がIV a層水田の古段階に相当するものであるならば、その水田域はIV a層対応の水田跡と同様に遺跡全体に括がっていた可能性も考えられる。

(6) 出土遺物

耕作土中からはロクロ土師器片1点が出土したのみで、図化もできなかったため水田跡に伴う遺物は不明である。なお水田跡を覆っていたVI・VII層からは土師器片61点（この内ロクロ土師器39点）、須恵器片26点、陶器片1点、繩文土器片1点・木製品1点が出土した。新旧のものが混在しているが、大多数を占める上師器・須恵器がVI・VII層の形成時期を示すと考えられる。図化できたのは土師器1点、須恵器1点、木製品（皿）1点（第27図）である。



第27図 VI・VII層出土遺物

第4節 プラント・オパール分析

仙台市、山田条里遺跡第4次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

山田条里遺跡第4次調査の発掘調査では、水田耕作層とみられる上層が複数認められた。そこで、プラント・オパール分析を行い、これらの層における稻作の可能性について検討を行った。

2. 試料

調査地点は、2区A地点と2区B地点の2地点である。

分析試料は、2区A地点では上位より黄褐色砂質シルト（II a層）、暗灰黄色粘土質シルト（II b層）、灰黄色砂質シルト（III層）、暗灰黄色粘土（IV a層）、暗灰黄色砂礫（V層）、オリーブ褐色細砂と灰黃褐色粘土の互層（VI層）、黒褐色シルト質粘土（VII層）、および黒褐色粘土（X層）の8点、2区B地点では上位より灰黃褐色粘土（IV a層）、灰黃褐色粘土質シルト（IV c層）、にぶい黄褐色粗砂（VI層）、黒褐色粘土と黒褐色泥炭質粘土の互層（VII層）、灰黃褐色粘土（V層）、暗灰黄色シルト質粘土（IX層）および灰黃褐色シルト（X層）の7点の計15点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土を絶乾（105°C・24時間）する。
- 2) 試料土約1gを秤量後、ガラスピース（直径約40 μm 、約0.02g）を添加する。
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法により有機物を処理する。
- 4) 超音波（300W・42KHz・10分間）により試料を分散する。
- 5) 沈底法により微粒子（20 μm 以下）を除去後乾燥する。
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散しプレラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10~5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネ（赤米）は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネササ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4. 分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、シバ属、タケア

検出密度 (単位: ×100個/g)			試料									試料									XII			XIII			XIV		
			II a			II b			III			IV a			V			VI			VII			VIII			IX		
イネ科 イネ ゴシ類 ススキ属型 シバ属型 タケ亜科 木ザサ属型 クマザサ属型 その他の 未分類 プラント・オパール混入	<i>Gramineae (Oryzae)</i> <i>Oryza sativa (domestic rice)</i> <i>Poaceae</i> <i>Miscanthus type</i> <i>Zoysia type</i> <i>Bambusoideae (Bamboo)</i> <i>Pleiobolusaceae (Nezara type)</i> <i>Sasa (except Miyakogou) type</i> <i>Others</i> <i>Unknown</i>	54 59 7 7 7 101 151 26 7 175 357	59 14 6 17 6 141 117 14 12 6 169 648	6 17 6 17 6 41 25 19 21 25 91 310	31 21 6 14 14 133 248 258 13 447 238	21 7 7 14 14 258 401	21 7 7 14 14 264 371	21 7 7 14 14 177 210	11 13 5 5 13 331 594	11 11 5 5 143 307 461	12 6 6 6 6 89 125 12 12 30 265 388 461	6 6 6 6 6 89 125 12 12 30 265 388 461																	

注：各公報の確定生産量 (単位: kg/m²・ha)

イネ科 イネ ゴシ類 ススキ属型 シバ属型 タケ亜科 木ザサ属型 クマザサ属型 その他の 未分類 プラント・オパール混入	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i> <i>Poaceae</i> <i>Miscanthus type</i> <i>Zoysia type</i> <i>Bambusoideae (Bamboo)</i> <i>Pleiobolusaceae (Nezara type)</i> <i>Sasa (except Miyakogou) type</i> <i>Others</i> <i>Unknown</i>	1.58 1.73 0.25 0.08 0.48 0.72 0.20 0.06	0.41 0.37 0.09 0.07 0.60 0.56 0.16 0.16	0.37 1.04 0.20 0.08 0.60 0.56 0.14 0.16	0.62 0.59 0.17 0.17 0.64 0.64 0.16 0.16	0.16 0.45 0.18 0.10 0.97 0.10 0.16 0.05	0.20 0.85 0.08 0.20 1.04 0.58 0.04 0.16	0.31 0.33 0.07 0.20 0.58 0.54 0.04 0.09	0.39 0.34 0.39 0.39 0.60 0.60 0.09 0.09	0.18 0.39 0.39 0.39 0.60 0.60 0.09 0.09
--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※試料の検出率を1.0と設定して算出。

表11 仙台市、山田条里遺跡のプラント・オパール分析結果

科(ネザサ節型、クマザサ属型、その他)の分類群のプラント・オパールが同定された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表11、第28、29図に示した。なお、主要な分類群については巻末に顯微鏡写真を示した。

5. 考察

(1) 山田条里遺跡第4次調査における稻作跡

本調査区では、II a層(2区A地点)、II b層(2区A地点)、IV a層(2区A地点)、IV c層(2区B地点)、VI層(2区A地点・2区B地点)、VII層(2区B地点)、VIII層(2区A地点・2区B地点)、IX層(2区B地点)およびX層(2区A地点・2区B地点)においてイネのプラント・オパールが検出された。このうち、II a層とII b層および2区A地点の稲層では、プラント・オパール密度が3,100～5,900個/gと稻作跡の判断基準値である3,000個/gを越えている。したがって、これらの層については稻作跡である可能性が高いと考えられる。

水田耕作層とみられてII a層および水田耕作層かもしれないとしていたIV層については、2区A地点のIV a層と2区B地点のIV層でイネのプラント・オパールが検出された。ただし、どちらもプラント・オパール密度は1,000個/g程度とやや低い値である。このことから、両層については稻作の行われていた可能性が考えられるものの、あるいは近傍からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。なお、III層も水田耕作層とみられていたが、ここからはイネのプラント・オパールは検出されていないことから、プラント・オパール分析からは稻作の痕跡は認められない。

これら以外では、VI層、VII層およびX層でイネのプラント・オパールが検出された。これらはいずれも自然堆積層であることから、ここで検出されたプラント・オパールは上層あるいは他所からの混入と思われる。

(2) プラント・オパール分析から推定される山田条里遺跡周辺の環境

II a層からX層にかけては、ほぼすべての試料から高い密度ではないがススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。このことから、これらの層の堆積時にはネザサ節やクマザサ属などのタケ亜科植物さらにススキ属などが調査区周辺に生育していたとみられる。なお、IV a層(2区B地点)、VI層、VII層、VIII層、IX層(2区B地点)およびX層(2区B地点)からはこれも高い密度ではないがヨシ属が検出されている。したがって、これらの堆積時は調査区付近に湿地あるいはそれに近い環境の地域が存在していたと推定される。

6.まとめ

山田条里遺跡第4次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作跡の探査を試みた。その結果、II a層と

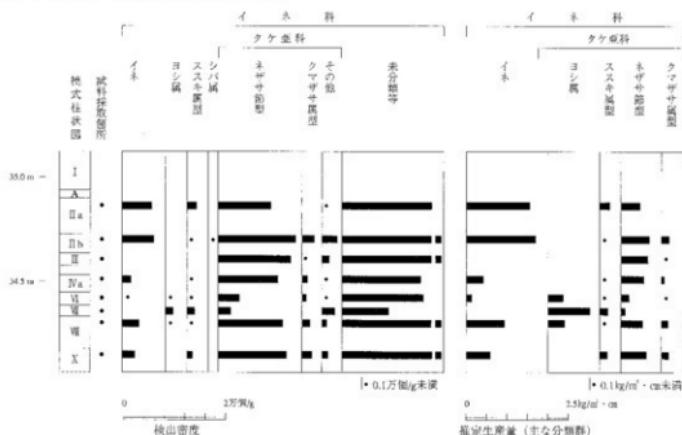
II b層さらにⅣ層において稲作の行われていた可能性が高いと推定された。また、IV a層とⅣ層については稲作跡である可能性は考えられたものの、低密度であることから他所からの混入の危険性も残された。

参考文献

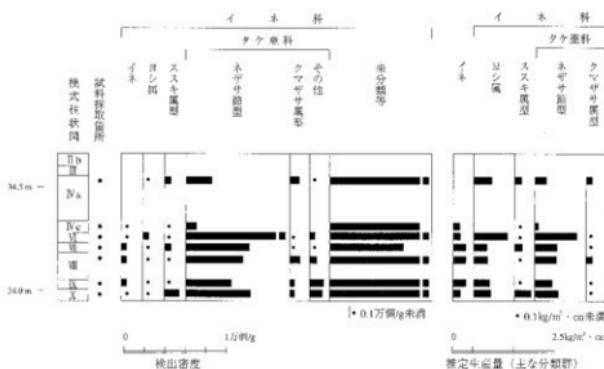
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（西白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa L.*) 生産量の推定—、考古学と自然科学, 12, P.29 -41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学, 17, P.73-85.



第28図 2区A地点のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示



第29図 2区B地点のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示

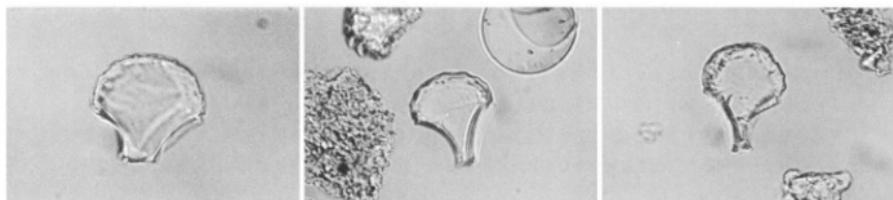


写真8 イネ
2区A地点 IIa層

写真9 イネ
2区A地点 IIb層

写真10 イネ
2区A地点 IVa層

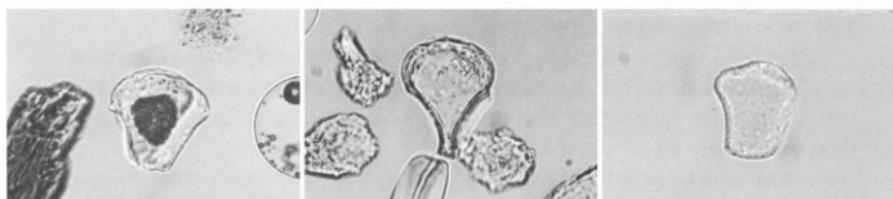


写真11 イネ
2区A地点 VII層

写真12 イネ
2区B地点 IX層

写真13 ウシクサ族（スキ属型）
2区B地点 X層

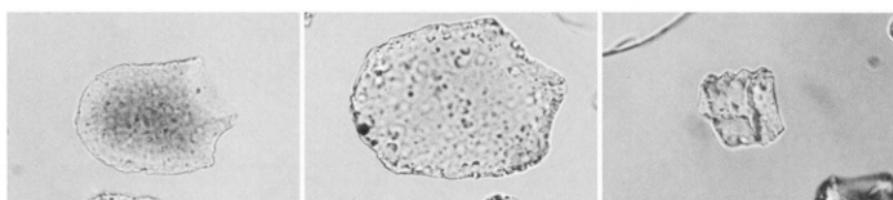


写真14 ヨシ属
2区A地点 VII層

写真15 ヨシ属
2区B地点 VI層

写真16 タケ亜科（ネザサ節型）
2区A地点 IIb層

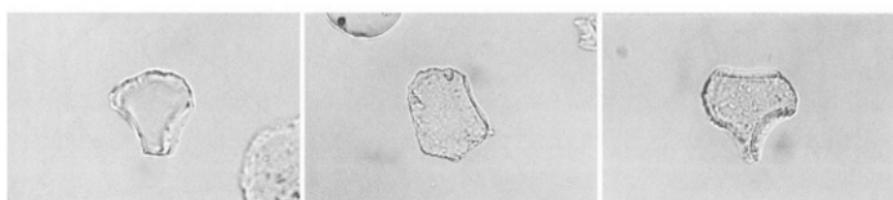


写真17 タケ亜科（ネザサ節型）
2区B地点 VI層

写真18 タケ亜科（クマザサ属型）
2区B地点 VII層

写真8 シバ属
2区A地点 IIa層

第5節　まとめ

1. 今回の調査区は遺跡中央からやや西寄りで、昨年実施された第2次調査A区の南西側の地点にあたる。この附近から北西部と西側にかけての区域はまだ調査が行われておらず、この区域における初めての調査となった。

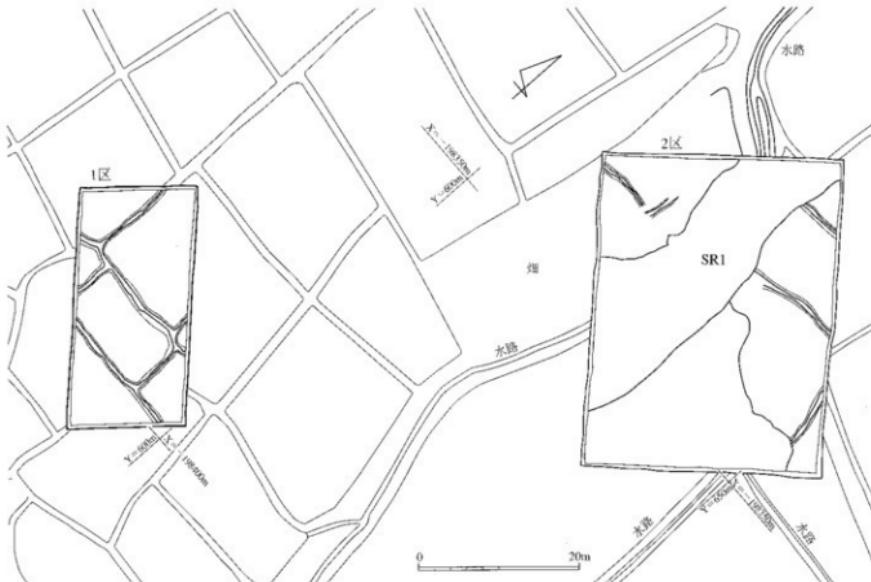
付近は周辺よりもやや小高くなっていたが、2区の調査では掘削河川とその河川が供給した大量の土砂が観察され、このあたりが遺跡の立地する緩やかな扇状地の上に重ねて形成された小規模な扇状地状の地形となっていることが確認された。

これまでの調査では近・現代の水田耕作土による擾拌や削平が著しく、遺構の遺存状況は極めて悪い場合が多くた。今回の2ヶ所の調査区で検出された水田跡は、直上の水出跡の耕作による擾拌をうけてはいるものの概ね良好な遺存状況を示していた。これはこの区域が土砂の供給が盛んだったため水田面がその土砂で埋没することが多くなり、結果的に遺構面が保護されて削平から免れたためと考えられる。

2. 1区と2区を合わせて5面の水田跡と比較的厚い灰白色火山灰の層を検出した。最上層の水田跡（1区IIc層、2区IIb層）は年代が確定できないが、灰白色火山灰の上の2面（1区IIIa・IIIb層、2区IV層）はほぼ平安時代後半以降、火山灰直下の1面（1区IV層、2区IVa層）とさらにその以下の砂礫に覆われた1面（2区V層）の水田跡は平安時代前半頃に位置づけられる。

今回の調査区は表層条里の畦畔方向が乱れる場所にあたっているが、検出された平安時代の畦畔はやや振れが多い傾向にあるものの、大体真北方向を基準としていた。

2区では南流する小河川跡（SR1）を検出している。これが完全に埋没したのは現代に近い時期と考えられ、最後は幅も広がっているので小河川として位置づけたが、このSR1はやや蛇行しながらも表層条里の坪境に位置し



第30図 1区IV層水田跡・2区IVa層水田跡と現代水田

て南流することと、平安時代にまで遡ると推定されることから、平安時代頃からある程度人為的に制御された基幹水路としての性格も持ち続けてきた可能性がある。

3. これまでの調査で検出された平安時代の水田跡は真北方向を基準とするものと真北方向から振れるものの両者があり、表層の条里型土地割との関連については不明な点が多かった。

今回の調査では、小畦畔は真北方向を基準とする傾向があることと平安時代の基幹水路として利用された可能性のある小河川を検出するなどの成果はあったものの、坪境の大畦畔は確認できなかったことから表層の条里型土地割と下層の平安時代の水田跡との関連について明確にすることはできなかった。

4. 2区でプラント・オパール分析を実施したが、イネのプラント・オパールはⅢ層水田跡についてはA地点で全く検出されず、Ⅳa層水田跡についてもA地点で1400個/gと低密度で、B地点では全く検出されなかつた。

これらの原因について断定はできないが、次のようなことが考えられる。

Ⅲ層については、畦畔や畦畔痕跡が検出されているが、直下のⅣa層上面に小溝状の耕作痕跡が多く検出されていることから、水田区画内を水田ではなく畠として利用した可能性がある。

Ⅳa層水田跡についてはB地点がちょうど畦畔にあたっていた（第23図畦畔1の部分に相当）ことを考慮に入れると、畦畔中にイネのプラント・オパールが入り込まない程に経営期間が極端に短かった可能性がある。Ⅳa層水田は確畠水田が砂礫に覆われた後これを復旧したものであるが、復旧された後はあまり使われなかったこととなる。



写真20 4次調査2区Ⅳa層水田跡 検出作業

遺物・部位	調文土器	土 耳 瓶		須恵器	赤陶土器	土師質土器	陶 瓶	磁 瓶	石 器	その他の
		調査不明	ロク口							
Ⅳa-Ⅳc層		16	25	1	12		3	1	1	
Ⅳc層			29							
Ⅳa-Ⅳb層		2	26							亂石
Ⅳb層			1						2	
Ⅳa層など		?	3		2					
計		25	84	1	14		3	1	3	1

表12 1区遺物集計表

遺物・部位	調文土器	土 耳 瓶		須恵器	赤陶土器	土師質土器	陶 瓶	磁 瓶	石 器	その他の
		調査不明	ロク口							
I層		19	32	12	4		8	6	2	壁
Ⅳa層		7	11	15	4				1	鉄鏃
Ⅳb層		5	17	1	1	2				
Ⅳc層		15	19	10	2	3				
Ⅳa層		13	45	11	2				1	
Ⅳb層		21	37	26						
Ⅳc層		1	1	2						
Ⅳd層			1							
SRI上層		7	31	60	23	13	6	11	5	瓦
SRI下層				3						網目（紫朱光背）
SDI		6	9	2	2	1				
SDII		9	21	3	1			1		
計		9	123	254	99	29	12	19	12	8
										4

表13 2区遺物集計表

遺物・部位	調文土器	土 耳 瓶		須恵器	赤陶土器	土師質土器	陶 瓶	磁 瓶	石 器	その他の
		調査不明	ロク口							
I層		2	4	6				2		
Ⅳ - B層		6						2		
計		8	4	6				4		

表14 3区遺物集計表



写真21
SD2
確認状況
(東から)



写真22
SD2
完掘状況
(南から)



写真23 IIIa層水田跡 確認状況 (南東から)



写真24 IIIa層水田跡 検出状況 (南東から)



写真25 IV層水田跡 確認作業 (南東から)



写真26 IV層水田跡 穴群の確認状況
白色のブロックは灰白色火山灰
上層水田の搅拌によりプランが乱れている



写真27
IV層水田跡 確認作業
(南東から)
黒い帯状の部分がIV層の畦畔
畦畔プランに目印のロープを
張っている



写真28

IV層水田跡 確認状況
(南西から)



写真29 IV層水田跡 北部の検出作業開始 (南西から)



写真30 IV層水田跡 北部の検出作業中 (南西から)



写真31 IV層水田跡 南部の検出作業開始 (南西から)



写真32 IV層水田跡 南部の検出作業中 (南西から)



写真33 IV層水田跡 検出作業中 (南東から)



写真34 IV層水田跡 検出作業ほぼ終了 (南東から)



写真35
IV層水田跡 検出状況
(南東から)

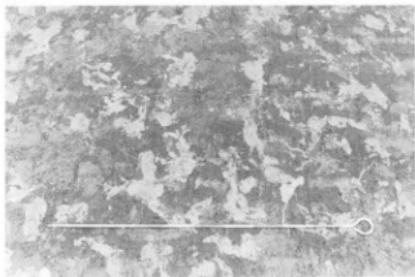


写真36 IV層水田跡 水田面の状況
IV層面にⅢa・Ⅲb層と火山灰が食い込んでいる



写真37 IV層水田跡 畦畔除去後の状況
畦畔中（下部）に火山灰は認められない
周囲はIV層上面



写真38
IV層水田下部
擬似畦畔Bの確認状況
(南西から)



写真39 基本層序1（北西壁）

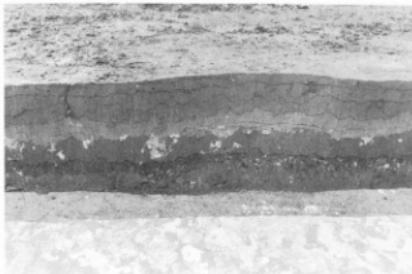


写真40 基本層序2（北西壁）

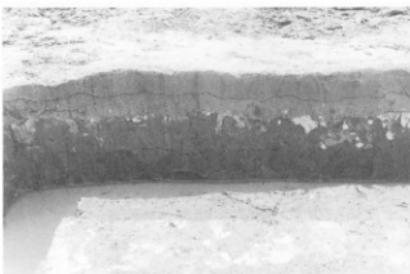


写真41 基本層序3（南西壁）



写真42 基本層序4（南西壁）

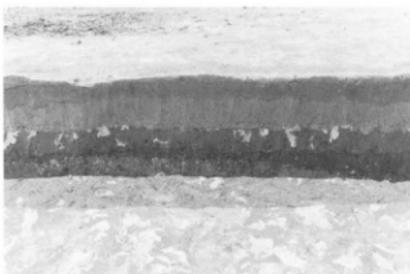


写真43 IIc層水田跡 畦畔断面（北西壁）

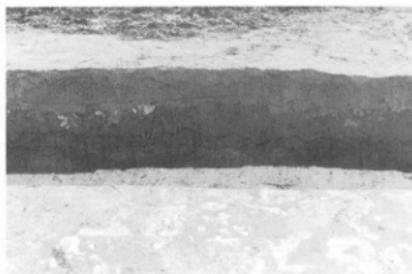


写真44 IV層水田跡 畦畔8断面（南西壁）

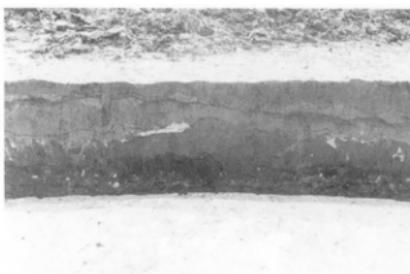


写真45 IIc層水田跡 畦畔断面（南西壁）



写真46 IV層水田跡 畦畔1断面（北西壁）

IV層水田跡 畦畔5断面

2区



写真47 SD1 完成後清掃作業（北から）



写真48 SR1 上層の掘り下げ作業（北から）



写真49 SR1 上層の掘り下げ完了（北西から）



写真50 III層下部 灰白色火山灰の帯確認状況（東から）

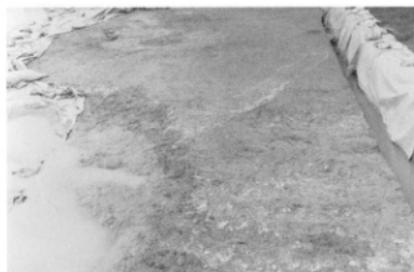


写真51 III層水田跡 畦畔2確認状況（南東から）



写真52 III層水田跡 畦畔2検出状況（南東から）



写真53 IVa層水田跡 畦畔5確認作業

左側はIVa層上面の検出状況（北東から）



写真54 IVa層水田跡 畦畔5確認状況

左側はIVa層上面の検出状況（北東から）

写真55

IVa層水田跡

北部の確認状況

（北から）

横に伸びる黒っぽい帯

が東西畦畔、周囲はⅢ層

南（奥）側はIVa層上

面を検出済



写真56

IVa層水田跡

検出状況（北から）

白色の帯は灰白色火山灰



写真57 IVa層水田跡 水田面の状況（1）

IVa層面に帯状の火山灰が食い込む



写真58 IVa層水田跡 水田面の状況（2）

帯状の火山灰を除去した状況



写真59 VII層水田跡 西部の確認状況（南西から）



写真60 VII層水田跡 西部の検出状況（南西から）



写真61 VII層水田跡
水口と水田面の窪み（南から）



写真62
VII層水田跡
東部の検出状況（北から）



写真63 基本層序1（北東壁）

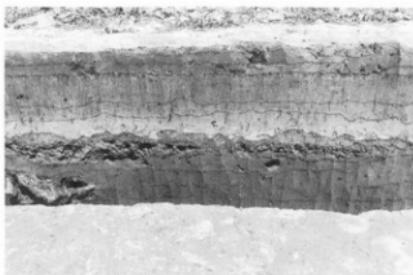


写真64 基本層序2（北東壁）

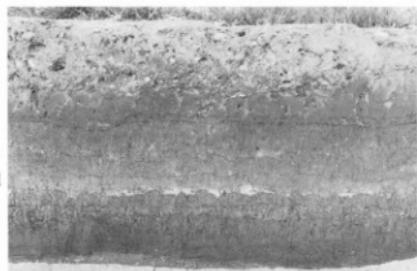


写真65 III層水田跡 畦畔3断面（北東壁）



写真66 IVa層水田跡 畦畔5断面（北東壁）



写真67 IVa層水田跡 畦畔4断面（南西壁）
VII層水田跡 畦畔5断面



写真68 VII層水田跡 畦畔1断面（北東壁）



写真69 VII層水田跡 畦畔6断面（北東壁）

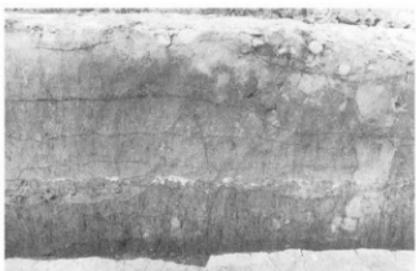


写真70 VII層水田跡 畦畔3断面（北東壁）



写真71 VII層水田跡 畦畔4断面（北西壁）



写真72 SR1 中央トレンチ断面



写真73 1区Ⅲa層水田跡 出土遺物



写真74 1区Ⅳ層水田跡 出土遺物

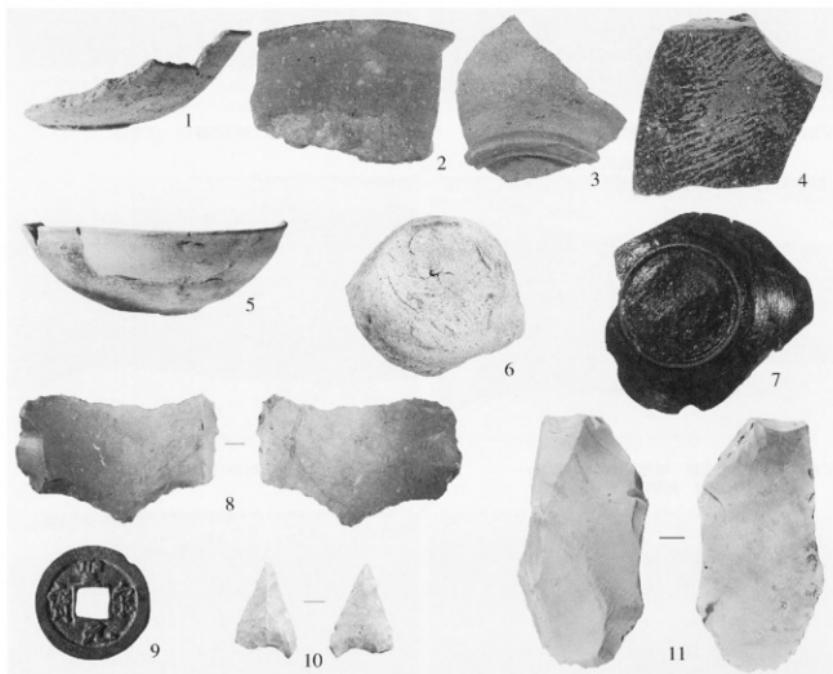


写真75 2区SR1 出土遺物

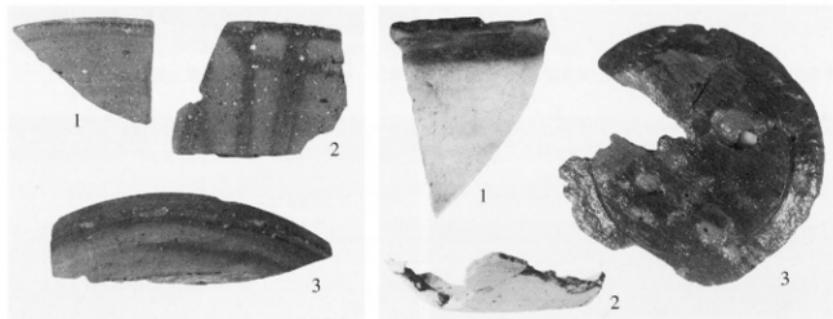


写真76 2区Ⅳa層水田跡 出土遺物

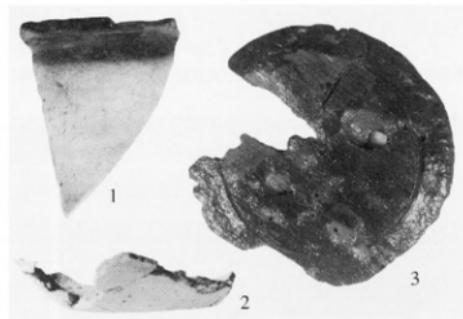


写真77 2区VI・VII区層 出土遺物

第III章 第5次調査

第1節 調査方法

調査区は郵便局庁舎予定地に2ヶ所、建物の方向に合わせて設定した。西から1区、2区とし、大きさは1区が約 $20 \times 40\text{m}$ (805m^2)、2区が約 $10 \times 40\text{m}$ (389m^2)である。調査は一部日程が重複するが1区、2区の順に実施した。

各調査区とも周辺はすでに $1.5 \sim 2\text{m}$ 程に盛土されているため、まず重機によって調査区よりも一回り大きく盛土を除去し、次いで盛土以前の現代水田耕作土下部まで重機によって除去している。調査にあたっては、調査区の周囲に土層観察用と排水用を兼ねた側溝を設け、断面観察によって水田耕作土の可能性の高い層やその他の遺構面を確認しながら掘り下げた。

1区では水田耕作土が遺存していなかったため層途中においての精査は行わず、V層上面での精査を行ったのみである。2区ではⅢa・Ⅲb層が水田耕作土と推定されたので、それぞれの直上層の途中で畦畔確認のための精査を行い、層上面検出後に再度精査を行っている。

基準杭は調査区の方向に合わせた任意の方向で設置し、10mグリッドを組んだ。平面直角座標系Xにおける座標値は1・2区については以下のとおりである。

1区 杭A : X=-198164.597m・Y=777.493m、杭B : X=-198142.448m・Y=797.738m

2区 杭C : X=-198031.273m・Y=885.169m、杭D : X=-198009.134m・Y=905.414m

遺構の平面図は基準杭を利用して簡易造り方を組み、1/40あるいは1/20で作成した。断面図は1/20で作成した。写真は35mmモノクロとカラーリバーサルで撮影している。遺物は各遺構あるいは層ごとに取り上げている。

第2節 1区の調査

1. V層上面

I層を重機で除去したところⅡ・Ⅲ層は調査区の西コーナー付近に薄く認められるだけであった。調査区の大部分はIV層が途切れながら分布し、IV層の分布が途切れでV層が露出している箇所では倒木痕が多数認められた。倒木痕のプランはIV層よりも下層であったので、次にIV層を除去してV層上面において精査を行った。

V層上面で確認できた遺構は調査区南部に位置する土坑3基（第31図）のみである。また、遺物はI層中から出土したのみで、このうち石器4点が同化できた（第37図）。

1号土坑-S K1

調査区南端部に位置し、SK3を切っている。一部は調査区外となっているが長軸2mほどの長方形と推定され、深さは約60cmである。堆積土は基本層Ⅲ・Ⅳ・V層の小ブロックの混合土であるので一度に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土せず、年代や性格も不明である。

2号土坑-S K2

調査区南部に位置する。大きさは $1.2 \times 0.8\text{m}$ の長方形で、深さは約20cmである。堆積土の最下層はブロックの混合土で掘り方の埋め土と考えられ、その上に厚さ2~3cmの木炭の層が認められた。遺物は近世以降の磁器片が1点出土したのみである。何らかの焼成遺構と推定されるが性格は不明である。

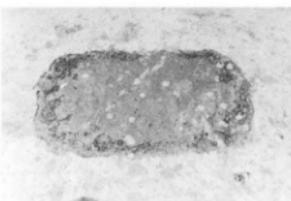


写真78 1区SK2 確認状況

3号土坑—SK3

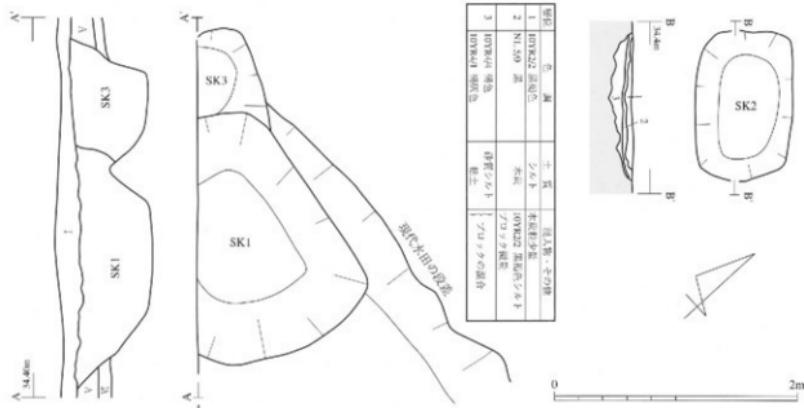
調査区南端部に位置する。SK1に切られ、一部は調査区外となっているため平面形や規模は不明である。深さは約60cmで、堆積土は基本層Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の大きなブロックの混合土であるので一度に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土せず、年代や性格も不明である。

この他、調査区のほぼ中央に東西方向の帯状の高まりがあったが、調査区壁面の観察によってこれは現代水田に係わる擬似畦畔Bであることが判明した。また調査区南部の東西方向の段差と西部にある南北方向の溝も同じく現代水田に係わるものである。

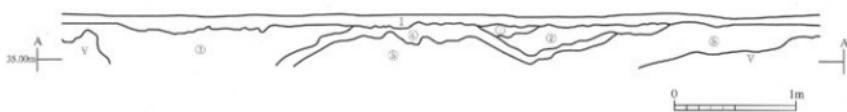
倒木痕はV層が広範囲に浮き上がり、その隙間にⅣ層あるいはⅣ層に類似した黒色の粘土が入り込んだものである。切り合いや重複があるため正確な数は把握できなかったが25箇所ほどが認められ、数カ所で断ち割りを行ってみたが、人為的に掘り込まれた土坑はなく、すべて倒木痕であることが確認でき、なおかつ遺物も皆無であったのでそれ以上の調査は行わなかつた。



写真79 倒木痕の堀り込み

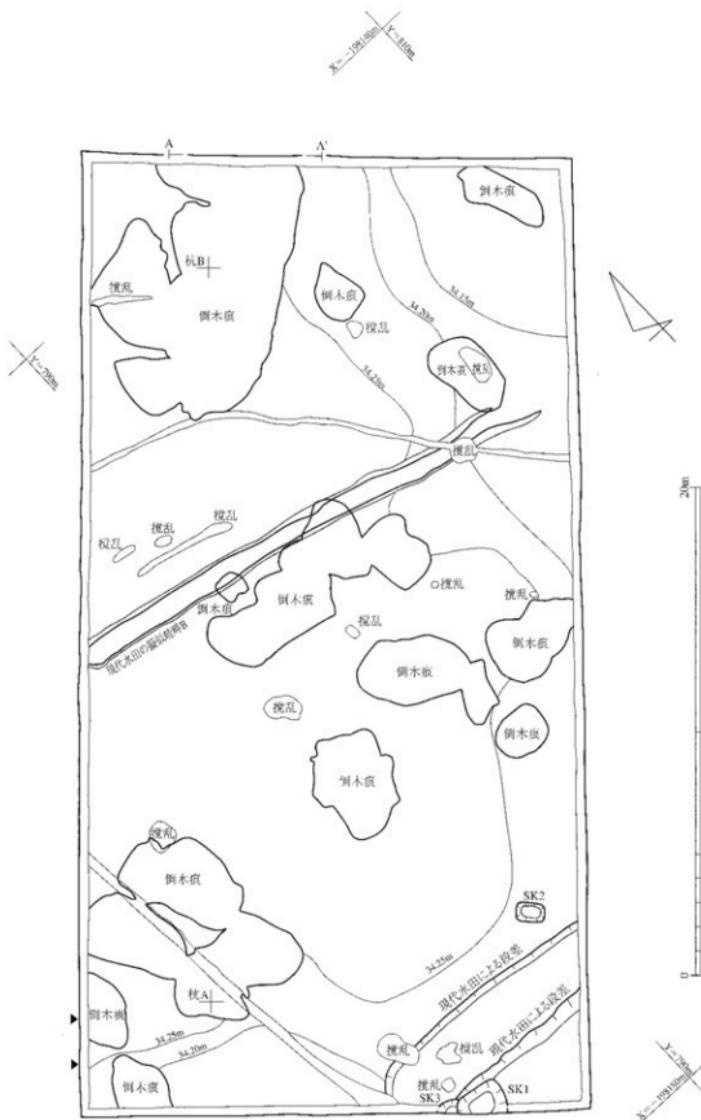


第31図 SK1~3 平面・断面図



層位	色 調	土 質	入 し 物 ・ そ の 他
①	E0YR2 黒褐色	砂土	
②	2.5 Y4/2 黄灰褐色	砂砂	黄褐色粘土ブロック、褐色シルトブロック、暗灰褐色細砂ブロック多量
③	2.5 Y5/2 黄褐色	砂土	黄褐色粘土ブロック、黒褐色シルトブロック、暗灰褐色細砂ブロック多量
④	E0YR2/1 黒色	砂土	鳥文式の陶化瓦少量
⑤	2.5 Y3/2 黑褐色	砂砂	灰青褐色粘土ブロック少量、管状の陶化瓦少量

第32図 倒木痕断面図



第33図 V層上面 平面図

▼は第6図の断面の位置

第3節 2区の調査

1. III a層水田跡

III a層上面では畦畔を検出できなかったが、擬似畦畔Bを確認したのでIII a層水田跡とした。なお、層上面には現代水田（I層）に係わる段差や溝が認められ、層の遺存状況はあまり良くない。

(1) 耕作土

耕作土は基本層III a層で褐色灰色の粘土である。調査区のはば中央を南北に走る擬似畦畔B（後述）の西側にのみ遺存している。厚さは5cm前後であるが、これは直上のII層（水田耕作土と推定）によって攪拌・削平された結果と考えられる。下面は凹凸が激しい。

(2) 畦畔

直上のII層中では畦畔は確認できなかったが、III a層上面において幅45~85cmのIV層の帶上の高まりを2条確認した。方向はほぼ真北とそれに直交している。IV層は自然堆積層であることからこれはIII a層の耕作に伴う擬似畦畔Bと判断した。なお、本来この擬似畦畔BはIII b層水田の耕作によって形成されたものであり、これがIII a層段階まで攪拌されずに遺存していたことから、III a層水田の畦畔はIII b層水田の畦畔を踏襲していたと類推できる。



写真80 擬似畦畔B (No.2) 確認作業

(3) 水田区画

確認できたのは畦畔ではなく擬似畦畔Bのみであつた。擬似畦畔Bはすべての畦畔に対応するものではないので、水田区画については全く不明である。

(4) 水田面の標高と傾斜

III a層が調査区の西半しか遺存しないため水田面の傾斜等は部分的にしか判らないが、このあたりの表層地形と同様に北西方向から南東方向へ傾斜している。なお、水田面の標高は34.78~34.87mで、勾配は8cm/10mである。区画内の比高差については不明である。

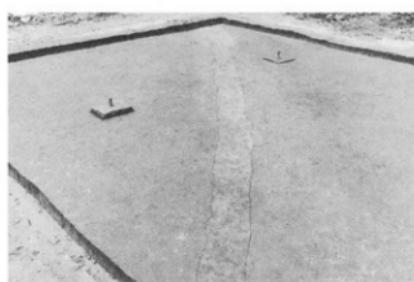


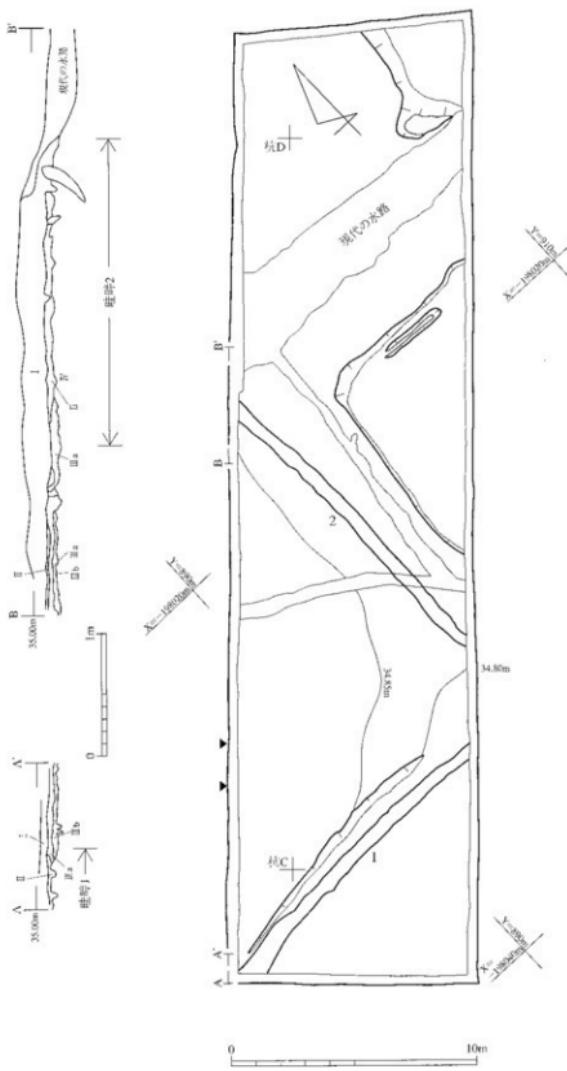
写真81 擬似畦畔B (No.1) 確認状況

(5) 出土遺物

耕作土中からは石器3点が出土し、III a～III b層中から須恵器片2点と石器2点が出土したが、遺構に伴う遺物は確定できなかった。図化できたのはIII a層中の石器2点とIII b層中の石器2点（第37図3～6）である。

No.	方 向	高さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(m)	備考
1	N-E'~E	[12.4]	45~85	—	—	畦畠の盛り上がり、擬似畦畔B
2	N-E'~W	[13.0]	45~65	—	—	畦畠の盛り上がり、擬似畦畔B

表15 III a層水田跡 畦畔計測表



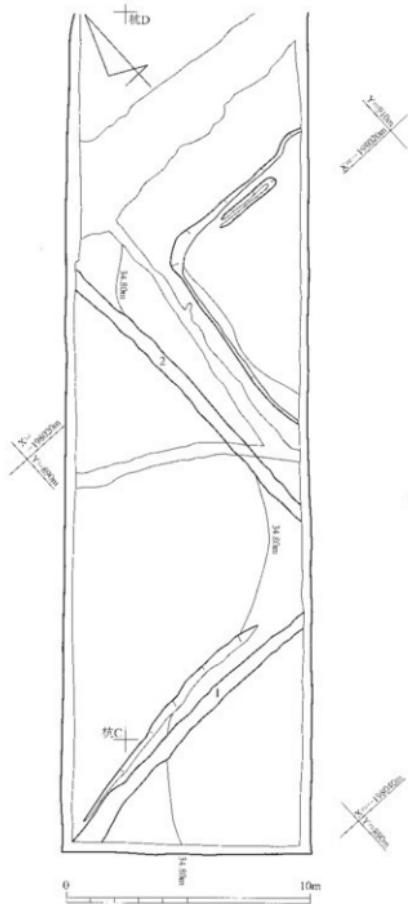
第34図 IIIa層水田跡 平面・断面図 ▼は第6図の断面の位置

2. III b層水田跡

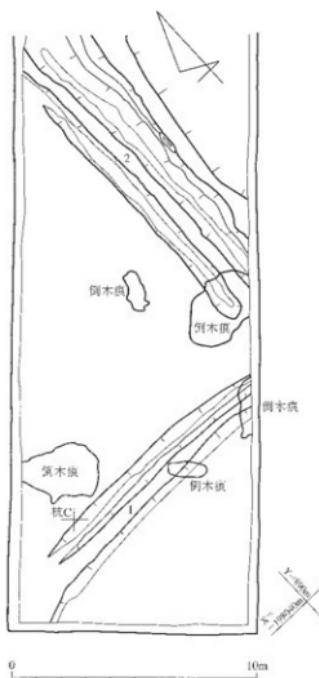
III a層と同じく層上面において畦畔は確認できなかったが、擬似畦畔Bの存在からIII b層水田跡とした。

(1) 耕作土

耕作土は基本層III b層で黒褐色の粘土である。調査区の中央からやや北側にある現代の水路と調査区南部にある東西方向の擬似畦畔Bとの間に分布している。厚さは5cm前後で下面は凹凸が激しい。III a層同様に現代水田の耕作による影響が残る他、直上のIII a層水田の耕作による擾拌・削平も受けしており、遺存状態はあまり良くない。



第35図 III b層水田跡 平面図



第36図 IV層上面 平面図

No.	方 向	長さ(cm)	上端高(cm)	下端高(cm)	溝深(cm)	備 考
1	N-87°E	(15.4)	78-75	110-125	5-8	弧状地形B、片側に溝を伴う
2	N-1°W	(13.0)	50-50	90-120	6-9	弧状地形B、両側に溝を伴う

表16 IV層上面擬似畦畔B計測表

(2) 畦畔

畦畔は確認できなかったが、III a層上面において確認した擬似畦畔BはIII b層水田の畦畔にも伴っている。

(3) 水田区画

III a層水田跡と同様に水田区画については全く不明である。

(4) 水田面の標高と傾斜

III b層が遺存する部分の傾斜は北西方向から南東方向で、水田面の標高は34.61～34.84m、勾配は17cm／10mと比較的急である。区画内の比高差については不明である。

(5) 出土遺物

III a層で述べたように遺構に伴う遺物は確定できなかった。

(6) 耕作土下面の状況

III b層の精査終了後耕作土を除去してIV層上面を検出し、III a層の段階から確認できていた擬似畦畔Bの全体を検出した。東西方向のNo1は北側に接して幅約90cm、深さ約5cmの溝を伴い、南北方向のNo2は東西両側に同様の溝を伴っている。これは畦畔を造る際に畦畔の側を掘り下げて盛り上げた痕跡と推定される。

なお、このIV層上面では倒木痕を4箇所確認したが、I区の調査では成果が得られなかつたので、その結果を受けて精査は行わなかつた。

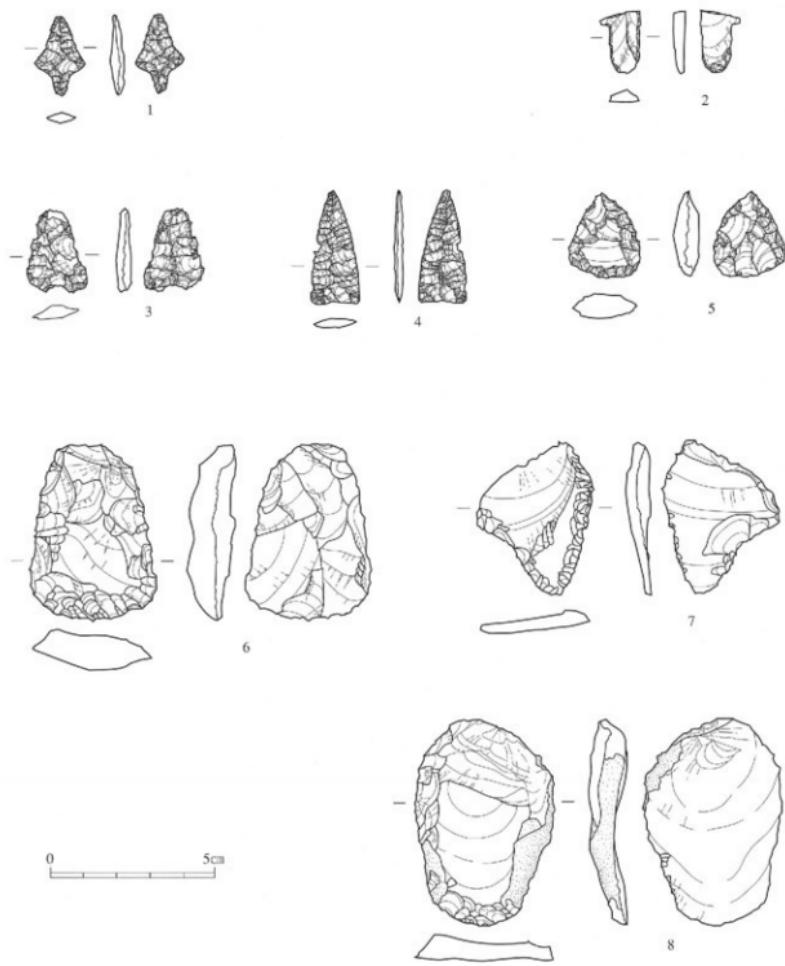


写真82 IV層上面の検出作業



写真83 2区から南方を望む

第3編 山田条里遺跡（第4次・第5次調査）



No.	号	遺跡	出土地区・層位	種類	走査波	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	96-1	1区 1層		石器	定形	34.0mm	14.5mm	3.5mm	0.8g	研磨直石
2	96-2	1区 2層		刮片	邊部欠損	19.0mm	12.0mm	3.6mm	0.8g	研磨直石
3	96-3	2区 Ⅱa層		石器	先端一部欠損	25.0mm	18.0mm	4.6mm	1.8g	直石
4	96-4	2区 Ⅱb層		石器	12.2定形	34.2mm	14.5mm	2.5mm	1.4g	直石
5	96-5	2区 Ⅱb層		石器	定形	26.0mm	21.5mm	7.5mm	4.0g	直石
6	96-6	2区 Ⅱa層		石器	定形	34.0mm	39.0mm	14.0mm	27.0g	直石
7	96-7	1区 1層		刮片	定形	47.0mm	36.0mm	7.0mm	7.4g	直石
8	96-8	1区 1層		石器	定形	63.0mm	42.0mm	11.0mm	26.7g	直石

第37図 第5次調査出土遺物

第4節まとめ

1. 5次調査区は遺跡の中央からやや北に寄って位置する。1・2区共に1次調査における平成2年度調査区に近く、また1区は2次調査B区に近接している。

過去の調査では水田耕作土は認められるものの層厚が薄く、畦畔の遺存状況は極めて悪い例が多かったが、今回も同様であった。これはこの付近に4次調査2区のような小河川が存在しないため土砂の供給量が極めて少なく、古代から現代に至るまでの長期間にわたって安定した場所であったためと考えられる。このように、水田經營には良好な地形環境にあったため堆積がほとんど進行せず、このため下層の水田跡は上層の水田による攪拌・削平の影響を直接に強く受ける結果となった。

2. 2区で検出した水田跡は層相からすると平安時代に属する可能性がある（第1章第3節基本層序の項参照）。方向は東北を基準としており条里型土器と関連も窺えるが、遺物がほとんどなく灰白色火山灰も確認できなかつたため年代は確定できなかった。

3. これまでの調査では绳文時代の遺物包含層が確認されているが、今回も希薄ながらもそれに対応すると考えられる層を確認することができた。この層中からは遺物は出土しなかつたが、これより上の層からは少數の石器が出土している。

遺構・部位	縄文土器	土器	部	陶器	土器質土器	瓦質土器	陶	器	石	器	鉄製品	その他
I層	4	33	9	11		2	10%	89	13	14	角鉢2	鐵製品(12, 14件)(一般・大正2年)
SK2. 1層	4	33	9	11	1	2	10%	81	13	14	2	土器足2, 鉄製品11
計	4	33	9	11								6

表17 1区遺物集計表

遺構・部位	縄文土器	土	器	陶器	土器質土器	瓦質土器	陶	器	石	器	鉄製品	その他
I層		16	7	8	2	1	43	36	1	1		
II層				2								
III層												
IV層・V層				2								
VI層・VII層												
計	10	1	7	12	2	1	43	36	1	7		

表18 2区遺物集計表

引用・参考文献

- 主浜光朗 1999 「山田条里遺跡（第2次・第3次調査）」「陸奥国分尼寺跡ほか 発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第238集 仙台市教育委員会
- 庄子貞夫・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」「多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報」宮城県多賀城跡調査研究所
- 神 英夫 1988 「辺境条里的分布と形態について」『条里制研究第4号』条里制研究会
- 半間亮輔 1995 「仙台市における埋没条里」『条里制研究第11号』条里制研究会
- 渡部弘美 1993 「山田条里遺構」「仙台平野の遺跡群Ⅲ 平成4年度発掘調査報告書」「山田条里遺構発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第170集 仙台市教育委員会



写真84 1区SK2 断面（南西から）

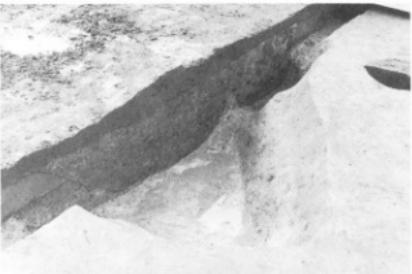


写真85 1区SK1・3 完掘状況（南から）



写真86 1区V層上面 南西部の清掃作業（南東から）



写真87 1区V層上面 北東部の清掃作業（南東から）



写真88 1区V層上面 西部の倒木痕（南西から）



写真89 1区V層上面 南西部の検出状況（南東から）



写真90 2区Ⅲa層水田跡 南西部の確認作業

中央の畦畔は擬似畦畔B（南東から）

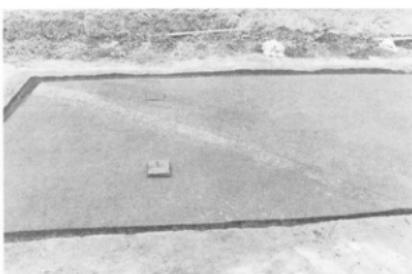


写真91 2区Ⅲa層水田跡 南西部の確認状況

中央の畦畔は擬似畦畔B（南東から）

写真92

2区Ⅲb層水田跡 検出状況
(南西から)
手前の畦畔は擬似畦畔B



写真93

2区Ⅳ層上面 検出状況
(南西から)
帯状の高まりは擬似畦畔B

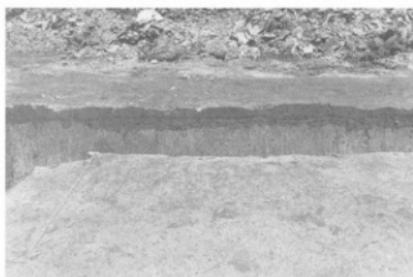


写真94 Ⅲa・Ⅲb層水田跡 擬似畦畔B断面
左端が擬似畦畔B (北西壁)

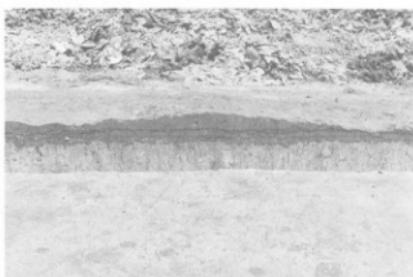


写真95 基本層序 (北西壁)

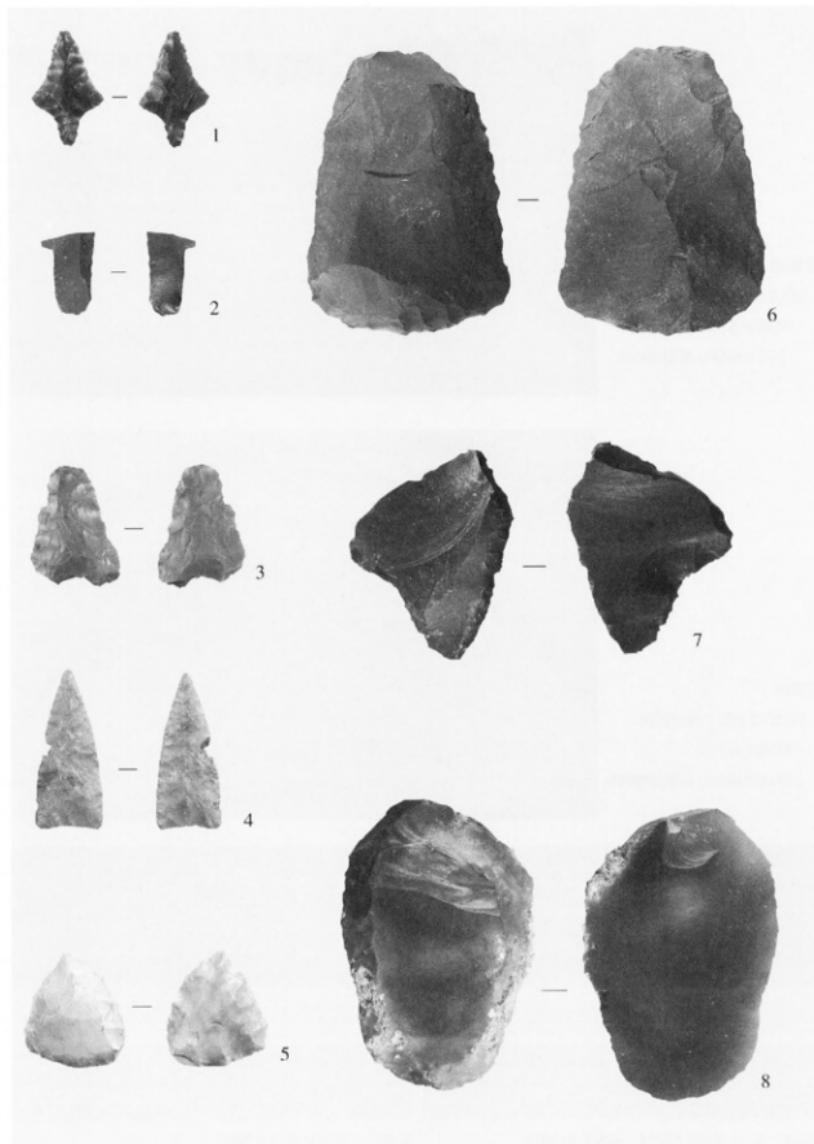


写真96 出土遺物（1・2・7、8—1区I層、3・6—2区IIIa層、4・5—2区IIIb層）

第4編 山口遺跡（第16次調査）

1. 調査要項

遺 跡 名 山口遺跡（宮城県遺跡番号01178）

調 査 地 点 仙台市太白区富沢一丁目14-4, 8

調 査 原 因 マンション建設

調査対象面積 約668m²

調 査 面 積 約295m²

調 査 期 間 平成11年4月12日～平成11年6月2日

担 当 職 員 佐藤洋・高橋綾子・吉田和正

調査参加者 菊地富子・谷津ミツ子・佐藤利子・本郷正・入間川きみ・小林国子・阿部美代寿・佐藤よしあ・早坂みえ・加藤由利・阿部洋子・菅井清子・渡部麗子・見野コトジ・菅井君子・小畠和子・工藤キク子・佐々木志津子・水野信子・日野きみ子・上野美子・後藤靖子・小沼ちえ子・渡部洋子・鈴木みよ子・佐藤ケイ子・佐藤としき・相原実・相馬美由紀・小島いく子・小野妙子

申 請 者 庄子俊明

調 査 協 力 横間組

2. 遺跡の位置と環境

山口遺跡の第16次調査地点は、仙台市地下鉄富沢駅の北西約600mの太白区富沢一丁目地内に位置し、名取川の支流の笊川北岸の自然堤防上に立地するが、北部は後背湿地となっている。この後背湿地は、隣接する富沢遺跡へ連なっていく。遺跡内では、南側自然堤防上で縄文・奈良・平安・中世の集落跡が、北側後背湿地部では弥生ー近世の水田跡が検出されている。遺跡の周囲には、富沢遺跡・教塚古墳・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・富沢館跡等がある。また、今回の調査地点には字界が位置しており、南側が「字山口」・北側が「字教塚」となっていた。今回、調査区内で検出した堀跡（S D01）が、ちょうど字界を示すものであったと考えられる。

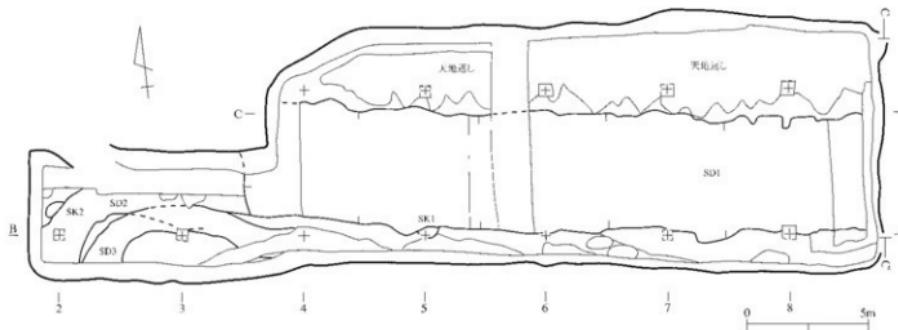


第1図 調査区位置図(1) 土地区画整理以前 (1/6000)



第2図 調査区位置図(2) 現在 (1/5000)

第4図 山口遺跡（第16次調査）



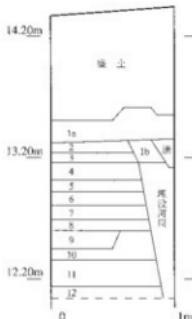
第3図 調査区全体図

3. 調査に至る経過と調査方法

平成10年8月5日付で、仙台市太白区富沢3丁目3-22¹²⁾子俊明氏より同区富沢一丁目14-4・8にRC4階建共同住宅建設の発掘届が提出された。この場所は本遺跡西部に位置し、西側は富沢遺跡と接している。過去の調査から、自然堤防上の集落跡発見地点に連なる地区であると予想された。このため、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うこととした。平成11年4月12日より調査を開始し、建物建設予定地に約300m²の調査区を設定、盛土を重機により除去した。その後は、人力による精査を行った。

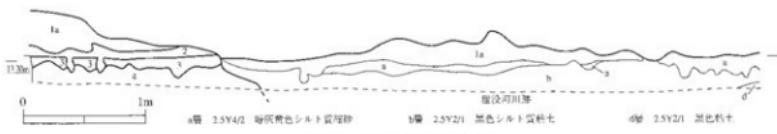
4. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚約0.9m）下に大別12層、細別では17層の層序を確認した。1層は土地区画整理以前の水田耕作上であるが、下部は水田ではなく湿地帯だったのか、溝状の落ち込みがあるなど複雑な堆積状況を示す。また、SD01より北側では天地返しが行われたようで、1層の下は搅拌された状態の所が多い。2~5層はシルト～シルト質粘土であり、3層は黒褐色の色調を呈す。6~8層は黒褐色系の粘土層であり、6・7層は水田耕作土の可能性があるかもしれない。また、砂や礫を含むが、特に8層に多い。9・10層は細砂層で、水の影響によるものであろう。ラミナ状に粗砂や小砾が密集する所があり、その中に土師器が混入している場合もある。9層以下では、グラウイ化が強まる。11層は極めて黒い粘土層であり、縄文土器が少量出土している。縄文時代の遺物包含層と言えるかは判断できなかった。12層も黒い粘土層で、風化礫が混じるようになる。なお、北側では天地返しのさらに下層では、基本層と異なる埋没河川とみられる堆積層が厚く認められ、北側へ傾斜していくようである。

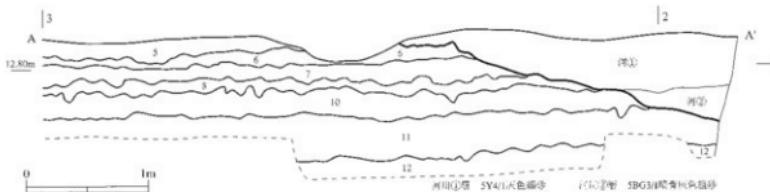


第4図 基本層序模式図

層名	層	備
1a	2.5Y4/2	黒褐青色粘土質シルト
1c-f	2.5Y4/2	暗灰青色シルト質疊上など
2	10YR4/2	黒褐青色シルト質疊上など
3	10YR3/2	黒褐青色シルト質粘土
4	10YR4/2	黒褐青色粘土質シルト
5	10YR3/0	黑褐色シルト
6	10YR3/0	黑褐色粘土
7	10YR3/2	黑褐色粘土
8	10YR3/1	黑褐色粘土
9	7.5GY2/0	暗紅褐色疊上
10	5GY4/0	褐オーブ状粘土
11	10YR1/0	褐灰色土
12	5Y2/2	4-7层と同色



第五図 南壁断面図(東部)



第六図 南壁断面図(西部)

5. 発見遺構と出土遺物

遺構検出面は1層を除去すると、西部で5層、中央部で4層、東部で3層面となり、遺構の検出面が複数の層にまたがる場合がある。ここでは、層位別ではなく、単に遺構別に記述していく。

(1) 土坑

S K01 (第7図)

調査区中央B-5ポイントに位置し、4層上面（1層下）で検出した。S D01や現代の小溝に切られ、残りが悪い。規模は0.8m×0.62m以上、深さ20cmで、平面は陥凹形と予想され、断面は皿状を呈する。遺物は、ロクロ使用の土師器甕の小片が2点出土したが、時期決定資料とみてよいか判断できない。

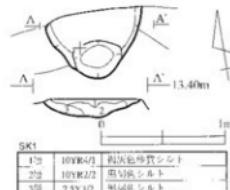
S K02 (第8図)

調査区西端B-1・2区に位置し、埋没河川跡上面で検出した。S D02に切られる。形状は不整形で、底面も凹凸が著しい。規模は0.95m以上×0.79m、深さ28cmである。遺物はロクロ使用の内黒土師器壺小片2点が出土したが、時期決定資料とみてよいか判断できない。

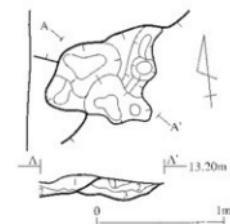
(2) 溝跡

S D01 (第3・9図)

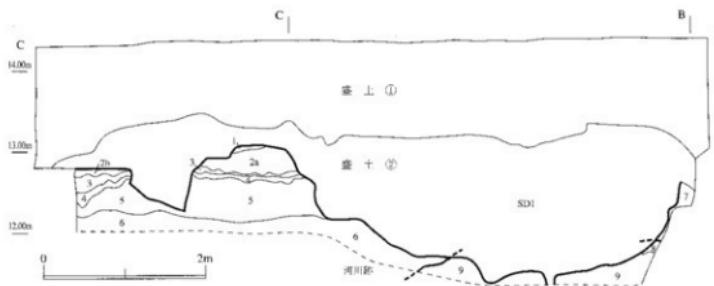
調査区の中央を東西に伸びる大溝で、近年まで機能していた。この溝の開削時期は不明だが、近世まで遡る可能性もあることから遺構登録した。3～5層上面で検出した。規模は幅4.5～5m、深さ約1.6m、方向はN-83°～Wである。この規模は重機による改修後のもので、当初の溝の規模は不明である。遺物は、漸戸・美濃等の近代陶磁器が最も多いが、次いで近世の肥前磁器や人堀相馬・堤焼等の陶器（18



第七図 S K01平面・断面図



第八図 S K02平面・断面図



第9図 SD01断面図（埋没河川跡）

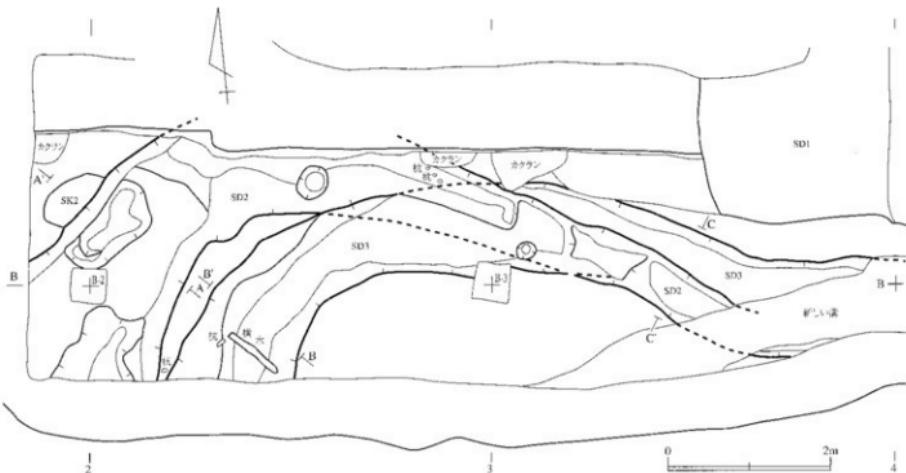
柱記入SD01断面C-C'

層名	特徴	層号	層名	特徴	層号
層上1	最近の土地利用跡の層+	4	2.5Y2/1	褐色粘土	砂質層
層上2	上層段丘疊出前から深成灰色	5	SY4/1	褐色圓形	細砂、塊、板状河川跡
1	2.5Y6/4 に少し紫色細砂	6	SU/Y3/1	褐色土→灰色砂礫層	耕作地に黑色粘土を含む、埋没河川跡
2a	2.5Y4/2 埋没黄色シート質砂鉄	7	2.5GY3/1	褐色土→灰色細砂	砂土を含む、上部に細砂、埋没河川跡
2b	2.5Y5/1 埋没色シート質粘土	8	2.5Y3/1	黑褐色粘土	耕作地がある
2	SY3/1 オリーブ褐色粘土	9	10Y3/1	モリーブ褐色粘土	植物を含む、緑まりがある

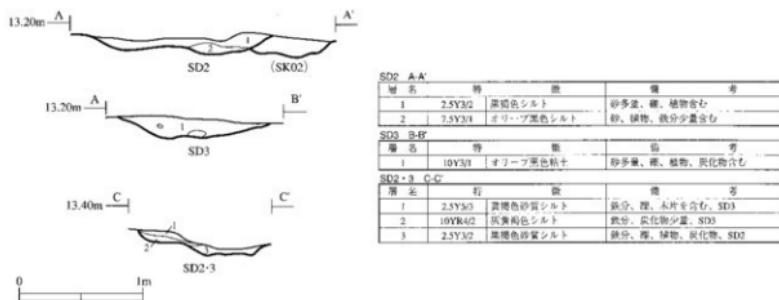
～19世紀)が出土している。他には、中世陶器(古瀬戸)や古代の土器須恵器等も出土している(写真11)。なお、この溝は西側では、北西方向に向きを変えて伸びていくようである。また、前述したようにこの大溝跡が「字界」になっていた可能性がある。

SD02 (第10・11図)

調査区西部A-B-1~3区に位置し、5層上面や埋没河川上で検出した。ちょうど、方向を変える屈曲部約11mを検出した。規模は幅0.55m~2.0m、深さ最深28cmで、両者とも一定していない。遺物は瀬戸・美濃染付磁器(碗・徳利?)、岸島系灰釉鉢(写真11)が出土し、前者は19世紀、後者は17世紀代であろう。他に、土師器・須恵器小片が多く出土している。SD03に切られ、SK02を切る。



第10図 SD02・03平面図



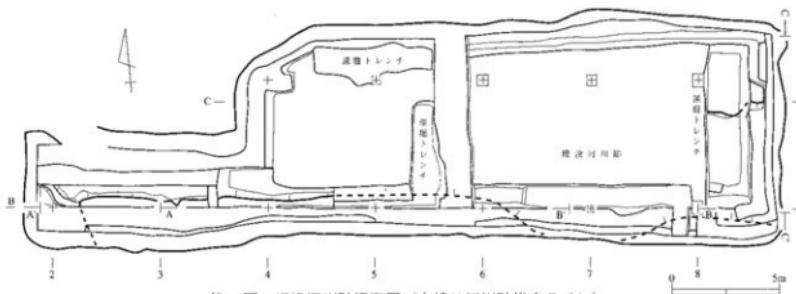
第11図 SD 02・03断面図

SD 03（第10回）

調査区西部A・B-2・3区に位置し、5層上面や埋没河川上で検出した。SD 02と同様、溝跡屈曲部約9mを検出した。この溝もSD 02と同様、東と南へ伸びていく。規模は、幅1.0~1.4m、深さ約18cmである。南端の横木検出付近では、深さ約32cmと深くなる。SD 02を切っている。遺物は、土師器・須恵器小片が出土しているが、時期決定資料はない。SD 02を切るが、類似した特徴をもつことから、時期差はあまりないものと予想される。

(3) 埋没河川跡（第9・12回）

調査区全域に広がる。河川跡の輪郭は調査区南壁寄りで検出したが、北側の輪郭は調査区外になり規模は不明である。調査区内では4・5層上面で検出し、幅は9m以上となるが、深さは不明（深さ1.2mまで確認）である。上層部で、土師器や赤焼土器の壺、須恵器壺・甕の小片が少量出土している。時期は、平安時代以前の河川跡であろう。



第12図 埋没河川跡平面図（点線は河川跡推定ライン）

その他の出土遺物

基本層では、1層で附磁器（近世～近代）や古代の土器類、瓦質・土師質土器、瓦等が出土した。2~4層は遺物の出土量が極めて少ない。6層では、古墳時代（中期～後期頃）の土師器片が50点と比較的多く出土した。9層でも僅か1点だが、土師器壺片が出土した。11層では繩文土器小片が5点出土している。この土器はいずれも地文のみで時期が明確ではないが、薄手である点や地文が小さいことから後期以降の可能性が考えられる。この他に、中世陶器5点（在地2・古瀬戸3）や中国錢（景祐元年）、模押人形片や漆器碗片等が出土している。

6.まとめ

- ①今回の調査地点では、土地区画整理以前に、水田の土壤改良や用水堀（SD01）の改修を目的としたと考えられる重機による大規模擾乱が、調査区の大部分に及んでいることが判明した。
- ②擾乱を免れた南壁寄りで、江戸期～明治初期頃の溝跡2条、古代～近世の間の土坑2基を検出した。さらに下層では、規模が明らかではないが、平安時代以前と考えられる理没河川を確認した。
- ③断面観察によるが、基本層6・7層は水田跡の可能性があるかもしれない。
- ④基本層の6層が古墳時代（中期～後期頃）の、11層が縄文時代（後期頃か）の遺物包含層と考えられる。

参考文献

- 工藤哲司・太田昭夫 1988 「富沢遺跡24次調査富沢中学校地区発掘調査報告書」 仙台市教育委員会
中富洋・他 1991 「山口遺跡第9次・10次発掘調査報告書」 仙台市教育委員会



写真1. 調査区全景



写真2. 基本層序（南壁）



写真3. SK01全景

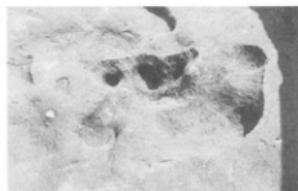


写真4. SK02全景



写真5. SD02・03全景



写真6. 東部深掘（SD01・埋没河川跡）



写真7. 埋没河川跡断面



写真8. 土師器環（1層・古墳時代）



写真9. 土師器環（SD01・平安時代）



写真10. 赤焼土器環（北部擾乱・平安時代）



写真11. 出土陶磁器（上段中世・中下段近世）



写真12. 縄文土器（上段SD01・下段11層）

報告書抄録

ふりがな	ごほんまつかまあとほかはっくつちょうさはうこくしょ						
書名	五本松窓跡ほか発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第247集						
編著者名	森原信彦・佐藤 洋・工藤信一郎・平間 光輔・豊村 幸宏						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893・8894						
発行年月日	2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号							
五本松窓跡 第3次調査	宮城県仙台市青葉区 白厘森林公園 703番6地内	04100 01047	38°17'03"	140°52'53"	1999.08.23 1999.09.02	160m ²	台原けん銃射撃場跡等造成
陸奥国分尼寺跡 第9次調査	宮城県仙台市 若林区白坂町23	04100 01020	38°14'55"	140°54'44"	1999.05.24 1999.07.02	200m ²	集合住宅建設工事に伴う事前調査
山田条里遺跡 第4次調査	仙台市太白区 山田町中野0-1外	04100 01367	38°12'47"	140°50'24"	1999.06.11 1999.09.02	1,700m ²	店舗建設
第5次調査	仙台市太白区 鶴巣字谷日ヶ外	04100 01367	38°12'54"	140°50'34"	1999.05.11 1999.06.11	1,200m ²	郵便局庁舎建設
山口遺跡 第16次調査	仙台市太白区 富沢一丁目	04100 01178	38°12'54"	140°52'08"	1999.04.12 1999.06.02	295m ²	マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項			
五本松窓跡	窓跡	平安	窓跡	土器器 須恵器			
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良・平安	聖穴住居跡・溝跡 小溝状遺構	土師器・須恵器 瓦	須恵器の水瓶		
山田条里遺跡	水田跡	古代・中世 近世	水田跡	土師器・須恵器 赤焼土器・石器	火山灰下の水田跡 砂礫層下の水田跡		
山口遺跡	集落跡 水田跡	縄文 古代～近世	土坑 溝跡	出土品一覧表 立賀古墳群			

仙台市文化財調査報告書第247集

五本松窯跡ほか

発掘調査報告書

2000年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 (022)214-8893

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市青葉区若竹1丁目1-14

TEL 231-2343

